

# 湯浅年子公開資料目録

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター

2009(平成21)年3月



湯浅  
年子

# 序

日本のマリー・キュリーと称される国際的物理学者の湯浅年子は、物理学の研究のみならず、『パリ随想』などの随筆によって戦後日本の学生たちに大きな影響を与え、女性自然科学者のシンボリック的存在であった。

湯浅年子が1980年パリで逝去し、翌年の1981年に、甥にあたる市井敏夫氏が、山崎美和恵埼玉大学教授を介して、和田正徳本学図書館長兼女性文化資料館長（当時）に遺品資料寄託の照会があり、同年10月に段ボール87箱に詰められた資料が届けられたのは、いまからもう27年半も前のことになる。

当時、本学理学部「物理学史」の非常勤講師を務めていた八木江里東洋大学教授、阿部裕子大学院助手、松田久子理化学研究所非常勤職員が直接の整理に携わり、1983年からは松田久子氏がほとんど一人で整理にあたられ、『湯浅年子資料目録』（1993）、『湯浅年子資料目録 続』（1998）を刊行した。これらの目録は、まず膨大な資料が「保存されていた束のまとまり」を忠実に記録した、資料整理目録と言ってよい性格のものであった。目録作成後、いろいろな分野の資料閲覧希望者が訪れ、公開・非公開の判断を著作権者に確認する作業も、図書館への問い合わせも増えていった。このような状況から、利用しやすい形に再分類し、公開できる資料を選定する必要が生じていた。

このたび『湯浅年子資料公開目録』を刊行したのは、このような利用者の要望に応える意味と同時に、本学附属図書館による知的財産の公開という目的により、先駆的女性科学者資料のウェブ公開という、公開性の高い情報提示事業を開始したことが契機となった。従って、この目録には、湯浅年子の写真、スケッチ、短歌を詠んだ色紙などの映像のアイコンも掲載されている。このような新たな資料利用方法の実現を推進された、羽入佐和子本学図書館長・副学長、その具体化を進められた茂出木理子図書・情報チームリーダーに敬意を表する次第である。

『湯浅年子資料公開目録』の作成については、湯浅年子の愛弟子にあたる山崎美和恵埼玉大学名誉教授が、定年退職後、精力的に保管キャビネットに収められた資料を整理して読み解いた、得難い仕事によって成し得たものであるといっても過言ではない。山崎教授は、『湯浅年子—パリに生きて』（みすず書房、1995年）や『ジュニア新書 パリに生きた女性科学者 湯浅年子』（岩波書店、2002年）ほか、いくつもの湯浅年子に関する著作や論文、随筆を世に送りだした。その功績は、かつて湯浅年子に憧れ、薫陶をうけた世代の人々のみならず、すでに湯浅年子の名を知らない世代にも、素晴らしいメッセージを送ることとなった。

今にして、湯浅先生からのメッセージが、段ボール87箱にとどまるものではなく、途方もなく膨大なものであったと、ある種の驚きをもって認識している。

その驚きとは、「人が死して、なお人を動かす」ということである。湯浅先生と生前に直接交流した方々は、自分が生きている故の責任でもあるかのように、彼女を決して忘れず、行動し続ける。それは、湯浅先生と直接出会ったことがなく、湯浅資料を介して出会った人々も、同じように一生懸命になる。

1995年には、湯浅先生と交友の深かった坂井光夫東京大学名誉教授の発案により、日仏理工科会との共催で「湯浅年子メモリアル・カンファレンス」を開催し、湯浅年子の交流の広さを物語る100名以上の参加者があった。また、ラジウム発見100周年にあたる1998年には、科学技術館での資料展示に協力し、理化学研究所、本学理学部及びジェンダー研究センターが連携して「マリー・キュリーとこれからの女性自然科学者」をテーマにシンポジウムを開催し、湯浅年子ほか、日本の女性自然科学者のパイオニアの保井コノ、黒田チカの資料展示やビデオ制作も行った。昨年は、国立科学博物館の「なでしこたちの挑戦—日本の女性科学者技術者展」(2008年3月22日—5月6日)の展示に協力し、好評を博した。その後、国立科学博物館では、湯浅年子ほかに5名の女性自然科学者のパイオニアをレリーフにしてその功績を紹介することとなった。

さらに、2008年11月24日には、フランス国立科学研究センター(CNRS)本部で、湯浅年子の日仏における学術的・文化的交流に対する功績を称えるため「湯浅年子メモリアル」が行われた。開催にあたっては、本学物理学科の菅本晶夫教授と菅本研究室の卒業生で、現在パリ第11大学・オルセー校IN 2 P 3/CNRS線形加速器研究所研究員の洪江美氏の尽力があったが、それも湯浅先生の導きのような気がしてならない。

今回の目録の作成には、山崎美和恵名誉教授の存在なくしては実現できなかったことは言うまでもないが、ジェンダー研究センターの小山直子客員研究員、アソシエートフェローの佐藤梢、資料研究補佐の高木綾、またフランスの地名の特定などに関しては、研究機関研究員の山出裕子がサポートした。記して謝意を表したい。

2009年3月30日

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授  
同 ジェンダー研究センター教授  
館 かおる



国立科学博物館 展示レリーフ

■ この『湯浅年子公開資料目録』の分類番号について

『湯浅年子公開資料目録』は、『湯浅年子資料目録』及び『湯浅年子資料目録(続)』の中から公開可能であるものを選定し、より内容に踏込んだ分類・再区分を施したものである。この『湯浅年子公開資料目録』に記載している資料の番号は、新たに付与した「**分類番号**」である。『湯浅年子資料目録』(平成5年3月刊)及び『湯浅年子資料目録(続)』(平成10年11月刊)において付与した資料番号は、「**旧資料番号**」として備考に記した。

■ 『湯浅年子公開資料目録』は下記の URL にて Web 公開(pdf 版)しています。

(お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ～先駆的女性研究者データベース～「湯浅年子」の項)

<http://archives.cf.ocha.ac.jp/>

# 湯浅年子公開資料目録 目次

■序	館 かおる
第Ⅰ部 湯浅年子の足跡	
■Ⅰ-1. 人と歩み	
Ⅰ-1-(1) 湯浅年子の科学と人生	1
Ⅰ-1-(2) YUASA, Toshiko (b. December 11, 1909, Tokyo, Japan ~ d. February 1, 1980, Paris, France), a woman physicist	15
Ⅰ-1-(3) 年譜	18
■Ⅰ-2. 研究業績	
Ⅰ-2-(1) 研究解説	21
Ⅰ-2-(2) 論文リスト	27
■Ⅰ-3. 著作リスト	32
第Ⅱ部 湯浅年子資料	
■Ⅱ-1. 身分・履歴関連資料	
S 身分・履歴に関する資料	35
W 社会環境関連資料	37
■Ⅱ-2. 研究関連資料	
Y 研究歴・研究業績関連資料	40
R 実験研究資料	40
N ノート資料	43
F 日仏共同研究資料・柳父-桑折資料	44
D 放射能被害関連資料	47
E 放射能計算尺関連資料	47
K 国際学会関係資料	48
■Ⅱ-3. 文化活動関連資料	
P 文芸資料	49
T 交流記録	57
■Ⅱ-4. 写真・記録メディア類・蔵書リスト	
V 写真	60
J 記録メディア類	64
L 蔵書リスト	65
■Ⅱ-5. ジョリオ=キュリー家関係資料	75
第Ⅲ部 追悼・追想・評伝関係資料	
■Ⅲ-1. 追悼行事関連資料	79
■Ⅲ-2. 追想文・伝記・評伝等	80
■Ⅲ-3. 記念行事関連資料	82
■Ⅲ-4. 資料整理と科学史関連資料	83
■あとがき	山崎 美和恵



## 第I部 湯浅年子の足跡

### I-1. 人と歩み

湯浅の生涯を簡単にふり返しておく。とくにI-2 研究業績やII-2 研究関係資料を読み解く一助となるように、簡単ではあるが、研究過程の説明に重点を置いている。

#### I-1-(1) 湯浅年子の科学と人生

##### 1. 物理学を志すまで (1909/12~1931/3)

湯浅年子は1909年(明治42年)12月11日、東京・上野公園の北側に広がる上野桜木町に、兄2人、姉3人、弟1人の7人兄弟の6番目として生まれた。父は福井県の出身で、東京大学工学部機械科を卒業、当時は農商務省の特許局に勤めていた。母は江戸後期の歌人で国学者の橋守部を曾祖父とする、江戸文化の伝統を伝える家の出であった。文人や芸人が多く住む下町の風情ある屋敷町で、朝に夕に上野寛永寺の鐘の音を聞いて育ったが、満4歳半の頃家が類焼に遭い、一家は全く雰囲気異なる山の手の牛込加賀町に移り住んだ。小学校に入学して間もない頃、父は勤めを止めて、家で「完全自動製糸機」の発明に没頭し始め、10年がかりでそれを完成させた。湯浅は、母の好んだ茶の湯、琴、三味線、歌舞伎などに馴染みつつ育ち、とくに和歌は後々まで湯浅の運命に寄り添いながら、大きな慰めや力となって行く。

湯浅は、何故物理学を選んだのかと尋ねられると「何となく自然に」と答えていたが、父の影響によるところが大きいことは確かである。父は子供達を集めて、ニュートン、エジソンなどの科学者の話を、またあるときはアインシュタインに会ったときのことなどを、熱をこめて話してくれた。湯浅は病弱で、幼い頃あまり外に出してもらえなかったが、身の回りにさまざまな不思議なことを見つけ出して、それらを一人であれこれと考えて過ごすことが多かった。例えば、氷の表面から蒸気がたち上がって見える不思議や、鳳仙花の実が種を弾き飛ばす力の謎など…。しかし、次々に現れる不思議な自然現象は考えれば考えるほど分からなくなっていく。湯浅は好奇心が強く、何事も突き詰めて考えなければ気が済まない少女であった。学校へ進んでからの授業では、湯浅の「何故？」にまともには答えて貰えず、納得いかないまま終わらされてしまうことが多かった。

小学校卒業後、東京女子高等師範学校付属高等女学校に入学する。国語が得意で文科に進むと思われていたのに、卒業して東京女子高等師範学校(東京女高師、現お茶の水女子大学)理科に進んだ。1,2年生の頃は数学に興味をもち、「難しい問題の美しい証明ができたときなど、この学問のもつ不思議な魅力にあやしいほどひかれた」と述懐している。顕微鏡で始めてムラサキツユクサの雄しべの細胞の列をみたときの感動、蝶の鱗片をみたときの驚き。保井コノ教授の遺伝学、細胞学の講義をいつも緊張してきき入った。自然界の神秘、その美しい秩序、それを探る道こそ自分の仕事と思い始める。しかし、幼いときから缶切り一つ、小刀一つ持たされることなく育った湯浅は、顕微鏡用のプレパラートをつくるのにも難渋し、生物学は自分には向いてないと思い定めて物理学を選んだという。そして「物理が私の本然の仕事だった」と感じた」と述懐している。幼いときから不思議さを追求して止まない執拗さが、自然現象の根源を追求する物理に向かわせたのであろう。そういう意味が「何となく自然に」という言葉の裏に隠されて

いたのである。

湯浅が東京女高師を卒業した1931年、女性に門戸を開いていた大学は、東北大学、北海道大学、九州大学、東京と広島文理科大学だけであった。湯浅は、地方に出ることを心配する母に氣遣いして、開校3年目の東京文理大物理学科に入学、物理では最初の女子大学生となった。

## 2. 原子分子分光学の研究 —東京文理科大学で (1931~1939)

「物理学とは一体どういう学問なのであろうか」、何事もつきつめて考えなければ気が済まない湯浅は、一時期、物理学の根源にとらわれてしまい、自然の認識が個人の認識に係わっているとしたら、その実在性とは…等々悩み始め、一時は哲学に変わることを真剣に考えたこともあった。卒業研究のテーマには原子分子分光学を選んだ。浅越寛一教授の「実験感覚に共鳴して」ということもあったが、「自分にできないこと、判らないものを選びたがる性情から、実験を選ぶようになってしまった」と述懐している。不得手な実験への怖れを克服することが湯浅を引きつけていたのかも知れない。また、原子や分子のスペクトルの、美しい色の配列の中に潜んでいる奥深い自然の秩序、それを探り出す研究に惹かれるところもあったのであろう。アンチモンやスズの原子スペクトルに、圧力の変化がどのように影響するかを調べ、それを卒業論文として1934年に東京文理大を卒業、同大学の副手として研究の道に踏み出した。そしてフッ化水素、フッ化ケイ素などのハロゲン2原子分子のスペクトルを詳細に分析して、分子の結合の仕組みやエネルギー構造を明らかにすることを試みていた。

しかし、在学中こそ表面的には女子も男子と同等に扱われたが、卒業してみると学究者の女性に対する差別観は根強く、「女子に何ができる?」という気分は暗然のうちに身にしみて感じられ、思う存分研究できないことを改めて思い知らされる。一方、分光学にも次第に物足りなさを感じるようになる。それは、分子スペクトルの詳細が要求されるにつれて、大学の分光器では対応できなくなったこと、分光学は学問的に応用的な性格が濃くなり、化学の分野の研究に移行していったこと等による。湯浅自身、もっと自分を燃焼し尽くすような仕事をしたかった。そのような重い気分のなかで、1935年には私立の東京女子大学の講師、38年には母校の東京女高師の助教授になったが、自分は教職に向いていないと自認し、残る一つの可能性によりすがら思いで、文理大で研究を続けていた。

一夏を大学の図書室にこもって勉強していた折、たまたま手にとったフランス科学学士院の紀要に見出したジョリオ＝キュリー夫妻の論文に、湯浅は文字どおりめくるめくほどの感激を覚えた。人工放射能の発見・確認について連続的に発表された論文にみる、簡明ですっきりした研究方法、明快でゆるぎない記載。湯浅は夢中になって読みながら、夫妻のもとで研究することができればこの苦悩から脱却することができるかも知れないと、フランスへ行く望みをつのらせていった。

キュリー夫人の長女イレヌとその夫フレデリックのジョリオ＝キュリー夫妻 (Irène et Frédéric Joliot-Curie) が、キュリー夫人が創設したラジウム研究所で、ホウ素やアルミニウムなどの原子核に $\alpha$ 線を照射することによって人工的につくられた窒素やリンが放射能をもつこと、つまり人工放射能を発見したのが1934年初頭であった。それは、ほぼ全ての元素に放射性を持つ同位元素をつくることを可能にし、物理学や生物学にとって飛躍的な進展を約束する大発見であった。その娘夫婦の研究成果を大きな喜びをもって聞いたキュリー夫人は、その約半年後にこの世を去っていた。

湯浅は、ラジウム研究所のジョリオ夫人のもとで原子核物理に打ち込むことで、自らの力を伸ばす最後



の機会が与えられるかも知れないと、一筋の希望を見出したのであった。その頃フランス外務省で、1年に1回、専門学校以上の学府の教員の中から選抜して、2年間留学生としてフランスに招く制度があった。1938年、フランス語を始めてわずか3ヶ月後に受けた試験では、筆記試験には合格したが、口頭試験で落ちてしまい、生まれて始めて落第の憂き目をみたが、湯浅はこの不合格を後になって感謝することになる。もしそのとき合格して渡仏していたら、不自由な言葉のためにずいぶん研究に不便を来たしたであろうと。その翌年再び試験を受けてトップの成績で合格、9月6日にフランスへ出立することが決まった。が9月4日、ドイツに対する仏・英の宣戦布告、つまり第2次世界大戦の勃発によって出発は延期されてしまう。それから4ヶ月半後、「自分の責任において危険を覚悟の上なら出発してよるしい」というフランス大使館の通知を得たときは、父が病に倒れていて、湯浅はフランス行きをあきらめようとしていた。病床の父はしきりに留学をすすめ、やっと決心してフランス船の2等船客となって神戸港を出立したのが、1940年1月26日であった。上海、香港、サイゴン、シンガポール、スエズを経て、3月1日にマルセイユ着。翌日パリ着。黒一色に塗られた街の暗さに、パリは戦時下にあることを実感させられた。

### 3. コレジ・ド・フランス原子核化学研究所で (1940/3~1944/8)

戦時下のパリでは、ラジウム研究所も軍の管理下に置かれ、外国人は入るのが困難な状況であったが、湯浅の必死の訴えが実り、ポール・ランジュヴァン教授の好意やジョリオ＝キュリー夫妻の尽力を得て、コレジ・ド・フランス原子核化学研究所 (Collège de France, Laboratoire de Chimie Nucléaire) で、所長フレデリック・ジョリオ＝キュリー教授のもとで研究ができることに決まったときは、すでに4月の半ばを過ぎていた。

原子核化学研究所は、1935年、ジョリオ＝キュリー夫妻が人工放射能の発見によってノーベル化学賞を受けたのを一つのきっかけとしてコレジ・ド・フランスに創設され、37年、F.ジョリオ教授が所長に就任した。人工放射性元素は、原子核の構造や反応を探る研究に欠かせないものであると同時に、生物学や医学への応用に期待が高まって、その重要性を増しており、研究所には、ヨーロッパのみならず世界各地から研究者が集まるようになって、当時、世界で最も注目される研究所の一つであった。

4月19日、ボストン大学から来ていたハインズ氏と共同研究をはじめた。中性子をベリリウムにあてたときに出来るヘリウム ( $^3\text{He}$ ) の安定性を調べる研究であった。

湯浅は真摯に研究に専念する研究員達の姿に、「これこそ私が望んだものだった。女性であることも、異国人であることも捨象されて、ここでは研究だけが生き物のように成長して行く。「私は研究したいのです、という言葉が、すべてにまさって権威のあるものだった。祖国で経験したことの無い魂の自由さを味わった。私は本当にはじめて救われた」と語っている。しかし、やっと迎えることができたこの至福の研究生活は、わずか3週間あまりで崩れ去る運命にあった。ドイツ軍の進攻によって緊急事態に巻き込まれ、研究所が一度ならず閉鎖されてしまうのである。簡単な推移を挙げると……。

5月10日、ドイツ軍がパリに迫り、パリ市民の避難が始まって、研究所でもラジウム等の重要物資の疎開にあわただしくなる。19日にジョリオ教授の勧告を受けてボルドーに避難する。30日、研究できずに日を送る辛さを「パリの研究所で爆弾のもとで死のうと悔いがないから呼び戻して下さい」とジョリオ教授に訴える。パリに戻った湯浅にジョリオ教授は「その覚悟なら一緒に死にましよう」と。6月7日、ジョリオ教授から単独でウィルソン霧箱の指導を受け、霧箱内に見る $\alpha$ 線の飛跡の美しさに感動する。

6月9日(日)夜、「パリは危険となった。全ての官公立教育機関は閉鎖される。市民は一刻も早くパリを脱出せよ」との緊急放送。10日、研究所閉鎖。パリ脱出の便もなくなり、大使館官邸に避難する。11日、研究所から重要な研究試料、物資、実験器具がフランス中部に移される。13日、フランス軍はパリを放棄、パリは無防備都市となり、14日、ドイツ軍パリ入城。22日、休戦条約が締結され、パリを含むフランス東北部はドイツの占領下に入って、研究所はドイツ軍の管理下に置かれることになった。なす術もなく待つしかなかった湯浅であるが、8月半ば、ジョリオ教授から、ドイツ科学者と共同研究をすること、純粋研究であること、許可なく成果を発表しないこと等のドイツ側の条件を受け入れて、研究所再開を決断したことを知らされ、湯浅もパリに留まって研究することを決意する。研究所に実験器具などが戻ってきて、研究が再開されたのは9月半ばであった。

湯浅はジョリオ教授の指導のもとに、助手のベルトロー氏と共同研究することになった。ジョリオ教授が考案した低圧ウィルソン霧箱によって Tn (トロン) や An (アクチノン) が1次 $\alpha$ 崩壊に続いて2次 $\alpha$ 崩壊した際の、後退核の反跳と $\alpha$ 粒子の飛程とを観測して、崩壊過程のエネルギーや運動量の変化を、とくに霧箱内の水素原子と後退核の衝突現象の影響に注目して調べようとするものであった。非常に難しい実験であったが、無我夢中で実験を重ねて、ベルトロー氏と共著の来仏第一号の論文を専門誌 *Comptes Rendus* に提出したときはすでに1941年春となっていた。占領後一年近く経って、学術雑誌の刊行も各分野の学会もようやく始まったところであった。

ジョリオ教授は研究も活動もドイツ軍当局によって絶えず監視され、自身の研究を断たれてしまっていたが、放射線の動物への影響を調べたり、研究指導に当たったり、ドイツ側に疑念をもつ余地を与えないように、表面的には極めてオープンに振る舞っていた。したがって逆にこの時期が、湯浅にとっては幸いしたといえるであろう。社会状況のきびしさに耐えながらも、ジョリオ教授から直接に指導を受けるといふ、湯浅にとってはまたとない充実した日々が続いていった。研究所では、研究者自らが器械を設計し、図を引き、ときにはコイルを巻き、ガラス細工をする。化学的操作も、結晶磨きも、技師と共に、あるいは独りで自ら手を下さなければならない。測定は勿論自分で直接行う。湯浅にとってこの上ない修練の場となったわけで、後年の湯浅がいくつもの測定装置を自ら工夫・設計して、それによって新しいすぐれた研究成果をあげて行き、また他の研究者の仕事に対してもその装置が大きな貢献をするとは、当時の湯浅自身思いも及ばぬことであつたらう。

湯浅の研究テーマは、ようやく作動しはじめたサイクロトロンによって得られる人工放射性元素の、 $\beta$ 線スペクトルに移った。湯浅は以後10年以上にわたって $\beta$ 崩壊の研究に取り組むことになるので、当時の $\beta$ 崩壊についての問題点に簡単に触れておく。 $\alpha$ 崩壊では、核内のエネルギー準位間の遷移に伴って放出される $\alpha$ 粒子(He原子核)のエネルギーは、それら準位間のエネルギー差に相当するほぼ一定値である。しかし $\beta$ 崩壊で放出される $\beta$ 粒子(電子e)のエネルギーは連続的に分布するさまざまな値をとり得ることが、 $\beta$ 放射能の発見以来の難問題であった。その解決に向かってW・パウリが、1931年、 $\beta$ 崩壊では電子とともにニュートリノ( $\nu$ )が放出されるという仮説を提唱した。ニュートリノは質量がほぼゼロの中性粒子で、観測機器で直接捉えることはできない。ニュートリノ仮説を実証するためには、 $\beta$ 崩壊を起こす機構、つまり核内の核子(陽子p、中性子n)と電子とニュートリノの相互作用の型を仮定して、どんな確率でどんな $\beta$ スペクトルが得られるかを理論的な考証によって予測し、実験で確かめなければならない。 $\beta$ 崩壊に関するフェルミ理論が出されたのが1934年で、それ以降、崩壊の型に関するいくつ

かの予測が提唱され、その仕組みを解明しようという取り組みが、日本を含む世界の多くの研究機関で始められていた。β崩壊の研究は、素粒子・原子核の基本的性質を知るために、その解明が待たれていた世界的に最先端の研究であった。

湯浅は先ず測定精度を挙げるために放射性元素を濃縮することからはじめた。サイクロトロンによって寿命が短い<sup>76</sup>Asと<sup>52</sup>Vを作り、研究所の化学研究部長P・シュー博士と共同で、それをスチラード法によって濃縮することに成功。次いでそれらのβスペクトルの詳細な観測と綿密な分析を行って、崩壊定数、β線のスペクトル分布やエネルギーの上限等を決定し、フェルミ理論との比較検討を行った。それらの確かな分析と結果は、他の研究者達に引用され、研究の進展に寄与するところが大きかった。湯浅はその成果をまとめて学位論文「人工放射性核から放出されたβ線連続スペクトルの研究」を提出し、1943年12月6日、学位審査に合格してフランス国家理学博士(Docteur ès Sciences Physique)の学位を得た。

ドイツ占領下という一種の極限状態の中で、さまざまな困難に遭いながら、湯浅は、ジョリオ夫妻を始めとする研究所の人達、宿舎の人たち、いろいろな分野の人たちと真剣につきあい、心を通じ合わせて行く。こうして湯浅は、真の科学する心を捉え、またフランス文化の真髄を掴み取っていったのである。

一方で湯浅は、戦時下ならではの悲運・非情に何度も見舞われている。その第一が1941年1月の父の他界である。訃報は2ヶ月以上も遅れ、それを伝える母の手紙は6ヶ月も遅れて届き、湯浅自身その事実を受け入れ難く悲痛な気持ちを必至にこらえて実験と闘っていた。ジョリオ夫妻の強い暖かいアドバイスが湯浅を立ち直らせ、また短歌を詠むことで救われもしたようである。第二に占領政策がきびしさを増し、ジョリオ教授がゲシュタポに連行されることが起こったり、知人や友人が危険に遭遇したりして、不安と緊張の解けることがなかった。第三に1941年12月8日に太平洋戦争が起こり、仏領印度支那にまで日本軍が進出して、日本との関係が険悪さを増していた。ただしジョリオ夫妻はじめ、研究所の人々、宿舎の人々は湯浅に対して以前に変わらぬ友好を示してくれていたが…。

1944年6月、抵抗運動の責任者としてその身に危険が迫っていたジョリオ教授は地下に潜行する。一方英米連合軍はノルマンディーに上陸、パリ進攻が迫りつつあり、日本大使館は邦人に退去勧告を出すに到っていた。

湯浅は学位取得後さらに装置に工夫を重ねて、空襲が激しさ増す中でその作製を続けていたが、ついに邦人最後の退去勧告によって、8月15日、ベルリンへと移動させられてしまう。

#### 4. 崩れゆくベルリンで (1944/8~1945/6)

1944年8月、ベルリンの避難所生活で、「すべての希望は無惨に踏みにじられてしまった」と研究の手だてをまったく失ったことを嘆きながら、湯浅はやがて持ち前の行動力を発揮して研究を可能にして行く。ベルリン大学に出かけ、オットー・ハーン博士の消息を得て手紙を出し、博士のもとへ出発しようとした矢先、その地に戦火が迫り、博士からベルリン大学付属第一物理研究所のゲルツェン教授を紹介される。そして同教授の好意で助手のポストを与えられて、ベルリンのはずれにある同研究所に通い始め、12月中旬からβスペクトロメーターを作り始めたのである。湯浅はここでも、科学者として通じ合えるよろこびを、そして戦争という大きな力のもとで互いに解り合える者のみの知る悲しみを、分かち合えるという感覚を持ち得たのであった。

定期便の如く訪れる空襲を受けて廃墟ようになった研究所で、湯浅は、静電場と磁場を組み合わせた



世界初の2重焦点型 $\beta$ 線分光器を作り続けた。その装置は、フランスで挑んでいた研究、すなわちRaEからの $\beta$ 線の中に電子と異なる質量を持つ正電荷粒子が観測される現象の解明に取り組もうと、質量と運動量が同時に測定できるように設計したものであった。しかしそれが完成した4月初めは、ベルリンを挟んで西から米軍が、東からソ連軍が総攻撃を開始しようとしていたときでもあった。4月半ば、ベルリンから60キロも離れたマールスドルフに避難させられることになり、ゲルツェン教授とも研究所とも別れなければならなくなった。ゲルツェン教授が、「あなたがこの分光器を使って平和の戻ったところで仕事ができるのは一体どこでしょう」といいながら手伝って包装された $\beta$ 線分光器は、リュックサックに入れてずっと持ち運ぶことになった。

湯浅は $\beta$ 崩壊の理論的検討も始めていた。ドイツ語の論文も書いたが発表の手だてでは得られなかった。研究が出来ない状況で、癒しのバイブルとして読み継いでいたのが、4年前、父の他界を知って悲痛に沈んでいたとき、ジョリオ夫人が「私も早く父を失いました」と言いながら静かに手渡してくれたマリー・キュリー著『ピエール・キュリー』であった。そしてピエール・キュリーの言葉を日記に書き留めている：「どんなことが起ころうとも、たとえ魂のない肉体になったとしても、やはり研究し続けなければならないだろう」。またある日の日記には「エーヴ・キュリー著『マダム・キュリー』を読みながら涙の出るにまかせる」とも書いている。

1945年5月2日ベルリン陥落。5月9日独軍全面降伏。5月18日、シベリア経由で日本へ送還されることになった。5月25日、モスクワ通過。6月3日、オトポールでソ連と別れ、満州里に着く。

## 5. 戦後の祖国で (1945/7~1949/2)

日本海を渡って6月30日敦賀上陸。苦渋、苦難に満ちた帰国となった。東京の空襲で姉の一人と姪の一人を失い、弟は重傷、そして母は重い病の床にあった。心痛のうちに、7月23日、母逝去。

湯浅は東京女子高等師範学校教官に復帰、一年生の疎開先である長野県中込に着任する。間もなく広島に新型爆弾が投下されたことが伝えられたとき、湯浅にはそれが原子爆弾であることがすぐ分かって、生徒達にそれを語った。しかし湯浅自身、原爆がこれほど早く作られるとは思ってもいなかった。8月15日の終戦をその疎開先で知り、東京に帰るが、住む家はなく、女高師の焼け残った校舎の一隅に仮住まいすることになる。

湯浅は、フランスで、ドイツで、研究を渴望した自分を忘れてはいない。乏しい研究費を工面して、殆ど設備のない、水にも電気にも不自由な女高師の一室に放射性元素の微量分析機器を整え、RaE源を得ようと試みていた。また日本のラジウム鉱石の所在調査をすすめていたりしていた。これはジョリオ夫人が、「あなたが日本へ帰ったら、ぜひラジウム研究所をつくるように」と、そのラジウム研究所のためにキュリー夫人の検定による標準ラジウム塩を手渡された、その夫人の期待に応えようとするものであった。

一方、ベルリンで作り上げリュックサックに入れて持ち帰った $\beta$ 線分光器で、RaEからの $\beta$ スペクトルを研究すべく、終戦半月後の8月末には早くも理化学研究所(理研)に仁科芳雄博士を訪ねて、研究囑託としてサイクロトロンを使って実験ができるように準備を進めていた。日本では1937年に小型サイクロトロンが理研と大阪大学とで完成しており、理研ではさらに大型のサイクロトロンが44年に作動し始めていた。9月22日、GHQ(米軍総司令部)によって日本の原子力研究が禁止された。その後サイクロトロンでアイソトープをつくり、それをを用いての医学・生物学の研究をすることはGHQの了解を得て

いたにもかかわらず、11月25日、米駐留軍により理研の大小のサイクロトロン、および周辺の主要機器は破壊され、東京湾に投棄されてしまった。大阪大学、京都大学のサイクロトロンも同様に廃棄された。実験の開始に備えて理研に運んでおいた湯浅の変圧器や、メーターなども捨てられてしまい、実験の手段を全く奪われてしまった。幸いβ線分光器はまだ理研に運んでいなかったが。ジョリオ夫人から贈られた1mgのラジウム塩は、後日広島大学の核生物医学研究所に寄贈された。

湯浅は実験を阻害された苦悩を抱えながら、β崩壊の理論的検討をすすめるなどして、学会に発表し、論文も書いた。研究に関する講演や寄稿の依頼も少なくなかったが、湯浅の活動は研究面に限らず、多岐にわたって際だっていた。その一つが、学問を志す後輩や学生達が抱える社会問題としての「女性と科学」の問題への取り組みである。敗戦を機に男女平等が唱えられはじめ、大学の女性への門戸開放も実現した。が、フランス帰りの湯浅は、未だ充ち溢れている男女の差別感に愕然とし、使命感をもってこの問題に取り組まざるを得なくなった。まず、新制大学発足を控えていたこの時期、女高師の理科の教授であった保井コノ、黒田チカ、吉田武子、阿武喜美子の諸先生に男子の理科の教授も交えて、高度の女子大学創設を目指して、週に一度は「火を吐くような熱烈な議論」が展開されていた。湯浅はその強力な一員であって、阿武教授とともに文部省に交渉に赴き、一步も引かない議論をしていたという。出来上がった「国立女子帝国大学案」が実現されることを期待して湯浅は再渡仏するのであるが、以後もお茶の水女子大学の状況に強い関心を寄せ続ける。また女高師の中にとどまらず、大学婦人協会などを通して、女性への科学教育のあり方について議論を深め、具体化への検討にも積極的であった。また、講演や寄稿の機会に、また著書に、女性と科学の問題を積極的にとり上げ、フランスでの状況を紹介するとともに、経験に裏付けられた自ら考えや意見を展開している。著書『科学への道』や『フランスに思ふ』には、マリー・キュリー、イレーヌ・ジョリオ＝キュリー、リーゼ・マイトナー等を紹介しつつ、「女性と科学」に関する考えを述べている。また、科学に進もうとする後輩や学生たちを積極的に支援し、相談に乗り、助言し、援助も惜しまなかった。戦後の混乱期において、フランス帰りの湯浅の存在そのものが、後進に希望を与えたことはいまでもないが、その湯浅自身が強い意識を持って後進に接していたのである。

著作リストにみるように、この時期の執筆活動も際だっている。最初の執筆は、前節に触れたマリー・キュリー著『ピエール・キュリー』の翻訳であった。母への手向けにと訳し、1946年『ピエール・キュリー傳』として刊行された。この時期、上述の『科学への道』、『フランスに思ふ』に加えて『黒葡萄』、『パリ随想』の著書、十編以上の寄稿があるが、何れも貴重な体験に基づいた豊かな内容、独自の考えに満ちていて、多くの人々の感動を呼んだ。また『放射性同位元素とその生物学・医学への応用』は、恐らくこの方面のわが国最初のものであった。著書『科学への道』に次の言葉がある：

「真に科学する心はまた、他のあらゆる本質的なことに通ずる心である。

芸術に、文学に、そして宗教に通ずる心である。」

湯浅はまさにこの言葉通り、真の科学する心を追求し、その心をもって文芸にも宗教の問題にも本質を見極めようと絶えず鋭い問いかけをなし続けて、その思いの跡をいろいろ語っているのである。

湯浅は研究・教育面でも、社会問題に関しても、また生活面も含めて、大方の人の活動をはるかに超えた多忙な日々を送っていたが、やがてジョリオ教授から電報が届いた。「ご無事をよろこぶ。ふたたび研究をはじめましょう」と。戦後まだ大使館も設置されていないフランスへの渡航には多くの困難があったが、ジョリオ教授の尽力によってそれが可能となり、1949年2月、貨客船で横浜を出航した。ル・アー

ブル港経由でパリ到着したのは5月5日であった。

## 6. コレジ・ド・フランス原子核物理・化学研究所で（1949～1956）

戦後のフランスの研究状況の変化は湯浅の予想を超えていた。ジョリオ教授は政府の原子力長官として原子炉建設に、一方では平和運動の指導者として多忙を極めており、ジョリオ夫人は原子力委員として活動する一方で、ラジウム研究所長として研究の指導にあたりながら、新しい研究所建設にとりくんでいた。湯浅は CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique 国立中央科学研究所) の研究員として再びコレジ・ド・フランス原子核物理・化学研究所 (Le Laboratoire de Physique et Chimie Nucléaire, もとの”原子核化学” から”原子核物理・化学” に変わった) で、ウィルソン霧箱を用いての  $\beta$  崩壊の研究を再開した。はじめのうちこそ5年間の空白の大きさを嘆いていたが、次第に本来の力を取り戻し、研究所での地歩を徐々にかためて行く。実験の感覚を取り戻した6月頃には、ジョリオ夫妻の長女で研究員として出発したばかりの H・ランジュヴァン=ジョリオ (Hérène Langevin=Joliot) 夫人に霧箱実験の指導をしている。

湯浅はかつて、 $\beta^-$ 崩壊において  $\beta^-$ の中に  $\beta^+$  ( $e^+$ , 陽電子) が混じって観測されることがあると報告していたが、改めて $^{32}\text{P}$ の  $\beta^-$ 崩壊で  $\beta^+$ が観測されることを、霧箱の他に磁気スペクトルグラフを用いて確かめ、その過程を追跡することになった。この研究は、核内のエネルギー構造と  $\beta$  崩壊が起こる仕組みとを解明することにつながる。原子核の内部は特定のエネルギー準位をもつ殻構造を示しており、その準位間の遷移にともなって  $\alpha$ ,  $\beta$  線の放出や  $\gamma$  線による核の内部転換が起こる。そこで放射線の詳細な観測をすることは、殻構造や遷移の機構を解明することになり、その分野は原子核分光学といわれている。

放射性崩壊に伴う  $\beta^+$  放出が核の内部転換に起因するものとするれば、崩壊後の核が励起状態から安定状態に遷移する際放出される  $\gamma$  線によって電子-陽電子の対生成が起こる結果であり、その  $\gamma$  線によって K 軌道の核外電子が放出される可能性もあるであろう。湯浅は先ず、 $\beta^+$  崩壊する  $^{65}\text{Zn}$  に対して、 $\beta^+$  放出に対する K 電子捕獲 (核外の K 軌道にある電子を取り込む過程) の割合、つまり分岐比  $K/\beta^+$  を求め、転移の機構や核の励起状態の性質を明らかにすることを試みている。 $^{204}\text{Tl}$  の  $\beta^-$  崩壊に際しての内部転換についても詳細に検討。その上で  $^{90}\text{Y}$  の  $\beta^-$  崩壊によって生じる  $^{90}\text{Zr}$  からの放出粒子を詳細に観測して、核のエネルギー構造を求め、内部転換を含む崩壊過程の型の解明に成果を挙げることができた。以上に関連して、例えば  $^{59}\text{Cu}$  など、 $^{2Z+1}\text{X}$  (Z 個の p に対して Z+1 個の n をもつ) 核の安定性や、魔法数 (とくに安定な核の p あるいは n の数) として 14 を想定して、 $^{25}\text{Na}$  の安定性についても議論している。以上は非常に難しい、精密な測定をなし得た結果であって、測定の精度を上げるための装置の開発、改良も頻繁に行っている。また、 $^{25}\text{Na}$  の実験では、サイクロトロンと小型分光器を連結して、on line といわれる実験法を始めたりしている。

1956年、リーとヤンによって、 $\beta$  崩壊ではパリティが保存しない (空間反転によって現象が変わる) ことがあり得るという理論が出され、57年、ウーによってそれが確認された。そして  $\beta$  崩壊を素粒子の [弱い相互作用] として記述する理論が提唱され、崩壊の型がベクトル型か軸ベクトル型かが大きな問題となっていた。湯浅はそれをテストする直接的な方法として、崩壊の際の電子とニュートリノの角相関を観測することを計画し、そのために圧力可変・自動自記ウィルソン霧箱を考案、これによって  $^6\text{He}$  の  $\beta$  崩壊を観測して、崩壊の型の比較検討を行った。この成果「 $^6\text{He}$  の  $\beta$  崩壊に対するガモフ-テラーの不変相



相互作用の型について」を学位論文として1962年京都大学に提出し、日本の学位も得た。この霧箱による $\alpha$ 線の飛跡の写真は、専門誌 *Journal de Physique et le Radium* の表紙を飾り、週刊誌 *Match* が映画にも撮ったという。52年頃からヨーロッパ各地で催される国際会議に毎年のように出席して、以上の成果を講演し、また各国の研究者と議論を重ねて、国際的に業績の評価を高めていった。

1952年にはお茶の水女子大学の出張期限が切れて、休職を余儀なくされるが、同時に CNRS の専任の研究員となった。1955年にはついに休職期間も切れて、パリに留まるか帰国するか、辛い選択を迫られることになった。女高師の先輩教授や研究者達から帰国を促す手紙も何通か寄せられたようであるが、帰国すれば恐らく研究テーマの継続は望まれず、再び研究を軌道に乗せるまでには、また多くの時間と困難が予想される。一方、ここで帰らなければ、もはや同大学に戻ることは不可能で、一生フランスに留まる決意をしなければならぬ。1955年3月、湯浅はお茶の水女子大学を退職、その10月には CNRS の主任研究員の資格を得た。

ここで本来の研究からややそれたところでの湯浅の活動にも、少しばかり目を向けてみよう。54年3月、ビキニ環礁における米国の水爆実験で、第五福竜丸その他のマグロ漁船が被曝して乗組員の多数が大量の放射線を浴び、うち一人が死亡するという被害を受けた。湯浅はフランスにある日本人科学者の一つの責務としてであろう、日本から福竜丸被曝に関する多くの資料を取り寄せて、その被害状況を説明、原爆実験の危険性を訴えるとともに、共同研究者ラベリグーフロロウ夫人と共著で「ビキニの核爆発による放射能灰の、日本でなされた分析についての報告」を *Semaine des Hopitaux* (医学週刊誌) に寄稿している。55年頃には多機能をもった放射能計算尺を発明し、これは55年、ジュネーブで開かれた原子力平和利用国際会議における展示会に、フランスの部として出品された。また58年、ブリュッセルで開かれた万国博では、フランスの原子核物理の歴史的貢献を説明する展示の責任者を務めたという。

1957年、湯浅は CNRS の主任研究員 (準教授相当) に昇格した。

1956年3月、I. ジョリオ＝キュリー夫人が準急性白血病のために急逝、享年58歳であった。親しく身近に接して人生の範としていた女性科学者を失ったその深い悲しみも癒えぬ58年8月、F. ジョリオ＝キュリー教授が肝臓病のために58歳で急逝、湯浅にとって最高の学問の師、人生の師を失った。「いつかきっと日本へ行きますよ」というジョリオ教授の言葉を思い出しながら湯浅はつぶやく。「ジョリオ先生がもはや居られない今、私は才能も体力もなくてなお、フランスに留まる事に何らかの意義があるだろうか」と自問する。しかしそれは、世の中からの逃避をすることになる。そして後に「ジョリオ教授の思い出」を綴った長い文章を、次の言葉で結んでいる：

「ジョリオ先生は、私にとっては「師」という言葉の含むあらゆるもの、そして先生を「師」として仰ぐことが出来たことは、私の生涯での幸福であった」。

## 7. オルセー原子核研究所で (1957～1970)

1958年頃から研究所のオルセー移転が始まっていたが、59年3月、湯浅の実験器具の全てがオルセーに運ばれ、オルセー原子核研究所 (L'Institut de Physique Nucléaire, Orsay) が研究の拠点となった。オルセーは約百ヘクタールの広大な土地に、原子核研究所に続いて物理化学、流体力学、光学等の研究所が次々に建設され、一方でパリ大学の理学部及びそれに付随する研究所、諸施設も造られて、パリ大学南校 (Université de Paris-Sud) となった。

湯浅は、オルセーですでに稼動していたシンクロサイクロトロンを使う実験の準備を始めていた。そのシンクロサイクロトロンの、エネルギー 156 MeV のプロトン・ビームを炭素原子核 $^{12}\text{C}$ に衝突させ、そのときに起こる核反応の生成物をプロパン泡箱によって撮影・分析するという、中エネルギー核反応の研究である。ある程度以上の高エネルギー粒子の検出には霧箱は対応できなくなり、52年頃から開発が進んでいた泡箱が主な検出装置として使われるようになっていた。泡箱とは、密閉した容器にプロパンや液体水素などを入れ、温度や圧力を調節して過熱状態にしたところに荷電粒子が通過すると、その軌跡に沿って液体の原子や分子がイオン化され、それが核となって泡が発生して、粒子の飛跡が観測されるというものである。プロパン泡箱の圧力を40気圧から急激に10気圧に下げるといって「相当気骨の折れる」操作を「少しの故障もなく」成し遂げたのは、同じ型のものを使った米、英、仏の研究所の中で、湯浅の所だけであったという。湯浅は泡箱測定のための装置の改良・工夫も絶えず行い、他に $\beta$ や $p$ によって作動する薄膜電極板のスパーク・チェンバーも作成している。

156 MeV の陽子 $p$ を炭素 $^{12}\text{C}$ にあてたときの反応 $^{12}\text{C}(p, 2p)^{11}\text{B}$ —— $^{12}\text{C}$ に $p$ が衝突して2個の $p$ が放出され、核は $^{11}\text{B}$ となる反応——や、 $^{12}\text{C}(p, p\alpha)^8\text{Be}$ 等を泡箱によつての観測・解析して、核の性質や反応の機構を探る実験において、湯浅はとくに終状態の解析を綿密に行つて、複雑な過程の中から確実な情報を得る方法を探っていた。その結果、 $^{12}\text{C}(p, 2p)^{11}\text{B}$ において、反応が同一平面上で起こる場合とそうでない場合を比較・検討して、終状態が3体であるこれらの過程においても、平面波インパルス近似で十分記述できることを立証した。(高速粒子の衝突では作用し合う時間が非常に短いので、自由粒子(平面波)が一回だけ相互作用するとして近似的に扱う方法を平面波インパルス近似といい、平面波の代わりに衝突前後の粒子の相互作用を考慮して波の歪みを入れて扱うものを、歪曲波近似という)。さらにその結果を確認するために $^{12}\text{C}$ の他に $^{40}\text{Ca}$ を標的としたときの $(p, 2p)$ 反応を、2個の望遠鏡を備えた装置によつて観測し、一平面上および非一平面上の過程を歪曲波インパルス近似によつて解析することも試みている。

シンクロサイクロトロン等の大型機械を使うとなれば、その使用割り当て時間、いわゆるマシンタイムの確保、予算の獲得、加速装置に対する要求、人員の確保、等々のために、湯浅は主張し、闘わなければならなくなった。研究を貫くために、妥協することなく、一步も引かず主張し議論する湯浅は、研究所の中でも注目される存在となつていた。研究所での湯浅は、もはや迷いなく、堂々とフランスでの地歩を確実なものとしていった。しかし一方で、人一倍気遣いの多い湯浅にとって、外には見えない気苦労は並大抵でなかったのも事実である。

前にも述べたが、湯浅は世界各地で開かれる原子核関係の国際会議に毎年のように出かけて発表している。そして1967年東京での原子核構造国際会議への出席が、18年振りの帰国となつた。日本で開かれた初の公式原子核国際会議で、湯浅は核反応 $^{12}\text{C}(p, 2p)^{11}\text{B}$ について招待講演を行った。さらに、研究所に液体重水素の設備ができたのを機に始めた、標的に重水素 $\text{D}$ を使う反応 $\text{D}(p, 2p)\text{n}$ の実験成果についても同会議で報告した。この反応の終状態、3個の核子 $(p, p, \text{n})$ の系が、湯浅にとって少数核子系問題の出発点となつた。

## 8. 少数核子系の研究 (1967~1980)

少数核子系とは核子( $p$ あるいは $n$ )の数が3個あるいは4個の系をいう。

3体問題というのは、古典力学でも正確な解が得られないことで知られているが、素粒子における3体

問題は、それとは全く次元の異なる困難さに満ちている。理論的には、1963年にファデーエフ方程式が出されてからさまざまな定式化が進んできていたが、扱う3体系に対して適切な近似解を得ることは、複雑な要素が絡み合い、非常な難問題である。とくに核子系に関してはいかなる条件を設定して方程式をたてるか、いかなる方法で、いかなる近似でその解を得るか、——核力の入れ方、部分波の入れ方、2体部分系の散乱とその束縛状態、励起状態の存在、3体系のそれらの存在、異常しきい値の問題、メソン等の粒子生成の問題、クーロン力の影響、等々の問題があつて——極めて困難な処方が要求される。実験においても、3体系あるいは4体系のすべての物理的要素、つまり運動量分布、エネルギー分布、角相関等々を測定することは全く不可能である。理論においても実験においてもいかなる視点で精度よく扱うか、明解な物理的意図や見通しをもって取り組まざるを得ないのである。

そこで湯浅は、ある相互作用モデルに基づく理論で云えることと、実験で観測できることとの詳細な検討を行つて、特定の運動学条件のもとに、特定の終状態の運動学的完全測定を行うことを計画したのである。その運動学条件として、3核子のうちの2個のそれぞれの射出方向と、そのうちの1個のエネルギー値を選び、その3変数に対する3階の微分断面積  $d^3\sigma$  (それら3変数をもつ状態が得られる確率を与えるもの) を実験的に求め、それをあるモデルに基づいて計算した理論と比較することを始めた。さらに進んで、3核子の重心系で核子が一直線に並ぶ特殊な終状態を選んで、実験と理論の精度の高い比較検討をすることを試みたのである。そして湯浅が最終的に意図したものは、3体系に特有な3体力——2体相互作用のくり返しで記述できない力——の存在を実証しようという難問題であつた。湯浅は特殊な終状態を選ぶことによって、3体力の効果が観測される可能性についても論じている。

しかしそれら特別な運動学条件を満たす過程は、起こる確率が小さく、角度への依存性が極めて敏感であるので、その配位効果を検出するためには相当の綿密さと精度が要求される。そこで湯浅は、精度を上げるための装置の作製やその改良を行つている。先ず、 $\gamma$ 線と中性子nの分離ができる大型液体シンチレーションカウンターの作製に成功。またエネルギーの分解能をあげるために、薄いプラスチックシンチレーターを重ねてそれぞれにホドスコープをつけた中性子カウンターを作製、改良も重ねて測定の精度を高めていった。

湯浅は、156 MeV プロトンビームを用いた反応  $D(p, 2p)n$  において、 $d^3\sigma$  を観測し、それを適切に設定された近似理論の計算と比較することから始めた。終状態のすべての核子対に対して終状態相互作用を考慮した理論計算を実行して、実験との比較も行つた。さらに前述の大型液体シンチレーションカウンターによって  $D(p, pn)$  p も含めた終状態の同時測定から  $d^3\sigma$  を求め、ある角度方向の核子対に対して準自由散乱に特徴的なピークが現れることを確認した。3核子が一直線上にあるという特別な運動学条件のもとでの完全測定を行つた結果では、 $d^3\sigma$  が準自由散乱の領域から遠く離れたところにピークをもつことも確かめられた。また  $D(\alpha, \alpha p)n$  反応に対しても同様な観測を試みている。

標的に $^3\text{He}$ を使った分裂反応—3個のpと1個のnの4核子系を得る—に対しても、通常考えられる終状態相互作用の領域から遠く離れたところに緩いピークが現れることを確認した。4体系の終状態に着目する場合には、適切な運動学条件の設定が一層重要であり、測定精度の向上もさらに求められなければならない。湯浅は $^3\text{He}$ の分裂反応において、p-d, p-p, n, p-2pの、同一平面終状態を観測して、それらの綿密な分析を行つていった。

しかしこの難問題に取り組んでいた間、湯浅の身にはさまざま変化が起こつていた。1972年には主任



研究員（教授相当）に昇格。一方で1973年、湯浅はついに病に倒れ、胃と胆嚢を摘出する大手術を受ける。食事にも満足に摂れない病後の深刻な不調を抱えながら、研究への執念は全く衰えを見せず、無理を重ね、徹夜実験を重ねて成果を挙げ続け、カナダやインドの国際会議に出かけてそれを発表している。その間、1974年末には定年を迎え、名誉研究員となるが、CNRSの例外的な特別措置によってオルセーでの研究はそれまで通り続けられることになった。そして1977年の東京で開かれた原子核構造国際会議に招かれて帰国。それは十年ぶりの、そして最後の祖国への旅であった。国際会議では分科会の議長をつとめ、また3体系に対する実験の成果を報告。他に東京、大阪、仙台の各地で開かれたシンポジウムや、討論会、講演会にも、身体は痩せ細ってしまったとはいえ、以前に変わらぬ超人的な活躍振りを見せていた。

論文リストを見ると、1970年頃から、湯浅の共同研究者に日本人名が継続して現れていることに気付くであろう。1967年の東京での国際会議を機に、日本から若手研究者をCNRSの研究員としてオルセーに招き、フランスでの経験と実績を積ませようとする一種のプロジェクトを、企画し実現させたのである。この体制は10年以上にわたって実施され、さらに日仏共同研究に進展して行くことになる。

## 9. 日仏共同研究

日仏共同研究とは、フランスのCNRSと日本学術振興会JSPSの間で1973年、双務協定として発足した「日仏科学協力事業」に基づくものである。その要点は、1) 研究者の相互派遣、2) セミナーの開催、3) 日仏共同研究、であって、日仏双方でそれぞれ自国機関に提案書を出し、双方で採択されたものについて実施されるという仕組みであった。共同研究は発足以来1974—76に1件が実施されていたに過ぎなかった。

湯浅が計画した日仏共同研究は、その協定に拠って、日本側とフランス側の研究者、それぞれ数名ずつが協力して、少数核子系に関する実験研究を、オルセー原子核研究所（IPN）の装置を使って行おうとするものであった。湯浅が1977年に帰国した際、京都大学の柳父琢治教授を説得して、両者の間で実施に向けての検討が始められたのである。そして湯浅をフランス側代表、柳父教授を日本側代表とし、双方の若手研究者数名を加えて、研究テーマ、実験方法、人員等に関して具体案の作成が行われることになった。作成された案は、IPNの所長の同意を得て、JSPSとCNRSとに1978年10月に提出された。

研究テーマは「少数核子系の分裂現象による2核子、3核子、4核子間相互作用の研究」である。その提案書類に書かれた柳父教授による「協力研究の目的及び期待される効果」の始めの部分を少し引用しておく。

本研究は湯浅氏の15年にわたるフランスでの研究成果に、日本の研究者の経験と思想とを加えて、2核子、3核子、4核子間の相互作用をさらに深く知ろうとするものである。

156 MeV 陽子を用いた ${}^2\text{H}$ 、 ${}^3\text{He}$ の分裂現象の測定で、湯浅氏等の見出した、特定の運動学的条件の下にあらわれるピークは、現在の理論では説明できず、3核子系の散乱状態の存在の可能性を示しており、少数核子系での相互作用全般の理解のために重要な意味を持つ。湯浅氏の実験は、シンクロサイクロトロン改造のためのシャットダウンにより未完のままで、決定的結論は下されていないが、改造後のシンクロサイクロトロンからの200 MeV陽子を用い、効率、エネルギー精度、測定精度等を一桁近く向上させた実験を行い、明確な検証を与えたい。さらに柳父の提案である ${}^3\text{He}$ の鏡映核 ${}^3\text{H}$ につき実験を行って相互に比較することは、決定的な重要性をもつ。これら2種の標的（ ${}^3\text{He}$ と ${}^3\text{H}$ ）の実験で類似したピークが観測されるならば、3核子系の散乱状態について、我々は世界で最初の実

験的情報を得ることになる。(以下略)

しかし、この共同研究の実施決定に到るまでには、かなりの紆余曲折を経なければならなかった。1979年1月、研究所(IPN)は共同研究を歓迎し、サポートすることを表明、日本側JSPSでも2月始めには採択が決定されたにもかかわらず、CNRSとIPN、JSPSの間に情報が誤って伝えられたり、誤解が生じたりした上に、装置の故障やストライキなど間の悪いことも重なって、実施決定が引き延ばされていったのである。

こうして多くの情報交換や具体案の再検討を余儀なくされることになり、対処の方策をめぐって湯浅と柳父教授の間に、凄まじいばかりの手紙や電話による討論や打ち合わせが行われることになった。湯浅は病を押して、まさに命がけともいえる奮闘・努力を続けた。「柳父資料」(=「柳父-桑折資料」)によれば、柳父教授との手紙のやり取りは、湯浅が1977年東京から帰仏して半年あまりの間に50通にも及んでいたが、78年半ばからはオルセーの湯浅から京都の柳父教授のもとへ電話による攻勢が始まり、79年までの間に58回を数えた。しかもその通話時間は1時間以上、ときには4時間にも及んだ。

この混沌状態の中で湯浅の病状は進み、ついに79年11年半ばから研究所に出られなくなってしまう。湯浅は電話を唯一の手段として、研究所や日本との連絡に悲壮ともいべき闘いを続ける。しかしCNRSの公文書がJSPSになかなか届かず(後にCNRSの内部事情によるものと判明)、湯浅の病状も深刻化してきて、実施の時期の設定も難しい問題となっていた。

1980年に入り、H.ランジュヴァン=ジョリオ夫人と、湯浅と共同研究中の桑折範彦教授との話し合いにより、チーム・タイムを3月末までに2週間とって実験することを計画、CNRSも了承したはずであるのに、その連絡が一向にJSPSに届かず、CNRSのテレックス待ちの状態が続いているうちに湯浅入院の事態に到ってしまう。1月31日、CNRSからの正式承認がJSPSに届いたという報せを得た坂井光夫教授が東京を飛び立ち、病院へ着いたとき、湯浅はもはや意識を失っているように見えたが、「湯浅さん、CNRSからOKが出ましたよ」の教授の言葉に、一時的に意識を回復してうなずいたということである。その日、2月1日の夕刻、湯浅は来世に旅立ってしまう。

日仏共同研究は、ランジュヴァン=ジョリオ夫人が湯浅に代わってフランス側責任者となることを引き受け、日仏双方で実施計画を再検討の末、1981年、柳父教授以下4人の研究者がオルセーに行き、フランス側のランジュヴァン博士以下3名の研究者と協力して、重水素と重水素を衝突させたときの分裂反応の実験が実施された。そして分裂反応の確率や4体散乱の終状態について確かな情報を得るなどの成果を挙げ、それがNo.100の論文となったが、その論文の最後に湯浅への感謝の言葉が捧げられた。

1995年の「湯浅年子メモリアル・コンファレンス」で、ランジュヴァン夫人は、湯浅がよく口にしていたという言葉：

「自分自身のためでなく、科学の進歩のために研究し続けなければならない」

を紹介して、これはまさに湯浅の人生の規範を表しており、これが湯浅の力の源泉であったと語った。この言葉が、まさに感動的な日仏共同研究を生む原動力となったと云えるであろう。

## 10. 多彩な文化活動

湯浅の再渡仏前のさまざまな活動については、5節に簡単に触れたが、ここではその後の、研究を離れたところでの活動について紹介しておく。先きに述べた「女性と科学」の問題に対する湯浅の姿勢は、遠

くフランスにあっても変わらなかった。祖国の女性のおかれた状態に強い関心を寄せ、祖国からの訴えに親身に応えてくれていた。1967年の帰国の際には、お茶の水女子大学で特別講義を、77年の帰国の折には「女性と科学」と題した講演を行っている。

すでに述べてきたことから分かるように、湯浅は、研究活動の中で、余人に成しえない日仏交流の実を挙げている。その活動は研究室の中に留まらず、湯浅に接触を持とうとしてパリに来る人々に、誠実に応対し、接待し、便宜を図る。友人、知人は云うに及ばず、各種使節団、視察団、各種組合の団体等々、科学に限らない大学関係者や留学生も含めて、何かを求めてはるばるフランスまで来た同胞に、できる限りのことをしたいというのであった。湯浅は人々をいろいろな所に案内するだけでなく、フランスの文学・芸術・科学から歴史に至るまでの蘊蓄を傾けた話でもてなす。ユーモアやエピソードでたっぷり味付けをされたフランス文化のエスプリを味わいながら過ごしたかけがえのないひとときが、多くの湯浅ファンをつくり出していった。湯浅の世話によって、科学者に留まらない多くの分野の人々が、フランスでの体験を深めることができたのであった。

湯浅が、文芸家・思想家のゲーノー夫妻を始め、多種・多様なフランス人達と、人間としての真のつきあいを通して、深い友情を育んでいったことが、湯浅にしかなし得なかった多彩な文化活動の根源をなしていると云えよう。まさに〈私設日仏文化大使〉と称されるにふさわしい活躍振りであった。

再渡仏後の執筆に関しては、頼まれた寄稿によって、戦後のフランスの科学文化を始めとする文化の推移を祖国に伝えていたが、1967年の帰国をきっかけとして、再び著作活動が始まった。人生への想い、科学への想い、尊敬する科学者への想い、フランス社会への想いが凝縮された『パリ随想』が73年に出版された。次いでその年の大病を機に、病人対医師の問題などを鋭く捉え、生と死への想いを深めた『続パリ随想』が生まれた。さらに祖国への想いや真理を求めて止まぬひたむきさを綴った『パリ随想3』が没後に刊行された。平行して著作リストにみる多くの寄稿も、科学雑誌その他に寄せている。豊かな感性と自由な精神、真実を求めて止まぬ女性科学者の眼、文芸家、思想家、芸術家も含めた幅広い文化人との飾らぬ濃いつき合い、それらを通して生まれた湯浅独自の想いが、流麗な文章に結晶して、多くの人に感銘を与えたのであった。

湯浅は一年の節目、すなわち大晦日か元旦に、去りゆく年への反省と、来る年への誓いを書き記すことを学生時代から最晩年に到るまで続けていた。それらからは、湯浅がいかに真摯に科学一筋の道を貫こうとしていたか、誠実に人々に接しようとしていたかが伝わってきて、厳粛な気持ちにさせられる。

## おわりに

科学と人生に真実を求めて、真摯に、休みなく歩き続けた道は、それを辿る者に今なお大きな問いかけをなし続けている。その足跡の大きな全貌を、短い文で十分に伝えられるとは全く思えないが、以下の資料と併せて、湯浅をよく知るきっかけとなれば幸いである。

最後に、湯浅がよく口にしていたというひとつの言葉を紹介しておく：

**”jusqu’au bout 最後まで、徹底的に”**

(山崎美和恵・記)



## I - 1 - (2) YUASA, Toshiko

(b. December 11, 1909, Tokyo, Japan ~ d. February 1, 1980, Paris, France), a woman physicist

Miwae Yamazaki & Miwako Shimazu

Dr. Toshiko Yuasa was the first woman nuclear physicist in Japan, known worldwide . She spent most of her research life in France and made great contributions to nuclear physics, specializing in radioactive decay, nuclear reactions, and a few nucleon system.

**Born in Ueno, Tokyo in 1909**, where the old traditions of the Edo era were still prevalent, she was brought up by her loving, caring parents. Her father was an engineer with a research mine ; her mother was from a family versed in traditional Japanese poetry known as Waka. The deep sensibility and gifted literary talents which she inherited from her parents greatly affected how she faced with herself throughout her life. Early in her girlhood, she pledged herself to attain the virtues of honesty (honnêteté) and sincerity (sincérité) and continued to do so in each New Year's resolution until her death, as can be observed in her diary. At the same time, she was endowed with the qualities of a natural scientist ; she was always attentive to other people's emotions and questioned what happened around her with a strong commitment. Her life work in physics gave her an opportunity to explore the wonders and beauties of natural phenomena.

After graduating from Tokyo Higher Normal School for Women's (now Ochanomizu University) Department of Science, in 1931, and from Tokyo Bunrika University's Department of Physics in 1934, Toshiko Yuasa began her research in physics. However, in pre-war Japan, where inequality between men and women was extreme, it was not easy for women to obtain a post as a researcher. Inspired by M. & Mme. Joliot-Curie's paper reporting their discovery of artificial radioactivity, she decided to carry out research in nuclear physics at a laboratory in France. In order to make this dream come true, her life and work involved enormous changes and challenges.

### **Early life in Paris**

In 1939 just as she passed the examination to study in France, World War II broke out in Europe. Britain and France declared war on Germany in the wake of the German invasion of Poland. Despite the risk of war, in the following year, she left for France. To her it was doubly an agonizing decision : her father was dying of cancer and death was imminent.

**Once in Paris**, Dr. Yuasa was confronted with a situation where foreigners were not allowed to work in laboratories. Had it not for Dr. Yuasa's impassioned plea of her strong commitment and enthusiasm for almost a month, Professor Frédéric Joliot-Curie, Mme. Curie's son-in-law, would not have welcomed her at the Collège de France. Shortly after, she was ordered to evacuate to Bordeaux on May 19, 1940 ; but she resumed her research in Paris on the 31 st the minute the laboratory reopened. On June 10, four days before the Germans entered Paris and the city became undefended by the German occupation, it was again closed until its reopening in August 1940 under the a French-German agreement and restarted its research in September 1940. During this time, she concentrated on desk works, studying at the university library and taking art classes. While such military operations of World War II, coupled with her great sorrow at her father's death, made her research full of hardships, in December 1943, she obtained the French National

Doctorate in Physics for her work on the continuous spectrum of the beta rays emitted by the artificial radioactive nucleus.

**During her research life in Paris,** Dr. Yuasa built ever-lasting, trusting relationships with the Curies. Seeing the ideal elements of women scientists in Mme. Curie's high integrity, devotion and deep affection, Dr. Yuasa looked upon Madame's eldest daughter, Irène Joliot=Curie, as her role model, who she thought was Mme. Curie's living image. Under Prof. Frédéric Joliot=Curie whom she held in high esteem, she launched her research, with his support as her lifelong adviser and mentor.

### **Life in Germany**

In 1944, when American, British and French troops landed on the Normandy coast of France, she was urged by the Japanese embassy to evacuate Paris and she took refuge in Berlin. At the end of the year, she resumed her research at a laboratory in Berlin University, devoting herself in developing a double focusing beta spectrometer, which was completed in April 1945. Her life in Germany lasted until Germany signed unconditional surrender terms in May 1945. Then, to avoid the imminent danger, she was ordered by the Russian army to return to Japan, carrying the spectrometer on her back.

### **Life in war-torn Japan**

Dr. Yuasa came back to her home country, Japan, on June 30, 1945 via Siberia and Manchuria, just before Japan's unconditional surrender on August 15, 1945. After a long leave from the University, in July she was sent to a countryside where her home-room students were stationed for evacuation. It was there she heard the news of the dropping of atomic bombs on Hiroshima on August 6 and Nagasaki on August 9. Back in her war-devastated home country, it was difficult to perform her experiments. The Japanese were forbidden by the American Occupation Force to do research on experimental nuclear physics, and the GHQ scrapped cyclotron indispensable to the research experiments. And she suffered the bereavement of her cherished mother.

In spite of her ordeal, Dr. Yuasa never forgot to devote her energies for the attainment of young female students and women ; by giving advice and help, she encouraged all those dreaming of being scientists, especially those wavering because of financial problems or limited enrollments. Her commitment impressed many young women. In the meantime, she was compelled to spend part of her time for administrative matters in the midst of the university reform and student movements.

### **Later life in Paris**

Although she had a post at Ochanomizu University, the favorable research environment in France encouraged her to return to her work there. In 1949, she left for France to pursue research at the Collège de France as a researcher affiliated with CNRS (Centre Nationale de la Recherche Scientifique). At the invitation of Prof. Joliot=Curi, she was probably the first Japanese physicist to reside in France while official diplomacy was not yet established between France and Japan. In 1957, she was elevated to be Maître de Recherche (chief researcher) at CNRS and continued her research at l'Institut de Physique Nucléaire du Université de Paris à Orsay (Institute of Nuclear Physics at the Université de Paris at Orsay), becoming Maître de Recherche Honoraire (chief researcher emerita) after her retirement in 1975.

Once she proposed Japan–France research collaboration on "a few nucleon system" in 1978, she was actively involved in realizing it until the very moment of her death. Sacrificing her health, she occupied herself with mediating between Nihon Gakujutsu Shinkokai (Japan Society for the Promotion of Science) and CNRS, resolving conflicts between French and Japanese organizations. Unfortunately, she died of terminal cancer just as she won the approval from both institutions for the proposal to go into effect.

A renowned researcher, Dr. Yuasa was known for her experimental work and publications. She frequently participated in international conferences. She promoted the friendly relations between France and Japan, by directing joint research through academic correspondences among researchers and invitations of young Japanese researchers to France. At the same time, she acted as a kind of cultural minister through cultural exchanges between French and Japanese artists and other intellectuals, through introducing the French cultural heritage to Japan, and her accommodation of many Japanese visiting France. She also wrote essays and gave talks on France for general audiences in Japan.

**Like the Curies,** Dr. Yuasa had a strong sense of social responsibilities. She was seriously concerned with social issues, including women and science, and the attainment of world peace. Probably because of her family background, she interested herself in creative endeavors and was active as a prolific writer, expressing in a flowing style her insightful reflections on topics ranging from science and human life, to French art and academia, science and religion, doctor and patient, Japanese culture and society, and biographies, which were published in a form of books or articles in Japanese. Her major work is a trilogy entitled *Pari Zuiso* (Essays in Paris). Mention should also be made on her special love of poetry and many tanka poems she composed during her lifetime.

Kind and considerate of others, brimmed with humanity, charms, and humor, Dr. Yuasa lives in the minds of many people to this day. She is remembered for the quality of her physics and her contributions to women and to her country. She is also remembered for her self-discipline--she was strict with herself at all times and abided by two policies: think through and discuss with others until fully convinced, never to compromise, and faithfully strive to achieve one's own goal through a number of critical, yet deep introspection. Her view on science is best summarized in the following excerpts from *Kagaku eno Michi* (A Road to Science): "A purely scientific mind shares interest with the minds of all other essentials including art, literature, and religion."

## I-1-(3) 年譜

論文番号は「I-2-(2) 論文リスト」と同じ。著作物は著書及び訳書の刊行年のみを挙げた。また出席した国際学会の会議名と開催地とを挙げた。

- 1909** 12月11日、東京下谷区桜木町（現台東区上野桜木2丁目）に生まれる。父湯浅藤市郎は当時特許局勤務，母禮子（橘家出身），兄2人，姉3人（後に弟1人，他に幼時に逝った妹1人）。
- 1913** 類焼により住居消失，上野寛永寺に仮寓。
- 1914** 牛込区（現新宿区）加賀町に転居。
- 1915** 市ヶ谷尋常小学校入学。
- 1917** 愛日尋常小学校へ転校。
- 1920** この頃から父は勤務を辞めて完全自動製糸機の試作を始める。
- 1922** 愛日尋常小学校卒業，東京女子高等師範学校附属高等女学校（通称お茶の水）入学。
- 1927** 東京女子高等師範学校理科入学。
- 1931** 同校理科卒業，東京文理科大学物理学科入学。
- 1934** 同校卒業，同校副手（嘱託）となる。原子・分子分光学の研究開始。【論文 1】
- 1935** 東京文理科大学退職，東京女子大学講師。【論文 2】
- 1937** 東京女子大学退職。【論文 3】
- 1938** 東京女子高等師範学校助教授。【論文 4】
- 1939** フランス政府給費留学生試験に合格。9月，第二次世界大戦勃発のためパリ出発延期となる。【論文 5,6】
- 1940**  
(30歳) 1月25日，神戸港出航，3月2日，パリ到着。パリは戒厳令下，研究所は軍の管理下にあり外国人の入所は困難と云われる。29日，フデリック・ジョリオ＝キュリーに会い研究所入りを許可される。4月19日，コレジ・ド・フランス原子核化学研究所で研究開始。核分裂に伴う粒子生成の研究，共同研究者ハインス（米）。
- 5月19日，独軍侵攻によりボルドーへ避難。31日パリに戻り研究を再開。6月10日再び研究所閉鎖。14日独軍パリ入城。9月研究再開。Ac, AcA等の $\alpha$ 崩壊に伴う反跳核の振る舞いをA・ベルトローと共同研究。
- 1941** 1月19日，父逝去（ただし訃報は2ヶ月以上も遅れて届いた）。【論文 7,8】
- 1942**  $\beta$ 線連続スペクトルの研究開始。【論文 9,10】
- 1943** 6月，学位の資格試験に合格。12月，仏国理学博士の学位を取得。学位論文「人工放射性核から放出された $\beta$ 線の連続スペクトルの研究」【論文 11,12】
- 1944** 6月，F・ジョリオ＝キュリー抵抗運動のため地下に潜行。英米連合軍ノルマンディーに上陸。8月，大使館の勧告によりベルリンに避難。12月，ベルリン大学附属第一物理研究所で研究開始。
- 1945**  
(35歳) 2月，避難勧告を受けるが，ベルリンに留まって研究続行。4月 $\beta$ 線スペクトル測定用の2重焦点型分光器を完成させる。5月9日，ドイツ全面降伏。シベリア経由で帰国の途へ。6月30日，敦賀上陸。東京女高師に復帰。学生動員先の長野県中込へ。23日，母逝去。8月，動員先で敗戦を知る。9月，GHQより核エネルギー関係の研究禁止令。10月，東京女子高

- 等師範学校教授。理化学研究所仁科研究室嘱託。11月、理研のサイクロトロン及び付属機器が米進駐軍により東京湾に投棄される。
- 1946**  $\beta$ 崩壊の理論的考察。【論文 13】。訳書 マリー・キュリー著『ピエール・キュリー傳』。
- 1947** 著書『科学への道』。【論文 14】。
- 1948** 12月、京都大学化学研究所兼任講師嘱託。  
著書『黒葡萄一むすか』、『フランスに思ふ』。寄稿「離脱の詩」(『若き日の素描』)。
- 1949** 2月21日、貨客船で横浜出航、フランスへ向かう。シンガポールに約1ヶ月余儀なく滞在。5月5日、ル・アーブル港着、直ちにパリへ。パリ14区の天体物理研究所宿舍、次いで5区の国際女子学生会館フォアイエに居住。コレジ・ド・フランス原子核物理・化学研究所で、国立中央科学研究所(CNRS)研究員としてF・ジョリオ＝キュリーのもとで研究再開。 $\beta$ 崩壊の型や崩壊に伴う諸現象の研究。5月、理研嘱託及び京都大学嘱託辞職。お茶の水女子大学発足、東京女高師との兼任教授。
- 1950** 著書『パリ随想』。
- 1951** パリ6区 Rue Herschel に転居。【論文 15,16】。著書『放射性同位元素とその生物学医学への応用』
- 1952** お茶の水女子大学教授(東京女高師廃止)、4月より休職となる。【論文 17,18,19】( $\beta, \gamma$  spectroscopy に関する国際会議(アムステルダム))。
- 1953** 【論文 20~23】。
- 1954** 放射能計算尺発明。【論文 24~27】(ラジオアイソトープ国際会議(オックスフォード))。9月、お茶の水女子大学退職。【論文 28~31】。(原子力平和利用国際会議(ジュネーヴ))。
- 1955** ビキニ水爆実験('54)と福竜丸被曝に対する日本側の解析を仏医学週刊誌に報告。
- 1956** 3月17日、I・ジョリオ＝キュリー逝去。【論文 32~36】。(核物理研究会、パリ)。
- 1957** パリ大学原子核研究所主任研究員(準教授相当)となる。(国際会議(アムステルダム))。【論文 37~40】。( $\beta, \gamma$  spectroscopy 国際会議(URSS))
- 1958** 8月14日、F・ジョリオ＝キュリー逝去。【論文 41】。(低エネルギー核反応と核構造国際会議(パリ))(ブリュッセル博覧会で仏原子核物理に関する展示責任者をつとめる)。
- 1959** 研究所がオルセーに移る。【論文 42】。(核力に関する国際会議(ロンドン))。
- 1960** パリ14区の Rue Remy Dumoncel に転居。【論文 43,44】。
- 1961** サイクロシンクロトロンによる中エネルギーの核反応の研究に移行。【論文 45,46】。  
(51歳)(低・中核エネルギーの核物理国際会議(ストラスブール); Rutherford conf. (マンチェスター)) 訳書『ジョリオ＝キュリー遺稿集』。
- 1962** 3月、理学博士(日本、京都大学)。学位論文「 ${}^6\text{He}$ の $\beta^-$ 崩壊に対するガモフ・テラーの不変相互作用の型について」。【論文 47,48】。(直接相互作用と核の反作用の機構に関する国際会議(パドア))。11月、自動車事故で脊椎を捻挫し、20日あまり療養。
- 1963** 【論文 49】。(核物理研究会、パリ)
- 1964** 【論文 50,51】。(原子核国際会議(パリ); 原子核国際会議(ガトリンブルグ))。
- 1965** 【論文 52~54】。
- 1966** 【論文 55~58】。(軽い核の物理研究会(リヨン); 核構造と素粒子国際会議(オックスフォード); 核物理国際会議(ガトリンブルグ))。



- 1967 8月～10月, 原子核国際会議(東京)のため帰国。【論文 59～62】。少数核子系の研究を始める。この頃から日本の若手研究者を2,3年の任期でオルセーに招き, 共同研究する一種のプロジェクトを開始。
- 1968 【論文 63】(核物理と素粒子物理の実験法に関する研究会(ストラスブール))。
- 1969 パリ5区 l'Estrapade へ転居。【論文 64,65】。(原子核と素粒子における3体問題国際会議(バーミンガム))
- 1970 訳書 P・ビカール著『F・ジョリオ＝キュリー』。【論文 66～70】。(物理学会(グルノーブル))。
- 1971 【論文 71】。(3体問題シンポジウム(ブダペスト))。
- 1972 パリ大学原子核研究所主任研究員(教授相当)。6月, 弟橘藤雄氏逝去。【論文 72,73】。(ヨーロッパ物理学会(アクサン・プロバンス); 少数核子系国際会議(ロスアンジェルス))。
- 1973 5月, 胃と胆嚢の摘出手術を受ける。7月退院。9月実験開始。著書『パリ随想』。【論文 74～77】。
- 1974 (原子核国際会議(ケベック))。12月, 定年退官。【論文 78,79】。
- 1975 フランス国立中央科学研究所名誉研究員となり, 研究続行。【論文 80～86,91】。  
(65歳)
- 1976 10月, 紫綬褒章受章。【論文 87～89,92】。(核物理における少数粒子問題国際会議(アムステルダム))
- 1977 8月～10月, 原子核国際会議(東京)のため帰国。【論文 90,93～96】。著書『続パリ随想』
- 1978 3月, 自動車事故に遭う。【論文 97】。5月, 少数核子系研究に対する日仏共同研究案提出。(少数核子系国際会議(グラッツ))。
- 1979 【論文 98】。(少数核子系ヨーロッパ会議(ゴードン))。日仏共同研究実現のため力を尽くすが, 11月頃より体力がなくなり, 研究所へ行けなくなる。電話で研究の連絡を続ける。
- 1980 1月30日, 午後2時パリ郊外アントワヌ・ベクレル病院に入院。  
(70歳)  
1月31日, CNRS から日仏共同研究正式承認の電報が日本側に届く。  
2月1日, 日仏共同研究承認の報が昼頃伝えられる。午後4時25分逝去。勲三等瑞宝章受章。
- 
- (没後: 2002年まで)
- 1980 2月8日, パリで葬儀。  
2月19日, 追悼ミサ(上智大学: クルトウル ハイム; パリ: ノートルダム・デ・シャン教会)  
3月8日, 東京西巣鴨の善養寺で葬儀。  
3月11日, 告別と追悼の式(東京, 日仏会館)。  
12月, 著書『パリ随想3』刊行。
- 1981 2月, オルセーの原子核研究所で日仏共同研究開始。
- 1984 【論文 99 出版】。
- 1985 【論文 100—日仏共同研究による—出版】。
- 1995 12月, 「湯浅年子メモリアル・コンファレンス」(お茶の水女子大学女性文化研究センター, 日仏理工科会共催, 於お茶の水女子大学)。
- 2001 7月, 「湯浅年子の碑」建立(東京豊島区・善養寺)
- 2002 お茶の水女子大学に「湯浅年子記念特別研究員奨学基金」制度設立。

(以降は第三部「追悼・追想・評伝関係資料」参照)



## I-2. 研究業績

### I-2-(1) 研究解説

湯浅は [稀少現象を探って来た道を振り返って] (日本物理学会誌, 第 34 卷, 第 4 号 (1979)) において, 自身の研究分野を内容, 年次によって区分し, 研究過程を振り返って内容を解説している。以下はその解説から研究内容に直接係わる部分を, ほぼ湯浅の記述に従って, 書かれている言葉を抜き出してまとめたものである。(山崎美和恵・記)

区分 A~F の表題に続く ( ) の中は, 該当する年次と論文リストの論文番号 No. である。また各区分に付随させた記号 (R 1)~(R 7) は, 第 II 部 R-実験研究関係資料に用いた区分名である。

A: 原子分子分光学—(1932–1939: No.1~6)	(R 1)
B: 原子核物理—主としてWilson霧箱による研究	—
B 1. 反跳核と原子の衝突—(1940–1941: No.7,8)	(R 2)
B 2. $\beta$ 線連続スペクトル—(1941–1944: No.9~12)	(R 3)
C: $\beta$ spectrometer の作成他 (1944~1948: No.13,14)	(R 4)
D: 原子核物理—主として原子核分光学—(1949–1958: No.15~45,47)	(R 5)
E: 原子核物理—中エネルギー領域の原子核反応—(1957–1970: No. 46,48–61,63,64,67~69)	(R 6)
F: 少数核子系—(1966–1980: No. 62,65,66,70~99)	(R 7)

#### **A: 原子分子分光学** (1932–1939: No.1~6, 東京文理科大学物理学教室において)

大学の卒業研究を含む数年間の研究である。ある種の元素の化合物の蒸気を放電させて得る輝線スペクトルの系列で, 蒸気圧を高くすると波長がずれるという現象が当時注目されており, Cl, Br, I, N, O, Hg で研究されていたのを, Sb-I, Sb-II, Sb-III について, そのずれ方を詳細に調べた。その結果, Sb-III のずれ方が最も大きいこと, 蒸気圧の影響は主として主量子数  $n$  とともに, また内部量子数  $j$  によっても, 増すこと。変位の大きい線では, 線の状態もちがうこと。一般には赤い方にずれるが, 紫の方にずれる系列もあることなどから, それらが近傍の原子によるシュタルク効果の結果であろうと考え, 細かい観測を行なった (No.1, 2)。この結果は米国の H.Margenau から賞賛された。

続いてハロゲンの 2 原子分子スペクトルを研究し, フッ化物が他のハロゲン化合物と異なることを解明した (No.3–6)。HF は, 化合力が強いために, ガイスレル管のガラスや水晶が犯される可能性があり, 観測される美しい帯スペクトルが何に起因するものであるかを決定するのに随分苦労した。結果として SiF によると考えられるが, 確定はできないと結論している。

**B：原子核研究—主としてウイリソン霧箱による研究** (1940–1944: Le Collège de France, Le Laboratoire de Chimie Nucléaire において)**B.1. 反跳核と原子の衝突** (1940–1941: No.7,8)

Joliot 教授によって始められた原子核分裂の研究計画の一つとして、H, O および N の中で重い核 (Tn, Ac 等) が如何にエネルギーを失うかということ、また極めて低エネルギーの陽子の、エネルギーと飛程の関係を知る事等があった。Tn または Ac のような放射性ガスをウイリソン霧箱に導入すると、第一次崩壊によって後退核と正反対の方向に  $\alpha$  粒子が放出されるはずなのに、時によってはある角度をなして、恰も目に見えない第3の粒子が放出されているかのような現象が確認されていた。Joliot 教授のウイリソン霧箱は、約 1 cmHg まで減圧できるので (ウイリソン霧箱は低圧であればあるほど飛跡が拡大される。) 約 76 倍に飛跡が拡大されて観測される。

実際には 18 mmHg の霧箱に An ガスを導入して、立体写真をとり、立体像を復元して、後退核との角度、後退核の原子散乱による運動エネルギー損失を測定する。一つの後退核の平均全飛程中に 5–6 回の原子との散乱が見られ、そのうち水素と思われるものは飛程が長く、酸素や窒素のそれは太くて短いが、これらの角度と飛程を一つ一つ手廻しの計算機で計算する。結果として、いわゆる重イオンである An や AcA の周囲には水蒸気が凝結する確率が大きく、そのために後退核の周囲では霧箱の条件が変わっている可能性があることを、実験例をあげて説明した。

このときの副産物として、空気 1/3 と水蒸気 2/3 の混合気体が 1 気圧のときの、陽子の飛程と速度の関係を、 $0\sim 0.8\times 10^8$  cm/s まで、低圧における測定から計算した。それまでに判っていたのは Blackett と Lee による  $1\sim 10\times 10^8$  cm/s の範囲であった。

**B.2.  $\beta$ 線連続スペクトル** (1941–1944: No.9~12)

当時作動しはじめたサイクロトロンによって、短い寿命の人工放射性元素を作り、他の新元素の実験の標準に使用するという Joliot 教授の企画の一端として、 $^{75}\text{As}$  と  $^{52}\text{V}$  の  $\beta$  スペクトルを研究することとなった。また、なるべく放射性濃度の高い放射源を作り、かつ他物質の存在によるバックグラウンドを少なくするには、どんな物質の上に定着させるのがよいか、さらにスペクトルが複合か単純か、Fermi 型か Konopinski-Uhlenbeck 型かも調べて、スペクトルのエネルギーの上限を決めることも仕事になった。

放射性元素の濃縮では、化学部長 P. Sue 氏と共同で、有機性の As の金属錯塩から  $^{75}\text{As}(n,\gamma)^{76}\text{As}$  反応を用いて  $^{76}\text{As}$  を作り、Szilard-Chalmers の方法によって、As の 75% くらいを 7.5 mg/cm<sup>2</sup> の放射源に濃縮することができた (No.11)。この方法は、 $(n,\gamma)$  反応で放射核ができるとき、同時に放出される  $\gamma$  線と同じ運動量で核が後退するために、はじめの非放射性同位元素が結合していた化合物でのボンドが切れて、放射核が孤立する。これを適当な溶液にして遠心器によって分離するものである。同様の方法で  $^{52}\text{V}$  の濃縮も行なった。

これらの  $(n,\gamma)$  生成放射性元素の、崩壊常数  $\lambda$ 、連続スペクトルの上限、 $\gamma$  線放出の有無、 $(n,\gamma)$  反応断面積等の研究 (No.9,10,11) をまとめたのが学位論文になった (No.12)。この論文の中で、 $\gamma$  線による陰陽電子対創生の他に、単独の陽電子が観測されることを指摘した。

**C:  $\beta$  spectrometer の作成他** (1944-1945: Das Erste Physikalisches Institut der Universität Berlin において)  
(1946-1948: No.13,14 東京女子高等師範学校物理教室において)

1944年8月引揚げ勧告を受けてベルリンに移り、RaEの $\beta$ 線スペクトルの研究を進めるべく、 $\beta$ 線の質量と運動量を測るための、静電場(同心円型)と磁場(90°型)とを組み合わせた二重焦点分光器を作ることにした。昼夜爆撃の続くベルリンの中心で、1944年12月から1945年3月までかかって、恐らく世界で初めての $\beta$ 線スペクトル用の二重焦点型分光器を作り上げた。同年5月、これをリュックサックに入れて避難し、7月それを持って帰国した。それは後に再びフランスへ持ってきた。

日本では原子核研究禁止令のため、やむなく崩壊に関するフェルミ関数の数値を小数点以下5桁まで与える計算をすることにした。G関数にスターリングの展開式を用い、筆算で行なったが(No.14)、後にパリで電子計算機を使用して得た結果(No.20)とよく合っていた。

**D: 原子核物理—主として原子核分光学** (1949-1958: No.15~45,47, Le Laboratoire de Physique et Chimie Nucléaires において)

1949年2月、再びパリで研究を開始。論文(No.9,12)で指摘した $\beta^-$ 源の中に正電荷粒子があるということが、研究者の間で問題になっていることを知り、霧箱と同じ位の軌道を描く90°型の小型スペクトル分析器をつくって、 $^{32}\text{P}$ 線源を用いて調べた。その結果、+の粒子の強度は $\beta^-$ に比して $10^{-4}$ 以下であり、 $\beta^+$ としてのエネルギーは120 keV以下で、連続的であって、 $^{32}\text{P}$ の崩壊のエネルギーが核内で $e^+$ 、 $e^-$ に直接変換すると考えると大体説明できたが、理論が与える物質化作用の割合に比べると、実験値の方が大き過ぎた(No.17,24)。この問題は後にDeutsch等が $^{32}\text{P}$ および $^{90}\text{Y}$ について確認し、 $^{32}\text{P}$ では $\beta^-$ のエネルギーが核内で直接電子対になるが、 $^{90}\text{Y}$ では $^{90}\text{Zr}$ の第一励起状態( $0^+$ )へ移る確率がわずかながらあり、これが基底準位( $0^+$ )に転位するときの内部電子対創生による $e^+$ が観測にかかると説明した。また $^{32}\text{P}$ では、これを生成する $^{32}\text{S}(p, n)^{32}\text{P}$ の $^{32}\text{S}$ に $^{33}\text{S}$ が混じっていて $^{33}\text{P}(\beta^+$ 放射)ができるということを、実験から推定した(No.24)。以上のことが電気単極転移に興味をもたせる端緒となり、 $^{90}\text{Y}$ の高純度の強い源を得て、 $^{90}\text{Y}$ が純粋に $\beta^-$ 崩壊のみであることを確かめ、 $\beta^-$ 崩壊の終止核である $^{90}\text{Zr}$ の第一励起状態 $0^+(1.75\text{ MeV})$ からの内部転換電子および内部電子対創生の $\beta^-$ に対する割合を $e_{\text{K}}/\beta \sim 1.06 \times 10^{-4}$ 、 $e_{\text{L+M}}/\beta \sim 0.53 \times 10^{-4}$ 、および $e^+/\beta \sim 5.4 \times 10^{-5}$ と決めた(No. 34, 35, 36, 37, 39)。No.42の論文では、 $0^+ \rightarrow 0^+$ と $2^+ \rightarrow 2^+$ の確率が不連続に違うことから、核内の状態による許容度に違いがあるのではないかと考え、2個の $\gamma$ 線放出によって基底状態に移るとしたらその強さは $e_{\text{c}}+e^+/\beta^-$ の $10^{-3}$ 以下であろうと書いた。幸いこの予想以上の強度でなかったことが確かめられたのは、この論文から十数年を経た後である。

その後、厚い電磁レンズ型分析器を使って、 $^{204}\text{Tl}$ および $^{90}\text{Y}$ (何れも第一次禁止で単一スペクトル、 $\delta J=2, \text{Yes}$ )のスペクトルを精力的に観測し、フィールツ項と呼ばれる補正項の考察をしたりした(No.27,28,29,40)。その他 $^{59}\text{Cu}$ のスペクトルの研究(No.30)、 $^{29}\text{P}$ 、 $^{33}\text{Cl}$ 等の対称核(No.21)、 $^{25}\text{Na}$ 等の研究(No. 26, 32, 33)において、サイクロトロンと小型の分光器とを連結し(いわゆる on line の始まり)、短寿命の原子核についての法則のテストや、ZまたはNが14の魔法数の想定もした。

弱い相互作用の理論が出されて、 $\beta$ 崩壊の型がフェルミ型(許容変換はベクトル型)かガモフ・テラー型(軸ベクトル型)かをテストする直接的な方法として、 $\beta$ 粒子と $\nu$ 粒子との相関を観測することにした。この観測のために考案した圧力可変・自動(および自記)ウイルソン霧箱(No. 38, 41, 43, 44)をサイク

ロトロンに直結して、 ${}^9\text{Be} (d,n) {}^{10}\text{B}$  反応を起こさせ、その中性子による ${}^9\text{Be} (n,\alpha) {}^6\text{He}$  から得た ${}^6\text{He}$  の崩壊を調べて、 $\beta$  と  $\nu$  の相関を求め、変換は T (tensor 型) であること、A (axial vector 型) が混っているとしても少ないことが言えた (No.45)。しかし、Be が身体に有害であることから、使用中止の要請が研究所から出され、完遂はできなかった。後年 A は T の 4% 以下という結果が Johnson 等によって出されている。

前述 (No.38-43) の霧箱は、少くともある観測したい現象が起こった時だけ作動するようにできていて (自記)、可変圧力で、電気系の測定だけでなく、加速器につないでしかも現象が目に見えるという要求を満たすもので、ある意味で Joliot 先生からの思想を近代的にしたものと思う。

### E: 原子核物理 (中エネルギー領域の原子核反応) (1957-1970: No. 46,48-61,63,64,67~69, ) (L'Institut de Physique Nucléaire において)

中エネルギー (156 MeV のシンクロサイクロトロンによる) 領域の核反応研究に移り、最初はプロパン泡箱によって ${}^{12}\text{C}(p, 2p) {}^{11}\text{B}$ ,  ${}^{12}\text{C}(p, pd) {}^{10}\text{B}$ ,  ${}^{12}\text{C}(p, pt) {}^9\text{B}$ ,  ${}^{12}\text{C}(p, p\alpha) {}^8\text{Be}$ ,  ${}^8\text{Be} \rightarrow 2\alpha$  および ${}^{12}\text{C}(p, 3p) {}^{10}\text{Be}$  等を同時に撮影、分析し、いくつかの興味ある結果を得た (No.49-52, 56-61)。

目で見る観測が好きで、 $\beta$  線や  $\alpha$  線観測用の、入射粒子 ( $p$  や  $\beta$ ) で作動する薄膜電極のスパーク・チェンバーを作製し (No.64)、また ${}^4\text{He}$  及び純度の高い水の泡箱の作製も計画したが、研究所では、エレクトロニクスによる測定器に次第に移行することになった。その頃プロパン泡箱を少しの事故もなく使いこなしていたのは、同じ型の加速器を使う Harwell, Harvard, Orsay のうち、我々のところだけであったが、40 気圧のプロパンを使うのは相当気骨の折れることであった。

プロパン泡箱による ${}^{12}\text{C}(p, 2p) {}^{11}\text{B}$  の研究で、一平面上の ( $p, 2p$ ) 反応 (co-planar) とそうでないもの (non-coplanar) との比較ができ、平面波インパルス近似 (PWIA) の方が歪曲波ボルン近似 (DWBA) よりも一般性のあることが判った (No. 55, 56, 57, 59, 61)。これを確認するために、2 対のテレスコープ (DE-E 型) のコインシデンスによる方法で立体的に転換できる装置を用いて、 $E_p=156$  MeV で測定した (No.67-69)。

### F: 少数核子系 (1967-1980: No. 62,65,66,70~99, L'Institut de Physique Nucléaire において)

[湯浅自身による解説「少数核子系の問題」はついに発表されることなく終わったが、遺品中にその不完全な草稿があり、以下はその草稿と論文の内容に基づいて、解説を試みたものである。]

軽核による ( $p, 2p$ ) 反応を研究しているうちに、最も軽い核、重水素を使うことを考えるようになり、液体重水素の設備が出来たのを機に ターゲットに液体水素を用いる最初の実験を行った (No.62)。その結果は 1967 年の原子核国際会議 (東京) で発表したが、散乱角の大きいところに、通常の擬弾性散乱では説明できないピークが出ることを指摘した。

その後実験的には ( $\gamma, n$ ) の分離が出来る極めて有能な大型液体シンチレーション・カウンターを作ることに成功し (No. 76)、これによって ${}^2\text{H}$  および ${}^3\text{He}$  の ( $p, 2p$ ) と ( $p, pn$ ) を同時に測定する一連の研究を行うことが出来た (No. 77, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85)。さらに、エネルギーの分解能をよくするために、薄いプラスチック・シンチレーターを重ね合わせて、各々にホドスコープをつけた中性子カウンターも作った (No. 88, 89, 97)。

少数核子に関する研究は、今や数値的に精密な理論・実験の比較の時代に入り、その意味では私の思っ



ていた方向に進んできたように思えるが、実際にはもっと難しい難点に遭遇してきているようにも思える。そこで、理論と実験の現状を紹介しつつ、これに対する私の仕事を示すことにしたい。

理論的には、3体あるいは4体のファデーフ方程式の解を得るのに、2体(N-N)相互作用ポテンシャルの選び方の問題がある。そこで種々の核子間ポテンシャル(Hamada-Johnston型, soft coreを入れた Reide potential, Yamaguchi type の separable potential, メゾン交換等)を用い、部分波としてD波までを入れた多重散乱の計算を行って、実験との比較を試みることにした(No. 65, 66, 70, 71, 72)。また終状態にクローン相互作用を入れた結果を ${}^2\text{H}(p, 2p)n$ および ${}^2\text{H}(p, pn)p$ について出し、これらの反応の同時測定の結果と比較した(79, 81, 85)。

以上の結果として、準粒子散乱(QPS)のピークは ${}^2\text{H}$ のD状態を入れた2次のオーダーで5%以下の違いであるが、終状態相互作用(FSI)のピークにはまだ30%位のずれがある。したがって、2体系に対しては、(1):N-N相互作用のモデルがよくないか、(2):従来と違う効果を入れる必要があるか等を考えなければならない。3体系に対しては、 ${}^3\text{H}$ の結合エネルギーおよび ${}^3\text{He}$ の構造因子で、結合エネルギーを実験値に近づける種々の試み(軟芯の導入等)は構造因子にマイナスの結果を与えるので、近距離の3核子間相互作用に斥力を入れて、その効果を調べる試みがなされており、欠点は幾分補えるようであるが、まだこのような簡単な問題で実験値と合わないところに理論の難点がある。そこで(a):非相対論的扱いを考え直す、(b):新しい効果(バリオンの共鳴, 3体力, メゾン交換等)を入れる, 等を考えることが必要になろう。3体系でなお分析されなければならない物理量として、(α): ${}^3\text{H}$ および ${}^3\text{He}$ の結合エネルギー、(β):これらの核における電氣的構造因子および磁氣的構造因子(γ):核子-重水素核の弾性散乱および分裂、(δ):これらの反応における偏極、(ε): ${}^3\text{H}$ および ${}^3\text{He}$ の電子やγとの相互作用, 等があるが、理論と実験との一致は、静的および動的性質についてまだまだである。

これらの研究で私が一貫して考えたことは、弾性、非弾性散乱として $d\sigma/dY$ を測定する方法では、第3核子は積分されたものになり、特別の運動条件でのみ起こる効果は、精密度を失った形でしか見られないから、あらかじめ見ようとする運動条件に合わせたn階の微分断面積を測定するのがよいということであった。ある特定の運動条件をきめて、その条件で観測するという、imposed kinematic condition(Pugh,1975)と呼ばれた測定法の利点を主張し、想定し得る種々の終状態相互作用(FSI)に対応する運動量条件を検討して、特定の終状態を観測するための最適条件を設定し、微分断面積の運動学的完全測定を行うことである。運動学的完全実験によって多重散乱、すなわち、終状態相互作用を検証することを試みて、その重要性を確認することができた。その上で、固定散乱中心の近似、あるいは準粒子散乱(QPS)、単純インパルス近似(SIA)等の散乱の近似理論に対する評価を行い、さらにファデーフ理論の適用に際しての、2体相互作用の入れ方、オフ・シェル散乱の効果、各部分波の効き方などについて議論を行ってきた(78, 79, 81, 83, 86)。

また3核子系では、全重心系で3個の核子が一直線に並ぶ特殊な終状態が可能であり、この運動条件のもとで3体力の効果が観測される可能性がある。この条件を満たす領域は、FSI領域から遠くで断面積が小さく、角度への依存性が非常に敏感であって、系に特有なコ・リニア効果を検出するには相当な綿密さと精度が要求される。そこでターゲットの中での多重散乱をなくしたり、測定精度あげるための装置の改良もいろいろ行って、詳細な測定を行った結果、同一直線上の配位(colinear)の条件のもとでQPS的な緩いピークが現れることを確認した(Delhi, 1975)(No. 85, 86)。さらにその実験を156 MeVの

プロトンで追試して、QPS および FSI と異なったピークが、 $d^3\sigma/dY_1dY_2dE_1$  に出るという実験結果を得た (No.90,93) が、200 MeV の強いビームに改良されるのを待つて再試するつもりである。

4 体系に対しては、理論はまだ出来ていないといえないが、実験では前述のホドスコープを使い、 $^3\text{He}$  の分裂反応による 4 核子系、とくに終状態  $p-d$ ,  $p-p$   $n$ ,  $p-2p$  系の FSI を検出して、3 体力の検証、2 体相互作用モデルに対する検証をすることを試みている。4 体系では、それらの検出に最も適切な運動量条件の設定が一層重要であり、測定精度の向上もさらに求められなければならない。

(ここで主要な論文掲載雑誌名をその省略形とともに挙げておく)

省略形	雑誌名 (発行所)
C. R.	Comptes rendus des séances de l'Academie des Sciences(L'Academie des Sciences, Paris)
J. Phys. Rad.	Le Journal de Physique et le Radium (La Société Française de Physique)
Phys. Lett.	Physics Letters (North-Holland Pub.Co., Amsterdam)
Nucl. Phys.	Nuclear Physics (North-Holland Pub.Co., Amsterdam)
Nucl. Inst. & Meth.	Nuclear Instruments and Methods (North-Holland Pub.Co., Amsterdam)
Phys. Rev.	Physical Review (American Physical Society)
Rev. Mod. Phys.	Reviews of Modern Physics (American Physical Society)
Proc. Phys.-Math. Soc. Jpn.	Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan
Prog. Theor. Phys.	Progress of Theoretical Physics (Japan Physical Society)



## I-2-(2) 論文リスト

- 1) Wave-Length Shifts of the Spectral Lines of Sb due to the Change of Pressure.  
(Sci. Rep. Tokyo Bunrika Univ. 2(1934),57)
- 2) Wave-Length Shifts of the Spectral Lines of Sn due to the Change of Pressure.  
(Sci. Rep. Tokyo Bunrika Univ. 2(1935), 267)
- 3) Sur les Spectres nouveaux de Fluorure de Silicium (SiF).  
(Sci. Rep. Tokyo Bunrika Univ. 3(1937), 195)
- 4) Réflexion générale sur l'étude du spectre moléculaire des halogenes.  
(Sci. Rep. Tokyo Bunrika Univ. 12(1938), 4,A(和文))
- 5) Sur les bandes du fluorure d'aluminium (AlF).  
(Sci. Rep. Tokyo Bunrika Univ. 3(1939), 239)
- 6) Sur les spectre de bandes d'émission du fluorure d'étain (SnF).  
(Proc. Phys.-Math. Soc. Jpn. 21(1939), 497)
- 7) Sur la projection d'atomes par le rayons de recul des désintégrations  $\alpha$ . (avec A.Berthelot ; C. R. 212(1941), 895)
- 8) Le comportement dans une atmosphere gazeuse de rayons de recul de désintégration  $\alpha$ .  
(avec A.Berthelot ; J. Phys. Rad. 2(1941), 96)
- 9) Sur le spectre continu des rayons  $\beta^-$  émis par  $^{76}\text{As}$ .  
(J. Phys. Rad. 3(1942), 140)
- 10) Sur le spectre continu des rayons  $\beta^-$  émis par le radio vanadium  $^{52}\text{V}$ .  
(C. R. 215(1942), 414)
- 11) Concentration de radioéléments à partir de molecules organométalliques. Application au vanadium.  
(avec P.Sue ; J. Chim. Phys. & Phys. Chim. Biol. 41(1944), 160)
- \*12) Contribution à l'étude du spectre continu des rayons  $\beta^-$  émis par les corps radioactifs artificiels.  
(Thèse de Doctorat des Sciences Physiques, 1944)
- 13) Chocs anormaux des rayons  $\beta$  le long de leurs trajectoires observés dans la chambre de Wilson.  
(Proc. Phys. Soc. Jpn. 1(1946), Suppl. No.1, 18)
- 14) A consideration of the Fermi theory on the continuous spectrum of  $\beta$  rays  
and the application on some experimental results. (Proc. Phys. Soc. Jpn. 2(1947), No.3, 94)
- 15) Sur une anomalie concernant la diffusion des rayons  $\beta$  émis dans la matière (I). (C. R. 232(1951), 1348)
- 16) (*Ibid.*) (II). (avec M.Radanyi ; C. R. 232(1951), 1417)
- 17) À propos de l'existence des particules positives émises par  $^{32}\text{P}$ , émetteur des rayons  $\beta^-$ . (C. R. 234(1952), 619)
- 18) Sur les rapport d'embranchement  $K/\beta^+$  du  $^{65}\text{Zn}$ . (C. R. 235(1952), 366)
- 19) (*Ibid.*) (Proc. Int. Conf. on  $\beta$  and  $\gamma$  Spectroscopy, Amsterdam (1952), Physica 18, 1267)
- 20) Remarques sur les valeurs numériques de la fonction de Fermi.  
(avec J.Laberrigue-Frolow ; J. Phys. Rad. 14(1953), 95)
- 21) La mesure des limites superieures des spectres  $\beta^+$  des noyaux miroirs  $^{29}\text{P}$  et  $^{33}\text{Cl}$ .  
(avec E.Nahmias ; C. R. 236 (1953), 2399)
- 22) Préparation d'une source de  $^{65}\text{Zn}$  d'activité spécifique très élevée. (C. R. 236(1953), 2948)
- 23) Sur les spectre  $\beta^+$  et le rapport  $K/\beta^+$  du  $^{65}\text{Zn}$ . (C. R. 237(1953), 1077)
- 24) Étude du rayonnement  $\gamma$  émis par diverses sources de  $^{32}\text{P}$ .  
(avec M.Langevin et J.Merinis ; J. Phys. Rad. 15(1954), 778)

- 25) Sur la désintégration du  $^{204}\text{Tl}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; C. R. 238(1954), 1500)
- 26) L'énergie totale de désintégration du nuclide  $^{25}\text{Na}$  et le nombre magique 14. (avec M.E.Nahmias ; C. R. 239(1954), 47)
- 27) Correction des spectres continus  $\beta$  due au pouvoir de résolution limité du spectrographe. (avec L.Feuvois ; C. R. 239(1954), 1267)
- 28) Étude de la désintégration du  $^{204}\text{Tl}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; J. Phys. Rad. 16(1955), 39)
- 29) Remarques sur la désintégration du  $^{204}\text{Tl}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow ; J. Phys. Rad. 16(1955), 165)
- 30) La désintégration du  $^{59}\text{Cu}$  et la stabilité des noyaux  $^{2Z+1}\text{X}$ . (avec M.E.Nahmias et M.Vivargent ; J. Phys. Rad. 16(1955), 654)
- 31) Sur la possibilité de désintégration par capture K du  $^{59}\text{Cu}$ . (avec G.A.Renard ; J. Phys. Rad. 16(1955), 889)
- 32) Sur la rayonnement  $\gamma$  du  $^{25}\text{Na}$ . (avec M.E.Nahmias ; J. Phys. Rad. 17(1956), 373)
- 33) Les désintégrations  $\beta$  au voisinage du nombre magique 14. (avec M.E.Nahmias ; J. Phys. Rad. 17(1956), 536)
- 34) La transition  $0^+ \rightarrow 0^+$  dans  $^{90}\text{Zr}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; C. R. 242(1956), 2129)
- 35) Sur la transition  $0^+ \rightarrow 0^+$  dans  $^{90}\text{Zr}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; J. Phys. Rad. 17(1956), 558)
- 36) Matérialisation interne dans la transition monopolaire électrique  $0^+ \rightarrow 0^+$  dans le  $^{90}\text{Zr}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; C. R. 243(1956), 2045)
- 37) Sur la transition  $0^+ \rightarrow 0^+$  dans  $^{90}\text{Zr}$ . (en russe) (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; Proc. Cong. Nat. Spectroscopie  $\beta$  and  $\gamma$ , U.R.S.S. (1957), Izvestia Acad. Nauk S.S.S.R. 21 No.12, 1576)
- 38) Réalisation d'une chambre de Wilson autocommandée à pression variable d'un type nouveau. (J. Phys. Rad. 18(1957), Suppl. No.3, 58 A)
- 39) Désintégration de  $^{90}\text{Y}$ . Transition  $0^+ \rightarrow 0^+$  dans  $^{90}\text{Zr}$ . Terme de Fierz.  
I. Transition  $0^+ \rightarrow 0^+$  dans  $^{90}\text{Zr}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; J. Phys. Rad. 18(1957), 498)
- 40) (*Ibid.*) II. Étude de l'influence du terme de Fierz sur la forme du spectre  $\beta^-$  de  $^{90}\text{Y}$ . (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; J. Phys. Rad. 18(1957), 559)
- 41) Dispositif d'éclairage par tube à éclairs d'une chambre de Wilson permettant l'observation visuelle directe des trajectoires peu contrastées. (avec G.Corbe ; J. Phys. Rad. 19(1958), 110)
- 42) Les transitions monopolaires électriques. (avec J.Laberrigue-Frolow et L.Feuvois ; C.R. Cong. Int. Reac. Nucl. à Basse Energie et la Struc. de Noyaux, Paris (1958), 3)
- 43) Réalisation d'une chambre à brouillard de Wilson autocommandée à pression variable (entre 1 cmHg et 76 cmHg) d'un type nouveau. (J. Phys. Rad. 21(1960), 495)
- 44) (*Ibid.*) II (J. Phys. Rad. (Phys. Applique) 21(1960), Suppl. No.7, A 123)
- 45) Étude du type d'invariant de l'interaction Gamow-Teller en désintégration  $\beta^-$  de  $^6\text{He}$ . (J. Phys. Rad. 22(1961), 169)
- 46) Sur la possibilité d'utilisation d'une chambre à bulles à propane pour l'étude des réactions nucléaires provoquées par les protons produits par le synchrocyclotron d'Orsay. (avec J.Dufournaud, A.Michalowicz et M.Poulet ; J. Phys. Rad. 22(1961), Suppl. No.II, 175 A)

- \*47) Étude du type d'invariant de l'interaction Gamow-Teller en désintégration  $\beta^-$  de  ${}^6\text{He}$ .  
(Thèse de Doctorat de Kyoto Univ., 1962)
- 48) Investigation of quasi-elastic  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}$  reaction utilizing a propane bubble chamber.  
(with M.Poulet and A.Michalowicz ; Proc. Int. Symp.Direct Interac. & Nucl. Reac. Mecha., Padova (1962), 66)
- 49) Étude de la réaction  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}$  à l'aide d'une chambre à bulles à propane.  
(avec M.Poulet ; J. Phys. Rad. 24(1963), 1062)
- 50) Diffusions quasi-élastique p- $\alpha$  dans  ${}^{12}\text{C}$  étudiée à l'aide d'une chambre à bulles. (Phys. Lett. 8(1964), 318)
- 51) Direct interaction study of  ${}^{12}\text{C}$ . (with R.Bowden and R.Bowman ; C.R. du Congr. Int. Phys. Nucl., Paris (1964), 331)
- 52) Quasi-élastic p- $\alpha$  scattering in  ${}^{12}\text{C}$ . (with E.Hourany ; Proc.Conf.Gatlinburg (1964), Rev. Mod. Phys. 37(1965), 399)
- 53) Remarques sur l'étude de la distribution des quantités de mouvement des protons ou des particules  $\alpha$  dans le noyaux à l'aide de la reaction (p,2 p) ou (p,p $\alpha$ ).  
(avec E.Hourany ; C. R. 260(1965), 3609)
- 54) Distribution des impulsions des noyaux de recul dans la réaction  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}$ .  
(avec E.Hourany ; Phys. Lett. 18(1965), 146)
- 55) (*Ibid.*) (avec E.Hourany ; J. Phys. 27(1966), C 1-76)
- 56) Nuclear recoil in the coplanar and non-coplanar  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}$  reaction.  
(with E.Hourany ; Conf. Nucl. Struc. & Elem. Partic., Oxford (1966),(oral))
- 57) Coplanar and non-coplanar (p, 2 p) reaction in  ${}^{12}\text{C}$ .  
(with E.Hourany ; Proc. Int. Conf. Nucl. Phys., Gatlinburg(U.S.A.)(1966), 72)
- 58) Identification photométrique des particules s'arrêtant dans les chambres à bulles.  
(avec E.Hourany ; Suppl. J. Phys. 1(1966), No.3, 252)
- 59) Réactions (p,2 p) coplanaires et noncoplanaires dans le  ${}^{12}\text{C}$ . (avec E.Hourany ; Nucl. Phys. A 103(1967), 577)
- 60) The nuclear interference effect in the  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}$  reaction.  
(Sci. Light, The Y.Fujioka Commemorative Issue (1967), 21)
- 61) The coplanar and non-coplanar  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}$  reaction.  
(with E.Hourany ; Proc. Int. Conf. Nucl. Struc., Tokyo (1967), 690)
- 62) D(p, 2 p)n reaction at the intermediate energy.  
(with K.Kuroda and F.Takeuchi ; Proc. Int. Conf. Nucl. Struc., Tokyo (1967), 76)
- 63) Réalisation d'un système d'absorbant commandé à distance.  
(avec F.Takeuchi et J.Camon ; Rev. Phys. Appl. 3(1968), 281)
- 64) Chambre à étincelles démontable à feuilles minces. (avec P.Savel et G.Ligoniere ; Rev. Phys. Appl. 4(1969), 311)
- 65) Study of the deuteron breakup reactions D(p, 2 p)n and D(a,ap)n at about 160 MeV.  
(with F.Takeuchi, J.P.Garron, E.Hourany, K.Kuroda and Y.Sakamoto ;  
Proc. Int. Conf. 3-Body Prob.in Nucl. Phys. & Partic. Phys., Birmingham (1969), 521)
- 66) Experimental test of the impulse approximation in the  ${}^2\text{H}(p, 2 p)n$  reaction.  
(with F.Takeuchi, K.Kuroda and Y.Sakamoto ; Nucl. Phys. A 152(1970), 434)
- 67) Study of distorsion in the coplanar and non-coplanar  ${}^{12}\text{C}(p, 2 p){}^{11}\text{B}_{1p}$  and  ${}^{40}\text{Ca}(p,2 p){}^{39}\text{K}_{2s}$  reaction at 157 MeV.  
(with E.Hourany, J.P.Didelez, M.Hage Ali, F.Reide and F.Takeuchi ; Conf. Nucl. Phys., Univ. Surrey (1970), (oral))

- 68)** Étude de la distorsion dans la réaction  $^{12}\text{C}(p, 2p)^{11}\text{B}_{1p3/2}$  et  $^{40}\text{Ca}(p, 2p)^{39}\text{K}_{2s1/2}$  coplanaires et non-coplanaires à 156 MeV.  
(avec E.Hourany, J.P.Didelez, M.Hage Ali, F.Reide et F.Takeuchi ; Nucl. Phys. A 162 (1971), 624)
- 69)** (*Ibid.*) (Proc. Colloq. de Soc. Phys., Grenoble (1970), J. Phys. 31 Suppl. No.5-6 C 2-184)
- 70)** Réaction  $\text{D}(p, 2p)n$  à 156 MeV. (avec F.Takeuchi, K.Kuroda et Y.Sakamoto ; J. Phys. 31(1970), Suppl. No.5-6, C 2-189)
- 71)** Final state interaction in the reaction  $^2\text{H}(p, 2p)n$ . (with F.Takeuchi and Y.Sakamoto ; Phys. Lett. 35 B(1971), 498)
- 72)** (*Ibid.*) (Symp. Three Body Prob., Budapest (1971), (oral))
- 73)** Réactions  $\text{D}(p, 2p)n$  et  $\text{D}(p, pn)p$  à 156 MeV.  
(avec J.P.Didelez, I.D.Goldman, E.Hourany, H.Nakamura et F.Reide ; J. Phys. 33(1972), No.8-9, 129)
- 74)**  $\text{D}(p, 2p)n$  and  $\text{D}(p, pn)p$  reaction at 156 MeV.  
(with J.P.Didelez, I.D.Goldman, E.Hourany, H.Nakamura and F.Reide ; Proc. Int. Conf. Few Particles, Los Angeles (1973), 483)
- 75)** The  $\text{D}(a, ap)n$  reaction at 165 MeV. (with E.Hourany, H.Nakamura and F.Takeuchi ; *Ibid.*, (1973), 487)
- 76)** A detection system with a large liquid scintillation counter for high-energy neutron studies with neutron-gamma discrimination. (with H.Nakamura and F.Reide ; Nucl. Instr. & Meth. 108(1973), 509)
- 77)** Proton-induced deuteron breakup at 156 MeV.  
(with J.P.Didelez, I.D.Goldman, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota and F.Reide ; Proc. Int. Conf., Munich (1973), 400)
- 78)** La réaction  $^2\text{H}(a, ap)n$  à 165 MeV. (avec E.Hourany, H.Nakamura-Yokota et F.Takeuchi ; Nucl. Phys. A 222(1974), 537)
- 79)** Proton-induced deuteron breakup at 156 MeV.  
(with J.P.Didelez, I.D.Goldman, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota and F.Reide ; Phys. Rev. C 10(1974), 529)
- 80)** Proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV. (with J.P.Didelez, I.D.Goldman, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota and F.Reide ; Proc. Int. Conf., Quebec (1974) (Laval Univ. Press 1975), 667)
- 81)** Interaction dans l'état final dans les réactions à trois nucléons à 156 MeV. (*Ibid.* (1975), 430)
- 82)** Proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV. (with N.Fujiwara ; Conf. Int., Quebec (1974), unpublished)
- 83)** Proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV. (with J.P.Didelez, R.Frascaria, N.Fujiwara, I.D.Goldman, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota and F.Reide ; Phys. Rev. C 12(1975), 1974)
- 84)** Proton-deuteron final state interactions in proton-induced  $^3\text{He}$  breakup.  
(with N.Fujiwara, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota, F.Reide and V.Valkovic ; Proc. Int. Conf., Univ. Delhi (1975), 223)
- 85)** Proton-induced  $^2\text{H}$  and  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV.  
(Int. Conf. Few Body Prob. in Nuc. & Parti. Phys., Univ. Delhi (1975), 181, invited talk)
- 86)** Test of the proton induced  $^2\text{H}$  breakup study for special kinetic conditions presented by Lambert et al.  
(with N.Fujiwara, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota and F.Reide ; Proc. *Ibid.*, (1975), 199)
- 87)** (*Ibid.*) (Cont. to 7 th Int. Conf. "Few Body Prob. in Nucl. & Partic. Phys.", (1976))
- 88)** Compteur plastique à localisation spatiale et à temps de vol destiné à la détection des neutrons de 2 à 200 MeV.  
(avec E.Hourany, S.Kobayashi et F.Reide ; Nucl. Instr. & Meth. 134(1976), 513)
- 89)** Analyse de l'influence des diverses quantités physiques sur les résolutions locale et temporelle d'un compteur à scintillateur plastique à temps de vol de grandes dimensions.  
(avec E.Hourany, S.Kobayashi et F.Reide ; Rapp. Interne (1976))

- 90) Test of proton-induced  $^2\text{H}$  breakup : Investigation for the special kinematic condition of collinearity.  
(with N.Fujiwara, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota and F.Reide ; Phys. Rev. C 15(1977), 4)
- 91) Final state interaction between three nucleons in the proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV.  
(with N.Fujiwara, E.Hourany, H.Nakamura-Yokota, F.Reide and V.Valkovic ; submitted to Phys. Rev. (1975))
- 92) (*Ibid.*) (Euro. Symp. Few Particle Prob. in Nucl. Phys., Vlieland (1976), (oral))
- 93) Proton-induced  $^2\text{H}$  and  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV.  
(with H.Nakamura-Yokota and N.Fujiwara ; Suppl. Prog. Theor. Phys. 61(1977), 161)
- 94) Final state interaction between three nucleons in the proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV.  
(with N.Fujiwara, H.Nakamura-Yokota, F.Reide and V.Valkovic ; Proc. Int. Conf. Nucl. Struc., Tokyo (1977), 9(invited talk) ; J. Phys. Soc. Japan 44(1978), Suppl. 57)
- 95) Possible excited (or scattering) states in the proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV.  
(Proc. Sendai Conf. Electro- and Photo-excitations, (1977) Suppl. to Research Rep. of Labor. of Nucl. Sci., Tohoku Univ. vol. 10, 25)
- 96) Final state interaction between three nucleons in the proton-induced  $^3\text{He}$  breakup at 156 MeV.  
(Proc. Pre-Conf., Symp. Few Body Prob., Tokyo (1977), 18)
- 97) A study of a large plastic scintillation fast neutron detector.  
(with Y.Deschamps, E.Hourany, S.Kakigi and F.Reide ; Nucl. Instr. & Meth. 155(1978), 135)
- 98) p-d scattering at very small relative energy observed in the FSI regions of the  $^3\text{He}(p, dp)p$  reaction at 156 MeV. (with N.Koori ; Proc. Int. Conf. Few Body Sys. & Nucl. Forces, Gratz (1979), II-519)
- 99) Determination of neutron detection efficiency by simultaneous measurement of  $D(p, 2p)n$  and  $D(p, pn)p$  reaction at 200 MeV. (with N.Koori, Y.Deschamps and F.Reide ; Nucl. Inst. & Meth. 224(1984), 416)  
(Phys. Rev. C 31(1985), 246)

—— (没 後) ——

YUASA の計画による日仏共同研究の成果 : (論文の最後に感謝の言葉が捧げられている。)

- 100) Two-spectator quasifree scattering process in the  $^2\text{H}(d,pn)pn$  reaction at 108 MeV.  
N.Koori, T.Ohsawa, S.Seki, H.Yokota, T.Yanabu,  
Y.Deschamps, E.Hourany, H.Langevin-Joliot, F.Reide, and M.Roy-Stephan

上記 100 件の湯浅の論文は、抜刷・複写版を含めて、収納ファイル『学術論文 I』、『学術論文 II』、『学術論文 III』の 3 冊に分けて集録し、本資料として保管している。

## I-3. 著作リスト

ここには学術論文を除いて、湯浅の著述出版物を次のように分類し、番号付けをして示す。

**Aa：著書**                      **Ab：訳書**                      **Ac：書籍への寄稿**  
**Ad：雑誌への寄稿**      **Ac：新聞への寄稿**      **Ad：講演会・座談会の記録**

著作の保存形態は、「発行された単行本のまま保管してあるもの」、「一部の該当部分の切り抜き」、「複写物として保管してあるもの」の3通りある。そのすべてを『寄稿文集録ファイルⅠ』『寄稿文集録ファイルⅡ』に集録し、保管している。

### Aa：著書（単行本を保管）

Aa.n	『書名』	出版社	出版年
Aa.1	『科学への道』	日本学芸社	1947
Aa.2	『科学への道』（増補版）	日本学芸社	1948
Aa.3	『黒葡萄－むすか』	古今書院（*Aa.10に再録）	1948
Aa.4	『フランスに思ふ－もん・かいえ・あんてい－む』	月曜書房	1948
Aa.5	『パリ随想』	弘文堂アテネ文庫	1950
Aa.6	『放射性同位元素とその生物学医学への応用』	培風館	1950
Aa.7	『放射性同位元素とその生物学医学への応用』（改訂版）	培風館	1955
Aa.8	『パリ随想－ら・みぜ－る・ど・りゅっくす』	みすず書房	1973
Aa.9	『続パリ随想－る・れいよん・うゝえ－る』	みすず書房	1977
Aa.10	『パリ随想3－むすか・のわ－る』	みすず書房	1980

### Ab：訳書（単行本を保管）

Ab.n	著者	『訳書名』	出版社	出版年
Ab.1	マリー・キュリー	『ピエール・キュリー傳』	潮流社	1946
Ab.2		『ジョリオ＝キュリー遺稿集』	法政大学出版	1961
Ab.3	ピエール・ビカール	『F. ジョリオ＝キュリー』	河出書房新社	1970

### Ac：書籍への寄稿

（寄稿部分の複写物を保管、ただしその寄稿部分が所収された単行本（Ac.1, 2, 5参照）も保管）

Ac.n	【寄稿文名】	『寄稿書籍』	出版社	出版年
Ac.1	[出]	『マロニエ第一歌集』	パリ短歌会	1944
Ac.2	[フランスにおける物理学研究の状況]	『最近のフランス文化』	日仏会館	1948
Ac.3	[“離脱”の詩]	『若き日の素描』	学生書房(*Aa.10に再録)	1948
Ac.4	[私の選んだ道]	『娘の頃』	寶文館	1952
Ac.5	[時はその蔭をとどめる？]	『科学の饗宴』	みすず書房	1979

### Ad：雑誌への寄稿

（寄稿部分の別刷、あるいは複写物を、『寄稿文集録ファイルⅠ、Ⅱ』に納め、保管。また寄稿文の中の何編かは、後に単行本の中に再収録されており、その場合、上記のAa.nの記号を付記してある。）

Ad.n	【寄稿文名】	《雑誌名》（発行社）(*Aa.n)	発行年/月
Ad.1	[偶感]	《お茶の水》（東京女高師附属高女校友会）	1939
Ad.2	[La Cerise Rouge]（仏語詩）	《日仏アテネ交友会報》	1939/12
Ad.3	[早春の巴里から]	《お茶の水》（東京女高師附属高女校友会）	1941
Ad.4	[滞仏日記から]	《国鉄情報》1号	1946/10
Ad.5	[日本の科学研究について－ジョリオ＝キュリー教授の批判]	《国鉄情報》2号	1947/9
Ad.6	[放射能と生命現象]	《基礎科学》Vol.2-5（弘文堂）	1948/10
Ad.7	[自分のことども]	《婦人文庫》（鎌倉文庫）	1949/7
Ad.8	[日本を省みる]	《社会の動き》（民主会本部）	1949/2



Ad.n	【寄稿文名】	《雑誌名》(発行社) (*Aa.n)	発行年/月
Ad.9	[ジョリオ＝キュリー先生]	《日本評論》(日本評論社)	1949
Ad.10	[ジョリオ＝キュリー先生夫妻]	《主婦の友》(主婦の友社)	1949
Ad.11	[キュリー夫人](中学国語教科書)	《中学国語》(大修館書店)	1949/6
Ad.12	[真理を求めて]	《女性改造》(改造社)	1949/12
Ad.13	[私の希い](写真に添えて)	《女性改造》(改造社)	1949
Ad.14	[故国を離れて]	《女性改造》(改造社)	1959/2
Ad.15	[科学に生きようとする若い友に]	《婦人》(世界評論社)	1949/3
Ad.16	[文化の匂いーフランス通信]	《女性改造》(改造社)	1949/8
Ad.17	[ジョリオ＝キュリー ー再びわが師を語る]	《日本評論》(日本評論社)	1950/7
Ad.18	[フランスの原子力研究]	《日本の原子力問題》(理論社)	1953/4
Ad.19	[フランスの原子力研究と原子核研究]	《科学, Vol.23》(岩波書店)	1953/7
Ad.20	[F.ジョリオ＝キュリー:日本の若き科学者へ](訳)	《科学, Vol.23》(岩波書店)	1953/9
Ad.21	[Rapport sur les analyses faites au Japon des cendres radioactives projetées lors de l'explosion de Bikini du 1er Mars 1954.] (avec Mme Laberrigue-Frolow)	《Pathologie et Biologie》 (Smaine des Hôpitaux)	1956/4
Ad.22	[I・ジョリオ＝キュリー夫人を悼みて]	《科学, Vol.26》(岩波書店)	1956/5
Ad.23	[ピエール・キュリー 50年忌に際して]	《河》(お茶の水女子大学)	1956/11
Ad.24	[ジョリオ教授を偲んで]	《科学, Vol.28》(岩波書店)	1958/11
Ad.25	[オルセー便り](湯浅、野上、黒田、古谷)	《日仏理工科会誌, 3》	1961/8
Ad.26	[ジョリオ先生のこと]	《法政》(法政大学出版)	1962
Ad.27	[フランスの原子核研究]	《自然》(中央公論社)	1964/1
Ad.28	[人工放射能 30年記念の国際学会]	《自然》(中央公論社)	1964/10
Ad.29	[“永遠の足跡” 20世紀の科学者, ジョリオ＝キュリーの思い出 (1)]	《自然》(中央公論社) (*Aa.8)	1966/1
Ad.30	[同上 (2)]	《自然》(中央公論社) (*Aa.8)	1966/2
Ad.31	[アカデミー・フランセーズでの学者対話]	《自然》(中央公論社) (*Aa.8)	1967/1
Ad.32	[消えた佳人]	《婦人公論》(中央公論社)	1967/11
Ad.33	[科学と人生を想う]	《婦人の友》(婦人の友社) (*Aa.8)	1968/1
Ad.34	[パリでの“非頭脳流出”座談会, 飯山敏道, 黒田啓一, 坂本吉之, 湯浅年子, X.Y.]	《自然》(中央公論社)	1968/8
Ad.35	[五月革命のもたらしたもの (1)]	《自然》(中央公論社) (*Aa.8)	1968/11
Ad.36	[同上 (2)]	《自然》(中央公論社) (*Aa.8)	1968/12
Ad.37	[L.コワルスキー (プロフィール解説)]	《自然》(中央公論社)	1969/1
Ad.38	[パンテオンのプロフィール]	《みすず》(みすず書房) 128号 (*Aa.8)	1970/3
Ad.39	[椿の花の思い出]	《みすず》(みすず書房) 130号 (*Aa.8)	1970/5
Ad.40	[5月革命のもたらしたもの]	《みすず》(みすず書房) 132号 (*Aa.8)	1970/7
Ad.41	[ブルターニュの北海岸]	《みすず》(みすず書房) 135号 (*Aa.8)	1970/10,11
Ad.42	[ラジウム研究所の今昔]	《みすず》(みすず書房) 137号 (*Aa.8)	1971/1
Ad.43	[フランスの論理と日本の論理]	《みすず》(みすず書房) 141号 (*Aa.8)	1971/5
Ad.44	[17世紀の月旅行]	《みすず》(みすず書房) 143号 (*Aa.8)	1971/7
Ad.45	[ブダペスト瞥見]	《みすず》(みすず書房) 145号 (*Aa.8)	1971/9,10
Ad.46	[モノー教授の生物学と哲学 (1)]	《自然》(中央公論社)	1972/5
Ad.47	[同上 (2)]	《自然》(中央公論社)	1972/6
Ad.48	[古い日記から]	《みすず》(みすず書房) 154号 (*Aa.8)	1972/7
Ad.49	[物理学の天才エンリコ・フェルミ] (ポンテ・コルボ著, J.Laberrigue と共訳)	《自然》(中央公論社)	1973/1
Ad.50	[保井コノ先生]	《自然》(中央公論社)	1973/7
Ad.51	[香川さんのこと](香川さん追悼)	《日本婦人科学者の会》	1973/12
Ad.52	[春近く]	《ひろば, 夏》(至光社)	1974
Ad.53	[Journalの論文をよくするために]	《日本物理学会誌, 29巻7号》	1974/7
Ad.54	[病人憲章]	《みすず》(みすず書房) 187号 (*Aa.9)	1975/7
Ad.55	[病人憲章(つづき)]	《みすず》(みすず書房) 189号 (*Aa.9)	1975/10
Ad.56	[“同時性の放棄”に寄せて]	《自然》(中央公論社)	1975/11
Ad.57	[30年来の課題を中心に]	《日本婦人科学者の会創立30年記念誌》	1975
Ad.58	[夕潮]	《みすず》(みすず書房) (*Aa.9)	1976/4-6

Ad.n	【寄稿文名】	《雑誌名》(発行社) (*Aa.n)	発行年/月
Ad.59	[コレジ・ド・フランスに抛る科学者像 (1) ーラカサニユ教授]	《自然》(中央公論社)	1976/10
Ad.60	[原子核と素粒子における少数粒子問題] (笹川, 尾立氏とともに)	《日本物理学会誌, 31 巻 12 号》	1976
Ad.61	[手工芸考]	《みすず》(みすず書房) (*Aa.9)	1976-77
Ad.62	[パリ学生街の今昔 (1)]	《ひろば 秋》(至光社)	1977
Ad.63	[パリ学生街の今昔 (2)]	《ひろば 冬》(至光社)	1977
Ad.64	[コレジ・ド・フランスに抛る科学者像 (2) ーラカサニユ教授]	《自然》(中央公論社)	1977/4
Ad.65	[理論と実験の物理学における役割]	《自然》(中央公論社)	1978/2
Ad.66	[日本訪問記 1ー遠い日本, 近いフランス]	《みすず》(みすず書房) 222 号 (*Aa.10)	1978/3
Ad.67	[日本訪問記 2ー個人の境界, 再び病人の立場に立って, ほかに]	《みすず》(みすず書房) (*Aa.10)	1978/7
Ad.68	[日本訪問記 3ージャン・ゲーノーの追憶]	《みすず》(みすず書房) 226 号 (*Aa.10)	1979/2
Ad.69	[日本訪問記 4ー医者との対決について]	《みすず》(みすず書房) 227 号 (*Aa.10)	1979-8
Ad.70	[稀少現象を探って来た道を振り返って]	《日本物理学会誌, 34 巻 4 号》	1979/4
Ad.71	[コレジ・ド・フランスに抛る科学者像 (3) ーランジュヴァン教授]	《自然》(中央公論社)	1980/5
Ad.72	[離脱の詩]	《自然》(再録) (*Aa.10)	1980/4

#### Ae : 新聞寄稿 (寄稿部分の複写物を、『寄稿文集録ファイルⅡ』に納め, 保管)

Ae.n	【寄稿文名】	《掲載紙名》	掲載年/月
Ae.1	[欧州通信ー硝煙にゆがむ花の都]	(掲載紙不明)	1940/4
Ae.2	[女性と原子爆弾]	(掲載紙不明)	1946/4
Ae.3	[欲しい給費制 (3)] (子女教育のこと 1)	(掲載紙不明)	
Ae.4	[わたしのすきな人] (おもいやり深い学者, ノーベル賞に輝くジョリオ＝キュリー博士)	《毎日小学生新聞》	1947/10
Ae.5	[占領下の仏国科学者たち]	《東京工業大学新聞》	1948/1
Ae.6	[サルトルは誤解されてる]	(掲載紙不明)	
Ae.7	[フランス便り第 1 信] (シンガポールで)	《日本読書新聞》	1949/5
Ae.8	[フランス便り第 2 信] (文化の回復めざましザッキン展)	《日本読書新聞》	1949/6
Ae.9	[フランス便り第 3 信 (上)] (バルザック, プーシキン)	《日本読書新聞》	1949/8
Ae.10	[フランス便り第 3 信 (下)] (ランボー研究論文等)	《日本読書新聞》	1949/8
Ae.11	[再びパリの土を踏んで] (フランス通信第 1 報)	《共同特信, 新大阪, 夕刊信州, 他》	1949/6
Ae.12	[キュリー夫妻] (科学者の家庭を訪ねて)	《夕刊ニイガタ》	1949/6
Ae.13	[キュリー夫妻と再会] (パリ通信)	《埼玉新聞》	1949/6
Ae.14	[科学文化ということ]	《朝日新聞》	1967/9
Ae.15	[日本の印象] (記者との問答)	《東京新聞, サンケイ, 他》	1967/9
Ae.16	[キュリーとラジウム] (世界の歴史第 19 章, 世界化と発明)	《東京新聞》	1970/8
Ae.17	[偶感]	《パリ日本人会新聞》	1976

#### Af : 講演会・座談会記録

(活字化された講演内容のみ『寄稿文集録ファイルⅡ』に収める。下記 3 件以外の講演会原稿及びハンド・アウトについては, 執筆資料 Pe を参照。)

Af.n	【題 名】	《掲載誌》	発行年/月
Af.1	[女性の解放ー座談会] (加藤静枝, 山室民子, 湯浅年子, 宮本百合子)	《日本週報》	1946/1
Af.2	[フランスに 32 年滞在中] (於 日仏会館)	《日仏理工科会誌》(講演要約)	1977/9
Af.3	[女性と科学ー科学は果たして女性に適した仕事か]	《桜蔭会会報 98 号》(講演要約)	1977/9

## II-5. ジョリオ=キュリー家関係資料

ここで示すのは、湯浅がもっていた Curie 家、Joliot=Curie 家に関する資料である。それらを次のように分類して示す。ただし、湯浅の著作物に直接関係する資料は P-文芸資料の Pa、Pb に、また手紙等は Tc に挙げてある。

**Ca : Ra 発見と Pierre et Marie Curie 夫妻**

**Cb : Frédéric et Irène Joliot=Curie 夫妻の研究と人生**

**Cc : F. Joliot=Curie : 原子力問題と平和運動**

**Cd : Curie 夫妻・Joliot=Curie 夫妻と日本**

Ca, Cb, ……の区分内で Ca.1, Ca.2, …, Cb.1, Cb.2…等々、整理番号を付けてある。資料番号欄に (L) とあるのは、蔵書リスト (L) に含まれている資料で、その保管先を備考欄に A-2, B-1…のように、ファイルボックス名で示す。(図書館) とあるは、大学図書館に寄贈されて保管されていることを示す。

### \*括弧について

『…』 : 書籍のタイトル。

《…》 : 冊子・パンフレットのタイトル。

[…] : 欧文記事のタイトル。雑誌、会誌、冊子等の中にある欧文記事。

〈…〉 : 雑誌・会誌・新聞等の定期刊行物のタイトル。

「…」 : 和文記事のタイトル。

例 : [Pierre Curie] の題名をもつ記事が雑誌 〈La pancée〉 にある。

### \*内容欄

一つの題目 『…』、《…》、[…], 「…」 をもつ資料についてはそのタイトルを記す。

(特定の著者によるものならばその著者名も添えてある)。

括弧なしで表記してあるものは、資料内容の説明を明記したものである。

### Ca : Ra 発見と Pierre et Marie Curie 夫妻

Ca.n	分野	内 容	年/月.	備 考	旧資料番号
Ca.1	学位論文	[Thèses : Marie Sklodowska Curie.]	1903		C-00007
Ca.2		[Thèses : Marie Sklodowska Curie.] (写真版)			
Ca.3	書籍	『Pierre Curie』 par Marie Curie	1924		C-00037
Ca.4		『Madame Curie』 par Ève Curie (裏に湯浅手書表挿入)	1938		
Ca.5		『Marii Sklodowskiej-Curie』 par Irène Joliot-Curie			
Ca.6		『Pierre et Marie Curie』 par E. Denny	1967		C-00038
Ca.7	関連冊子	《Laboratoire Curie de Institut du Radium》		Curie 研来歴紹介冊子	C-00012
Ca.8		《Hommage à Pierre Curie》	1956	没後 50 周年記念冊子	C-00019
Ca.9	雑誌	[La découvert du Radium par P. et M.Curie]	1951	〈Atomes, No 58〉	P-00042
Ca.10		[Pierre Curie] par F.Joliot=Curie	1956	〈La Pansée〉	C-00067
Ca.11		[Hommage à Pierre Curie]		〈Musée Pédagogique〉	C-00048

Ca.n	分野	内 容	年/月.	備 考	旧資料番号
Ca.12		[Contamination radioactive de manuscrits de Pierre et Marie Curie, relatifs....]par F.Joliot=Curie.	1958	〈C.R.〉別刷り	C-00009
Ca.13		[Marie Curie] par Ève Curie	1958/1	〈La Presse〉記事	C-00067
Ca.14		M <sup>me</sup> Curie 生誕 100 年記念講演集(物理学会(Bordeaux))	1967/1	〈Le Courrier〉	C-00046
Ca.15		L'album de Famille de Pierre Curie	1968	〈J.Physique〉	C-00006
Ca.16	雑資料	写真 Marie Curie		〈l'Humanité Dimanche〉	C-00068
Ca.17		記念切手 1867 Marie CURIE 1934, Premier jour,	1965/8	〈Le Journal du Dimanch〉	C-00067
Ca.18		記念切手 Pierre et Marie Découvert le Radium Nov.1898	1967	Paris 発行	C-00093
Ca.19		[Marie - Pierre Curie] par Ève Curie		Union internationale	”

## Cb : Frédéric et Irène Joliot=Curie 夫妻の研究と人生

Cb.n	分野	内 容	年/月	掲載誌	旧資料番号
Cb.1	論文 別刷	[Réalisation d'un appareil Wilson pour pressions variable.]F.Joliot	1934	〈J.Phys.et Rad〉	C-00090
Cb.2		[Etude des rayons de recul radioactifs par...] F.Joliot	1934	〈J.Phys.et Rad〉	C-00090
Cb.3		[Sur la détermination par la méthode Wilson...] F.Joliot et I.Zotowski	1938	〈J.Phys.et Rad〉	C-00091
Cb.4		[Formation d'un isotope stable de masse...] F.Joliot et I.Zotowski	1938	〈J.Phys.et Rad〉	C-00091
Cb.5		[Sur le rayonnement du corps de périod 3.5 h...] I.Curie,P.Savitch et M.Silva	1938	〈J.Phys.et Rad〉	C-00091
Cb.6		[Sur l'énergie des neutrons libérés lors...] F.Joliot et autres	1939	〈Com. Ren. 〉	R-30007
Cb.7		[Liberation of neutrons in the nuclear explosion of uranium, ] F.Joliot et autres	1939	〈Nature 143〉	R-30007
Cb.8		[Number of neutrons liberated in the nuclear fission...] F.Joliot et autres	1939	〈Nature 143〉	R-30009
Cb.9		[Energy of neutrons liberated...] par F.Joliot, Halban et Kowarski	1939	〈Nature 143〉	R-30010
Cb.10		[Mise en évidence d'une réaction en chain...] F.Joliot et autres	1939	〈J.Phys 10〉	R-30008
Cb.11		Annuaire de Collège de France (?)からの抜粋 1937,'38,'39,'43,'44 の Chimie Nucléaire 部門	1945(?)	〈Berthelot et Yuasa)の論文(41)含む)	C-00065
Cb.12		[Détermination empirique du nombre atomique ZA...]I.Joliot-Curie	1945	〈J.Phys.Rad 16〉	R-00162
Cb.13		[Sur la possibilité de produire dans un milieu...]	1949	〈C.R. 11〉	R-30013
Cb.14	書籍	《Frédéric Joliot=Curie》 par M. Rouzé	1950/3.31		C-00040
Cb.15		『F.Joliot=Curie, Textes Choisis』	1959	(Editions sociales)	C-00041
Cb.16		『Frédéric Joliot=Curie』 par Pierre Biquard	1961		C-00089
Cb.17	関連冊子	《XX <sup>e</sup> Anniversaire de la Découvert Radioactivité Articielle par F.et I. Joliot=Curie》	1954	人工放射能発見 20 周年記念講演集 《Certificat de Physique Nuléaire》	C-00005
Cb.18		[Réactions Nucléaires] par F.Joliot=Curie (講義録)	1957-58	原子核物理国際会議	C-00003
Cb.19		[discours d'ouverture] (要旨) par F.Joliot=Curie	1958/7.7	CNRS 組合印刷物	C-00098
Cb.20		[F. Joliot=Curie] par P. Radvanyi	1958	人工放射能発見 30 周年記念	C-00021
Cb.21		《XXX <sup>e</sup> Anniversaire de la Découvert Radioactivité Articielle par F. et I.Joliot=Curie》	1964/7	講演集	C-00004
Cb.22		《Souvenirs et Documents sur F.et I. Joliot=Curie》	1967	F.et I. Joliot 協会刊行 没後 20 年記念 IPN 冊子	C-00012
Cb.23		《Irène Joliot=Curie et la création de l'Institut	1976	〈Information〉 I.P.N.	C-00001
Cb.24		《Irène Joliot=Curie》特集	1976/3		C-00088
Cb.25	雑誌	[La découverte de la radioactivité artificielle] par I.et F. Joliot=Curie	1951	〈Atomes No.58〉	P-00042
Cb.26		[L'avenir de la physique nucléaire en France] par F.Joliot=Curie	1954/7	〈Atomes No.100〉	C-00057
Cb.27		[F.Joliot=Curie et le destin des hommes]	1955	〈Regards No.388〉	C-00053
Cb.28		[Irène Joliot=Curie-Morte pour la science]	1956	〈Paris Match,No.364〉	C-00049
Cb.29		[Irène Joliot=Curie]	1956	〈Heures Claires,N.134〉	C-00045
Cb.30		[Reflexions sur la valeur humaine de le Science] par F.Joliot=Curie	1957	〈La NEF〉	C-00024
Cb.31		[Les Grand découvertes de la radioactivité].	1957	〈La Pensée.No.74〉	C-00014
Cb.32		[F.Joliot=Curie tel qu'il fut].	1958	〈Regards No.435〉	C-00052
Cb.33		[Le chercheur et les conditions modernes de la recherche scientifique] par F.Joliot 他	1958	〈Sciences〉	C-00092
Cb.34		[Irène et Frédéric Joliot=Curie Prix Nobel de Chimie] par Pierre Savel	1958	〈?〉	C-00069



Cb.n		内 容	年/月	掲載誌	旧資料番号
Cb.35		[Frédéric Joliot=Curie] 追悼集	1959	〈La Pensée No. 87〉	C-00025
Cb.36		[Irène Joliot=Curie] Un témoignage de M. Riou	1966	〈Combat pour la Paix〉	C-00042
Cb.37		[Irène Curie] (ロシア語)	1962	USSR 学術雑誌別刷り	C-00002
Cb.38	新聞記事その他	[Memoire de Frédéric Joliot=Curie]	1968/8.14	〈Humanite〉	C-00070
Cb.39		F.Joliot-Curie 50 歳記念 新聞記事	1950	〈Ce Soir〉,〈Match〉	C-00061
Cb.40		F.Joliot-Curie 50 歳記念 [Qui succédera a Joliot=Curie ?]	1950/4.30	〈Paris-Presse〉	〃
Cb.41		F.Joliot-Curie 50 歳記念 記事		〈Ce Soir〉,〈?〉	〃
Cb.42		Irène et Frédéric Joliot ノーベル賞受賞の写真	1951/1.14	〈Le Nouvelles Littéraires〉	C-00064
Cb.43		Irène Joliot の記事 その他	1951/1.17	〈Libération〉	〃
Cb.44		F.Joliot の記事及び Irène Joliot=Curie の記事切抜き		(Le Éditeurs Français Reunis)	〃
Cb.45		ジョリオ夫妻に Médalles Lavoisier 授与	1954	〈Academie de Sciences〉	P-00011
Cb.46		[Notice necrologique de Irène Joliot=Curie] par R.Latarjet (directeur de Institut du Radium)		死亡通知 (タイプ3枚の略伝を含む) 国葬通知状	C-00010
Cb.47		Funérailles Nationales de M <sup>me</sup> I.Joliot-Curie	1956/3	〈France Dimanche〉	C-00081
Cb.48		Irène Joliot=Curie 逝去について新聞記事	1956/3.21		C-00066
Cb.49		Irène Joliot=Curie に関する記事切り抜き各種	1956/3		〃
Cb.50		F.Joliot=Curie 国葬通知状	1958/8.1		C-00081
Cb.51		[Le "Service Frédéric Joliot" inaugure à Orsay]	1959/10.10	〈France soir〉	W-00201
Cb.52		《Association Frédéric et Irène Joliot=Curie》	1950/2.1	協会設立趣意書	C-00015
Cb.53		《Bulletin de l'association F. et I. Joliot=Curie》	1959/11	協会の総会報告	C-00082
Cb.54		F.Joliot=Curie に捧げられた出版物案内	1959/12	〈La Pensée〉,〈Défense de la Paix〉,〈Les editions sociales〉	C-00099
Cb.55		〃 出版物紹介の催し ジョリオ＝キュリー協会－協会案内、集会案内等多数		(W-00223~W-00230)	※
Cb.56	F.Joliot=Curie 没後5年の集会案内	1961/3.17	〈Édition Sociales〉	C-00081	
Cb.57	Irène Jolot-Curie 没後5年追想会パンフ			C-00100	
Cb.58	『Frédéric Joliot=Curie』出版案内	1963/8.4	F. et I. Joliot-Curie 協会	C-00102	
Cb.58	オルセー研究所モニュメントのカード			C-00087	

## Cc : F. Joliot=Curie : 原子力問題と平和運動

Cc.n		内 容	年/月	備 考	旧資料番号
Cc.1	1947	[L'énergie atomique en France] par F.Joliot-Curie	1947	〈Atomes No.15〉	P-00042
Cc.2	~1950	Zoé 特集	1948	〈Regards No.175〉	C-00051
Cc.3		[No Atom Bomb for France] by D.Scoenbrum	1948	〈Science illustrated〉	P-00042
Cc.4		[La pile atomique Française] et [l'appel de Stockholm]	1949	〈Atomes No.35, Zoé〉	C-00054
Cc.5		Joliot (Communist)	1949/4	(英字新聞記事)	P-00042
Cc.6		世界平和会議 ジョリオの講演 他	1949	新聞・雑誌切抜き	P-10228
Cc.7		[F.Joliot-Curie au Congrès constitutif du Mouvement de la Paix]	1959/11	《Combat pour la Paix》 世界平和会議 (Paris) 記録	C-00044
Cc.8		Qu'est allé faire à Moscou M.Joliot=Curie haute commissaire à l'énergie atomique ?	1950/4	〈Le Figaro〉 切抜き	C-00060
Cc.9		Joliot relevé , Joliot révoqué	1950	〈Liberation〉,〈Ce Soir〉切抜き	〃
Cc.10		F.Joliot Curie parle pour la paix au Congrès de Rome.		〈Ce Soir〉 切抜き	〃
Cc.11		Personne ne peut dignement replacer Joliot.		〈?〉 切抜き	〃
Cc.12		《Au XIIe congrès du Parti Communiste Français》		l'Association F et I.Joliot=C.	C-00013
Cc.13		《l'appel de Stockholm》			C-00016
Cc.14		《pour l'interdiction de l'arme atomique》			C-(追1)
Cc.15		《Comment Sortir de l'abime ? 》	1950		C-00017
Cc.16		《Rapport sur le Problème du Commissariat à l'énergie atomique》	1950	原子力委員会の問題	C-00018
Cc.17		[pour la défense de l'immigration démocratique Polonaise en France.] par F.Joliot=Curie		(président de Amitié Franco- Polonaise) による呼びかけ	C-00020
Cc.18		《F.Joliot=Curie 罷免について》	1950/5	Collège de France 組合	C-00020
Cc.19		《F.Joliot=Curie 罷免について》集会案内	1950/11		〃
Cc.20		F.Joliot 平和運動に関する新聞記事他	1950/11	〈Ce soir〉,〈France-Soir〉他切抜	C-00062

Cc.n		内 容	年/月	備 考	旧資料番号
Cc.21		《"l'affaire teissier" à "l'affaire Joliot=Curie》			C-00062
Cc.22		F.Joliot 平和運動に関する新聞記事他		〈Zoé〉 〈Ce Soir〉 他	C-00063
Cc.23		Revue Mondiale de la Paix (Rapport de M.Joliot=Curie)		〈Paix No.21〉	C-00043
Cc.24	1951~	Communistes Collège de France	1951	(Mondial de partisans de la paix)	C-00022
Cc.25	1955	Aux étudiants et étudiantes de France.	1951	Sindiqués へのパンフ?	〃
Cc.26		《Joliot スターリン平和賞について》(Cellule de Collège de France)		(Le Parti communiste Français)	C-00022
Cc.27		(写真)		〈FranceURSS〉(裏表紙に写真)	C-00058
Cc.28		教育・研究改革共産党集会と I.Joliot=Curie の発言	1951(?)		C-00021
Cc.29		ジョリオ主催集会案内	1951/6.6		C-00063
Cc.30		《平和アピール》	1952/10		W-00149
Cc.31		[F.Joliot=Curie Président du Conseil Mondial de la paix.]	1953	〈Défense de la Paix No.20〉切抜	C-00023
Cc.32		[Le sens du mot négociation] par F.Joliot=Curie	1953	〈Défense de la Paix No.29〉切抜	C-00023
Cc.33		[Une Pile Atomique de Poche]	1954	〈Atomes No.98〉	C-00056
Cc.34		新聞記事、他	1954/10	〈Liberation〉 他	C-00062
Cc.35		[F.Joliot=Curie, Au Micro des voix de la paix]	1955?	〈Radio Liberte〉 紙	C-00059
Cc.36		F. et I. Joliot への interview [La bombe "H" met-elle la planète en danger?]	1955/1	〈France soir〉 Discours, Textes et Documents	C-00065
Cc.37	1957~	[Réponse de Monsieur F. Joliot]	1957/12	(Conseil Mondial de la paix)	R-30006
Cc.38		『La Paix le Désarmement et Coopération Internationale』 par F.Joliot=Curie	1955~ 1958		C-00039
Cc.39		[F.Joliot=Curie, Dix années au service de la paix], 他	1958	《Bulletin du conseil Mon- dial de la paix》	C-00050
Cc.40		[La Movement mondial contre armes nucléaires, F.Joliot=Curie]	1958/9	《Le Mond Scientifique》	C-00047
Cc.41		《Le Xe Anniversaire du Mouvement Mondial de la Paix》	1959/3	切抜	W-00198

## Cd : 日本の新聞・雑誌に見る Curie 夫妻・Joliot=Curie 夫妻一

ここには、湯浅とは直接には関係しない、日本の雑誌・新聞に見る資料のみを挙げる。

Cd.n	内 容	年/月	備 考	旧資料番号
Cd.1	「国際知識人大会開く—ジョリオ=キュリー夫人司会」	1948/8	新聞記事	P-10218
Cd.2	「キュリー博士追放の事情」	1950	〈夕刊朝日〉	C-00065
Cd.3	「キュリー夫妻とドレフュス事件」 par 橋口倫介		〈東京新聞〉	P-10105
Cd.4	Alanin N-M (白血病治療に関する) 資料		〈日本血液学会誌〉 抜刷り	C-00084
Cd.5	Alanin N-M (湯浅による伝説注 及び注意書き)			〃
Cd.6	Alanin N-M (日比野による論文 (臨床治療)。他)		湯浅のまとめ	〃
Cd.7	「迷想録—スタンプコレクション記 (キュリー夫妻の 肖像切手)」 par 梅谷友吉	1955/12	〈医学と器械〉	C-00094
Cd.8	日本で出版された F.Joliot=Curie 追想の Articles	1958	湯浅の手書きリスト	C-00036
Cd.9	「基礎研究と科学者の育成」 Joliot=Curie (遠藤訳)」	1959/4		C-00065
Cd.10	書評座談会「科学とヒューマニズム」	1966/2	〈法政〉	〃
Cd.11	「キュリー夫人生誕百年祭より」 グラヴィア	1968/4	〈自然〉 奥野久輝解説	C-00103

## 第Ⅱ部 湯浅年子資料

### Ⅱ-1. 身分・履歴関連資料

湯浅の公的な履歴に関する資料と、それに付随する留学や勤務に関する資料を、以下の項目のもとに示す。

#### S 身分・履歴に関する資料

#### W 社会環境関連資料

#### S 身分・履歴に関する資料

ここでは湯浅自身の身分を保証する公的な書類を次の項目に分けて表示する。

Sa. : 学位記、証書 等

Sb. : CNRS からの身分に関する書類

Sd. : 辞令、届け、その他

Se. : 身分証明に関する資料

#### Sa : 学位記, 証書等

Sa.n	内 容	発行年/月. 日
Sa.1	フランス国家学位記 Diplôme de Docteur ès Sciences Physiques (N° 18) 及び学位審査合格書	1943/12.6 (戦争のため学位記が発せられたのは 1947 年)
Sa.2	学位記 理学博士 (京都大学 理第 1033 号)	1962/3.31
Sa.3	東京文理科大学卒業証書 (n° 268)	1934/3.14
Sa.4	教員免許状 (10127 号)	1937/4.20
Sa.5	紫綬褒章賞状 (No. 1424 号)	1976/10.27

#### Sb : CNRS からの身分に関する書類

Sb.n	通知内容	身 分	年/月. 日
Sb.1	1948-1949 の身分・手当	Chargée de Recherche de 3ème classe (パリ到着後有効)	1948/10.4
Sb.2	1949-1960 の身分・手当	Chargée de Recherche de 3ème classe.	1949/8.9
Sb.3	1950-1951 の身分・手当	Chargée de Recherche de 3ème classe.	1950/8.7
//	1951/10.1 の身分確認	Chargée de Recherche 1er échelon.	1951/2.17
Sb.4	1951-1952 の身分・手当	Chargée de Recherche 1er échelon.	1951/6.20
//	1951-1952 の手当通知書		1951/7.31
Sb.5	1952-1953 の身分・手当	Chargée de Recherche 1er échelon.	1952/7.30
//	1952-1953 の手当通知書		1952/9.3
Sb.6	1953-1954 の身分・手当	Chargée de Recherche 1er échelon.	1953/7.2
//	1953-1954 の手当通知書	entière de Chargée de Recherche de 1er échelon.	1953/8.10
//	1953/10.1 からの身分	2ème échelon. に昇任	1953/11.12
Sb.7	1954-1955 の手当通知書	Chargée de Recherche de 2ème échelon	1954/7.9
Sb.8	1955/10.1 からの身分	Maître de Recherche 有資格者リストに載る (お茶大退職)	1955/8.2
//	1955-1957 の手当通知書	entière de Chargée de Recherche de 3ème échelon.	1955/8.30
Sb.9	1956-1959 の身分・手当	Chargée de Recherche de 4ème échelon.	1956/7.21
//	及び 3.16 付申請書受取状		
//	1956-1957 の手当通知書	Chargée de Recherche de 4ème échelon.	1956/8.6
Sb.10	1957-1962 の身分・手当	Maître de Recherche に昇任	1957/8.14
//	1957-1962 の手当通知書	entière de Maître de Recherche de 3ème classe. (準教授相当)	1957/8.29
Sb.11	1958-1962 の手当通知書	entière de Maître de Recherche de 3ème classe.	1958/6.19
Sb.12	1959-1962 の手当通知書	entière de Maître de Recherche de 3ème classe.	1959/8.13

Sb.n	通知内容	身 分	年/月/日
Sb.13	1960/10.1 からの身分	2ème classe に昇任	1960/10.6
//	1960—の手当通知書	Maître de Recherche de 2ème classe.	1960/11.15
Sb.14	1961-1962 の手当通知書	Maître de Recherche de 2ème classe.	1961/9.26
//	1961/5.1 からの手当通知書	Maître de Recherche de 4ème échelon.	1962/9.10
Sb.15	1962/7.1 からの手当通知書	Maître de Recherche de 5ème échelon.	1962/11.20
Sb.16	1966/1.1 からの手当通知書	Maître de Recherche de 6ème échelon chevron 1-A	1965/12.21
Sb.17	1967/1.1 からの手当	groupe A の chevron 2 に相当	1967/1.31
Sb.18	1968/1.1 からの手当	groupe A の chevron 3 に相当	1968/8.20
Sb.19	1975/2.10	Maître de Recherche honoraire du CNRS 及びその決定に関する書簡	1977/2.16

## Sd : 辞令, 届け, その他

Sd.n	内容	発行元 (提出先)	発行年/月/日
Sd.1	仏国への出張命令	文部省	1939(S 14)/8.3
Sd.2	学資支給せず	文部省	1939(S 14)/8.3
Sd.3	在外研究員証明書発行のこと	文部省	1939(S 14)/8.14
Sd.4	在外研究者名簿 (該当部分)	東京女高師	
Sd.5	帰国, 増俸申請	東京女高師	1945(S 20)/7.30
Sd.6	教授昇任申請	東京女高師	1945(S 20)/8.25
Sd.7	原子核物理学研究嘱託	理化学研究所	1946(S 21)/1.1
Sd.8	教員適格判定書		1946(S 21)/9.13
Sd.9	化学研究所講師嘱託	京都大学	1948(S 23)/1.31
Sd.10	退職願 (控)	東京女高師	1955(S 30)/3.31

## Se : 身分証明に関する資料

Se.n	分類	内 容	発行元 (備考, (旧資料番号))	発行年/月/日
Se.1	証明書類	ATTESTATION (任用証明)	Collège de France, (Prof.Joliot)	1942/12.22
Se.2		'43~'44 年度奨学生証明	留学生局 (W-00018)	1943/10
Se.3		'44 年度給費決定通知	留学生局 (W-00019)	1944/3.8
Se.4		戸籍証明書	在仏日本大使館 (W-00029)	1943/11.30
Se.5		仏での消息問い合わせと報告	文部省 (2 通) 東京女高師 (1 通)	1944/3.14
Se.6		居住証明書	CNRS (Institut d'Astrophysique)	1949/3.9
Se.7		居住および就業証明書	CNRS (Institut d'Astrophysique)	1949/3.9
Se.8		滞在証明書発行予定通知	CNRS	1950/4.26
Se.9		就業証明書	CNRS	1950/5.20
Se.10		手当証明書送付の件	CNRS	1950/10.26
Se.11		CERTIFICAT (身分証明書)	CNRS	1951/5.22
Se.12		ATTESTATION (証明書)	CNRS	1951/11.2
Se.13		居住許可証	Commissaire de police (W-10057)	1952, 1957
Se.14		居住証明 Certificat de Domicile	(W-10057)	1952-59
Se.15		居住証明書	Foyer International. (1949/5.17 以来居住)	1952/7.16
Se.16		ATTESTATION de L'employe	Collège de France (社会保障のための就業証明)	1952/6.10
Se.17		身分証明	Collège de France (1949/5.17 以来研究員)	1956/2.18
Se.18		CERTIFICAT de TRAVAIL	CNRS (CNRS 研究員であることの証明)	1957/2.14
Se.19		身分証明	CNRS (CNRS 主任研究員であることの証明)	1959/2.17
Se.20		戸籍謄本	東京都新宿区	1967/8.31
Se.21		併任協定?	CNRS (1976 年度お茶大と?)	1974/1.28
Se.22		任用協定書	CNRS (1976 年任用と手当)	1976/2.2
Se.23		研究継続のこと	IPN (1976 年研究続行のこと)	1976/4.30
Se.24		ATTESTATION	IPN (名誉研究員の称号付与について)	1977/7.8
Se.25		ATTESTATION	IPN (IPN の一員として 9 月まで研究続行)	1978/10.19
Se.26		ATTESTATION	IPN (IPN の一員として 10 月まで研究続行)	1978/11.10



Se.n	分類	内 容	発行元 (備考, (旧資料番号))	有効期間
Se.27	Carte	Carte de Membre Actif	Foyer international (資料 6.2 に挟持)	1939-1940
Se.28		身分証明書	東京女高師	1948-1949
Se.29		Carte de Membre Actif	Foyer international	1949-1950
Se.30		Carte d'accès a la Salle de Lecture	CNRS	1949-1950
Se.31		Certificat de Travail	CNRS	1950/3.15
Se.32		Service de Restaurant	Comite Parisien des Œuvres Socialis en faveur de la Jeunesse Scolaire et Universitaire.	1950-1951
Se.33		Service de Restaurant	Comite Parisien des Œuvres Socialis en faveur	1951-1952
Se.34		Carte de Restaurant	Foyer international	1951-1952
Se.35		Carte de Membre Actif	Foyer international	1951-1952
Se.36		Carte de Travail	CNRS	1954-
Se.37		Carte d'Etudiant (Auditure)	Inst.Nat.des Sci.et Tech.Nuc. (Seminaire de Physique Nucleaire)	1957-1958
Se.38		Carte d'Etudiant (Auditure)	Inst.Nat.des Sci.et Tech.Nuc.(Seminaire Bloch)	1959-1960
Se.39		Carte professionnelle	Univ. de Paris, Faculté des Sci. d'Orsay	1961-
Se.40		Cantine du Personel	Faculté des Sci. d'Orsay	1967-
Se.41		Cantine du Personel	Faculté des Sci. d'Orsay	1968-
Se.42		Carte de Membre	Comite d'Entraide Sociale, Faculté des Sciences d'Orsy	1974-

#### Sf : パスポート

Sf.n	発行年/月.日	有効期間	発行元	備考
Sf.1	1939/8.10	1954/2.10	東京 在仏日本大使館 在仏日本大使館 在仏日本大使館	1944/8.29 改訂
Sf.2	1949/1.8			(1993/12.20 市井敏夫氏より提供)
Sf.3	1953/9.28			資料 Sf.3 と合体
Sf.4	1954/2.12			
Sf.5	1971/6.22			
Sf.6	1976/6.16			

## W 社会環境関連資料

『湯浅年子資料目録続』において、留学・勤務関係資料として分類されていた資料を、以下の項目に再区分し、さらにその区分内で、内容に沿ってまとめて表示する。

**Wa : 留学関連資料('38~'44)**      **Wb : 独占領期のパリで**      **Wc : ベルリン滞在中('44~'45)**

**Wd : 帰国中と再渡航関連('45~'50)**      **We : '50~'60年代のパリで**      **Wf : '70年代のパリで**

各区分内で改めて Wa.n (n=1,2,3,...), Wb.n (n=1,2,3,...) ...と分類番号を付してある。

以下には公的な通知書及びそれに準ずる手紙が含まれているが、それ以外の手紙類は、**II-3 T-交流記録** の中にまとめて挙げる。

## Wa : 留学関連資料 ('38~'44)

Wa.n	資料区分	内 容	年/月.日	旧資料番号
Wa.1	留学生として出発	Houmauhand→湯浅 (留学生試験についてのアドバイス) (2 通)	1938/8.29	W-00001
Wa.2		駐日フランス大使館→湯浅 (留学試験合格通知)	1939/6.2	W-00002
Wa.3		日仏会館 Dr. Noyer の Ra 研 Gricouroff 宛, M <sup>me</sup> Vincent 宛湯浅紹介状	1939/6	W-00004,5
Wa.4		駐日フランス大使館→湯浅 (出発予定日通知) 1, 出港 '39/9.8 の予定 ('39/8.18), 2, 出発延期 (9.5), 3, 神戸出港 '40/1.25 (1.22)	1939/8 ~1940/1	W-00003
Wa.5	奨学関連 ('40~'44)	Ministère des Affaires Étrangère→Yuasa	1940/3.6	W-00011
Wa.6		湯浅が'40.4/19 より研究していた証明 (F.Joliot 署名)	1940/9.27	C-00071
Wa.7		奨学報告書 (控) (1941~42) 及び申請書	1941/6.9	W-00013,14
Wa.8		奨学報告書 (控) (1942~43) 及び申請書 (控)	1942/6.1	W-00015
Wa.9		F.Joliot→Ministere des affaires étrangères (給費延長されたし, 湯浅による下書き), Ministere des affaires étrangères (湯浅に関する奨学報告, '43~'44 度奨学生延長申請書の下書きメモ)	1943/6.26 1943/6.29	C-00071 W-00016 W-00017
Wa.10		P.Savel (F.Joliot 代理) → (湯浅の業績と奨学金延長依頼)	1944/6.22	C-00076

## Wb : 独占領期のパリで

Wb.n	資料区分	内 容	年/月.日	旧資料番号
Wb.1	独軍占領前後の対処関連	日本大使館→Val-de-Grâce 地区警察署長 (片岡, 湯浅, 小松のマルセイユへの通行証交付願い)	1940/5.17	W-00022
Wb.2		パリから避難するための通行許可証 (F.Joliot 署名)	1940/5.18	C-00071
Wb.3		日本領事館高水博→湯浅, 片岡 (邦人引揚げ船の様子など)	1940/7.2	W-00026
Wb.4		日本大使館→Val-de-Grâce 地区警察署長 (荷物移動届)	1940/8.6	W-00023
Wb.5		湯浅→在巴ドイツ警察 (Foyer の Miss Watson の釈放願)	1942/9.2	W-00031
Wb.6		請願書 文部大臣宛パリに残留したい旨	1944/8.14	W-00041
Wb.7	研究の周辺事項	Blaringhem (Paris Univ. 理学部植物教室) →Yuasa	1940/3.26	W-00020
Wb.8		P.Raineut (Paris Univ. 理学部有機化学研究室) →Yuasa	1940/3.28	〃
Wb.9		パリ海軍事務所黒田中佐→湯浅(最新科学話題を聞いた礼状)	1940/12.	W-00027

## Wc : ベルリン滞在中 ('44~'45)

Wc.n	資料区分	内 容	年/月.日	旧資料番号
Wc.1	研究の周辺関連	湯浅→O.Hahn (控) (研究所への受入れ感謝と宿舍依頼)	1944/10.2	W-00047
Wc.2		大使館付武官小松陸軍少将→Hahn(控) (湯浅の研究所入所依頼)	1944/12.2	W-00048
Wc.3		Hahn→小松武官 (同封メモ ベルリン付近の研究所紹介)	1944/12.6	W-00049
Wc.4		小松武官→W.Heisenberg (控) (湯浅の研究所入所依頼)	1944/12.1	W-00050
Wc.5		ベルリン大学図書館貸出証, 入庫許可証	1944/12.22	W-00052

## Wd : 帰国中 ('45~'50)

Wd.n	資料区分	内 容	旧資料番号
Wd.1	女子大学設立関連文書	[The Plan of the Tokyo H.N.S. for W.] (英文下書き)	W-00067
Wd.2		[The General View of Education in the Tokyo Higher Normal School for Women]. (英文下書き 3 枚, 同タイプ清書 2 枚)	W-00068

We: '50~'60年代のパリで

We.n	資料区分	内 容	年/月.日	旧資料番号
We.1	お茶大休・ 退職関連	お茶大宮本→湯浅（休職に関する事情について）	1951/3.2	W-00135
We.2		お茶大退職関連湯浅→お茶大下瀬, 学長宛, 下瀬→湯浅宛	1955/2~6	W-00169
We.3	日本より公 的依頼	日本学術会議茅誠司より海外研究者の生活に関する資料依頼と礼状	1950/12,	W-00114
We.4		原子力平和利用国際会議に関して, 在仏日本大使館より。 原子力について教示依頼状（4.28: 杉浦書記官）及び礼状（5.2） 同会議関係情報（7.20,8.4）, 出席者到着予定他（8.16）他	1951/2 1955/4.28 ~8.16	W-00172
We.5	他	電報発信控 湯浅→都築正男（Mme Joliot の為に葉送れ）	1956/3	W-00171
We.6		ジョリオ葬儀の折の大使館の対応について, 在仏日本大使館加賀美氏へ質問	1958/9	W-00194
We.7		オルセー研究所カリカチュア（コピー）		W-00247
We.8		マリーキュリー生誕100年記念行事（パリ大学）案内, 他	1967/10.24	W-00229
We.9		平和運動会員証（MOVEMENT DE LA PAIX）	1967	W-00230

Wf: '70年代のパリで

Wf.n	資料区分	内 容	年/月.日	旧資料番号
Wf.1	NHK 出演	荒川→湯浅, アナウンサー斉藤→湯浅（NHK 放映後感想他）	1978/7,8	W-00315 ~316
Wf.2	研究会等連 絡文書	在仏フランス日本文学会会長→湯浅（新村猛訪バ関連）	1978/8.21	W-00318
Wf.3		日仏核物理セミナー（プログラム, ノート, 他参加者による寄せ書等）	1979/10.8~12	F-00039
Wf.4	退職及び紫 綬褒章記念	定年退職記念会印刷物（和文）	1975/12.22	W-00287
Wf.5		受賞に際しての和文挨拶状葉書（'76/11.22 付）	1976	W-00294
Wf.6		レセプション関連, 招待文（'77/1.12, 仏文）	1976~77	W-000293
Wf.7		レセプション招待者メモ等	1977	W-000295

## II-2. 研究関連資料

ここでは湯浅の研究と直接関連する資料を、次のように分類して表示する。

- Y 研究歴・研究業績関連資料      R 実験研究資料      N ノート資料  
 F 日仏共同研究資料, 柳父-桑折資料      D 放射線被害関連資料  
 E 放射能計算尺関連資料      K 国際学会関連資料

### Y 研究歴・研究業績関連資料

Ya: 学術論文 (収納ファイル)      Yb: 研究歴・研究報告

(1-2 研究業績に研究解説, 全論文リストがある。)

#### Ya: 学術論文 (論文別刷、あるいはコピー)

収納ファイル	収納論文番号 (年代)	目録資料番号
学術論文 I	n° 1~n° 27 (1932~1954)	Y-00001~Y-00020
学術論文 II	n° 28~n° 69 (1955~1969)	Y-00021~Y-00054
学術論文 III	n° 70~n° 100 (1970~1985)	Y-00055~Y-00074

(論文番号 n° は I-3 の論文リストに同じ)

#### Yb: 研究歴・研究報告 (湯浅自身によって記されたもの) (ファイル『研究歴に関する資料』として収納)

Yb.n	資料	年	記載内容 備考
Yb.1	[Travaux Scientifique que faits en Europe]	1945	1941~45 の研究歴
Yb.2	[Research References]	1945	1934~45 の研究歴
Yb.3	[List of Researches, (with abstract)]	1945	1934~45 の研究歴
Yb.4	《Liste des titres et travaux》	1956	1934~56 の研究歴
Yb.5	《Titres et Travaux de Scientifique de Toshiko Yuasa》	1957	} 研究所作成による冊子. 1934 年から制作年までの履歴, 研究歴, 論文リスト, 著作リストを含む.
Yb.6	《Titres et Travaux de Scientifique de Toshiko Yuasa》	1966	
Yb.7	《Titres et Travaux de Scientifique de Toshiko Yuasa》	1974	
Yb.8	「稀少現象を探って来た道を振り返って」	1979	

### R 実験研究資料

資料は, 研究年代や研究対象によって次の R1~R7 の7期に区分する。表題に続く ( ) 内は研究年代, 関連論文の番号, 解説 I-3 での区分記号 A~F である。年代に続く No. は論文リストの論文番号である。

- R1: 原子・分子分光学 (1932~1939, No.1-6,A)  
 R2: 反跳核と原子の衝突 (1940~1941, No.7,8,B 1)  
 R3:  $\beta$  線連続スペクトル (1941~1944, No.9-12,B 2)  
 R4:  $\beta$  線スペクトル 他 (1944~1948, No.13,14,C)  
 R5:  $\beta$  線スペクトルと原子核分光学 (1949~1958, No.15-45,47,D)  
 R6: 中エネルギー核反応 (1957~1970, No. 46,48-61,63,64,67-69,E)  
 R7: 少数核子系 (1966~1980, No. 62,65,66,70-99,F)



資料は旧資料目録の中から研究の方法をよく伝えていると思われる代表的な資料を内容毎に選び出して、分類番号 S (R 1.1, R 2.1, R 1.2……等) による番号付けをして一覧表として示し、その資料を含む元の資料番号も付記してある (この公開資料目録においては旧資料番号として記載)。『湯浅年子資料目録』および『同 続』による資料番号の中には、複数の資料から構成されていて、子番号を附せられている資料もあるが、子番号はここでは省略する。

### R 1 : 原子・分子分光学 1932~1939, No.1-6

東京文理科大学での研究成果として原子分子分光学関係の論文 6 編があるが、それらの研究過程に関連する実験関係資料等は、東京の空襲で焼失したのであろうか、まったく残されていない。渡仏を前にした 39 年秋頃から、原子核の放射性崩壊の研究開始に備えて、放射線の観測をしたり、放射性元素に関する資料を集めて、表を作成したりしていたようで、以下の資料が残されている。

R 1.n	内 容		旧資料番号
R 1.1	人工放射性元素に関する一覧表 ('39~'40 作成)	1: Radioactive isotope which have been produced by artificial means. 2: Les substances manquées de mesure du rayon $\beta$ continu. 3: Target	R-00001

### R 2 : 反跳核と原子の衝突 1940~1941, No.7,8

コレジ・ド・フランス原子核化学研究所で、 $\alpha$  崩壊した原子核の反跳によって主にプロトンが放出される現象を霧箱写真に撮り、その飛跡の拡大図から、反跳核 (後退核) 及び放出粒子の振る舞いを詳細に解析する研究を開始。飛跡拡大図は、わら半紙に鉛筆書きされたもので、ネガとともに残されている。実験装置関係の図も含まれている。

R 2.n	実験内容・試料等	実験結果・解析関連	旧資料番号
R 2.1	Ac, Po, Ra, Ag の反跳による衝突現象の解析	ネガ, 飛跡拡大図, 数値解析, 角分布, 飛行距離とエネルギー関連グラフ等より 10 点ほど抽出 実験まとめ	R-00037, R-00038, R-00039, R-00073 R-00040
R 2.2	実験装置関連	装置設計図, 回路図等	R-00042
R 2.3	実験報告関連	研究報告原稿 [Origine de l'étude]	R-00007

### R 3 : $\beta$ 線連続スペクトル 1941~1944, No.9-12

$\beta$  線源としておもに As, V, Ux を用い、霧箱に見る  $\beta$  線の飛跡を詳細に分析して、 $\beta$  スペクトルを求め、エネルギーの上限、崩壊の型、 $\gamma$  線放出の有無など調べる実験を行う。多くの霧箱写真のネガ、拡大飛跡図、解析結果のグラフが残されており、その中で代表的と思われる資料を以下に挙げるが、なお同様な資料が数多く残されている。実験の日付は資料にはほとんど記されていないので、実験がなされた順序は不明である。

R 3.n	実験内容・試料等	実験成果・解析関連	旧資料番号
R 3.1	As 等に対する霧箱写真, 飛跡図	ネガと鉛筆書き拡大飛跡図 (220 点以上から 6 点抽出)	R-00044, R-00065 R-00070
R 3.2	V 等に対する霧箱写真, 飛跡図	ネガと鉛筆書き拡大飛跡図 (600 点程から 5 点抽出)	R-00059
R 3.3	Ux 等に対する霧箱写真, 飛跡図	ネガと鉛筆書き拡大飛跡図 (2 点抽出)	R-00068 R-00034
R 3.4	As, V, Ux に対する数値解析と $\beta$ 線スペクトル	数値解析と $\beta$ スペクトルのグラフ (6 点抽出)	R-00030, R-00037 R-00051

R 3.5	実験装置関連 ”	装置設計図 装置設計図 Joliot による改良型	R-00052,R-00054 R-00050,R-00013
R 3.6	実験結果の理論的解析	理論式、実験結果の解析	R-00003, R-00035 R-00043

#### R 4: $\beta$ スペクトル他 1944~1950, No.13,14

空襲が激化するベルリンで、研究所入りに、研究開始に苦闘し、2重焦点型 $\beta$ 線分光器をつくり上げるが、ベルリン陥落によって、それを使って実験することはできなかった。1945年6月末、その分光器をもって帰国するが、敗戦後の日本では、原子核実験が禁止され、研究は理論的解析に限られる。

R 4.n	実験試料・内容等	実験成果とその解析	旧資料番号 他
R 4.1	$\beta$ スペクトル	$\beta$ スペクトルの解析とまとめ、独語論文	R-00077,R-00078
R 4.2	$\beta$ 線の異常散乱	Cu,V の $\beta$ 線異常散乱のグラフと解析	R-00081
R 4.3	実験装置	2重焦点型 $\beta$ 線分光器設計図	R-00081
R 4.4	講演原稿、研究報告等	日本物理学会講演原稿 (1946)「ウィルソン霧箱により観測せられたる $\beta$ 線の異常現象について」	R-00079
R 4.5		講演原稿「 $\beta$ 線スペクトルに関する諸問題」(東大にて、'47)	
R 4.6		日本物理学会講演原稿('48)「Szilard-Chalmers 法による放射性Vの濃縮」	R-00084
R 4.7		研究報告「 $\beta$ 崩壊の理論」、研究報告(英文)	R-00085
R 4.8		学会への報告原稿「 $\beta$ 崩壊に関する Fermi 理論—考察及び2,3の実験結果への応用」	R-00086

#### R 5: $\beta$ スペクトルと原子核分光学 1949~1959, No.15-45, 47

再渡仏後は、II-Dの解説からも分かるように、 $\beta$ 崩壊の仕組み解明すべく、徹底的に実験に取り組んでおり、霧箱写真のネガ及び、飛跡拡大図(ワラ半紙に鉛筆書き)は膨大な数にのぼる。資料はすべて関連しあっていて、試料や日付の記入がないものが多く、区分することは難しいが、論文の内容に沿ってまとめてみた。(目録の旧資料番号N-…はノート資料に分類されているものである)

R 5.n	実験内容・試料等	実験成果・解析関連	旧資料番号
R 5.1	$^{32}\text{P}$ , V の $\beta$ 崩壊で観測される正電荷粒子の問題	写真ネガ, 飛跡図(exp.I), (exp.III), (exp.IV) 飛跡図(計216枚), 飛跡図(計44枚, Niも含む), 実験ノート(データ)(5点抽出)	R-00094,R-00095 R-00097,R-00098 R-00111,R-00104 N-00022
R 5.2	$^{65}\text{Zn}$ , $^{32}\text{P}$ , $^{35}\text{S}$ 等による内部転換電子と分岐比の決定, $^{2Z+1}\text{A}_{N=Z+1}$ 核の特性等	飛跡ネガ(3点抽出), 数値解析とグラフ 分岐比 $K/\beta^+$ の詳細な計算 実験ノート(データ)	R-00117 R-00121 R-00124 N-00027,R-00160
R 5.3	$^{32}\text{P}$ , Cu, Zn, $^{58}\text{Ni}$ 等による $\beta$ スペクトルの詳細, $\beta$ 崩壊の型, 核のエネルギー構造と遷移	データ, そのグラフと解析 及びそのまとめ	R-00125 R-00173
R 5.4	実験装置	装置, 回路図, 設計図 Retouches sur la chambre de Wilson (タイプ1枚)	R-00128,R-00140 R-20001
R 5.5	計算まとめ	Calculs des masses de $^{59}\text{Cu}$ , $^{58}\text{Ni}$ , $^{59}\text{Co}$ , $^{59}\text{Ni}$ et Q.	R-00168
R 5.6		まとめ(Extraction de Zn par la réaction Cu (d, 2 n) Zn) 関連	R-00177
R 5.7	研究報告等	研究報告(論文No.17関連), '49年の研究成果報告メモ	R-00156

#### R 6: 中エネルギー核反応 1959~1970

研究所がオルセーに移転し、156 MeVのシンクロサイクロトロンで生成されたプロトンによって、 $^{12}\text{C}$ を標的としたときに起こる核反応の研究を始め、プロパン泡箱による詳細な観測結果を理論的に解析した。

スパークチェンバー等装置の製作・改良等による成果も大きい。

R 6.n	実験内容・試料	実験成果・解析関連	旧資料番号
R 6.1	核反応 $^{12}\text{C}(p,2p)$ , $(p,np)$	データによるグラフ及び解析	R-00190
R 6.2	のプロパン泡箱による観測	$d^3\sigma$ のための実験と解析	R-00192
R 6.3		グラフ& $d^3\sigma$ の理論及び数値解析	R-00193
R 6.4	研究報告等	総合報告 ( $\beta$ 崩壊と $\mu$ メソン捕獲研究会, 素研 (Vol.27, '63))	R-00313
R 6.5		年研究報告 ('66~'67) 下書	R-00191

### R 7 : 少数核子系 1966~1980

液体重水素を標的とする核反応の研究を始める。この反応の終状態である3核子系は、I-2-(1)の研究解説に見られるように、実験的にも理論的にも非常に複雑で難しい扱いが要求されるものであった。多数の関連する文献も遺されている。

	実験内容・試料	実験成果・解析関連	旧資料番号
R 7.1	156 Mev における	実験結果とその解析, 加速器関連, 回路図等	N-00030,N-00033
R 7.2	$D(p,pn)$ , $D(p,2p)$ 反応	理論的検討及びデータとその解析, 計算メモ	R-00220
R 7.3	$D(\alpha,\alpha p)n$	グラフ, TPシート及び実験結果のまとめ 等	R-00216
R 7.4	neutron ビーム	faisceau du neutrons OHP, 装置	R-00245
R 7.5	実験結果の検討と	研究報告 ( $^{12}\text{C}(p,2p)^{11}\text{B}$ )	R-00218
R 7.6	研究報告	研究報告および討論記録 ( $D(\alpha,\alpha p)n$ )	R-00218,N-00035
R 7.7		研究報告 (Production du faisceau de neutrons à 200 MeV)	R-00233,R-00234
R 7.8		研究報告 ( $D(p,2p)$ , $D(p,pn)$ )	R-00200 R-00220
R 7.9		研究報告 ( $D(p,dp)$ )	R-00219
R 7.10		研究報告 ( $D(n,2n)p$ , $D(d,n)^3\text{He}$ ), 討論メモ	R-00239,R-00242

## N ノート資料

研究関連のノートを、次の4期に区分して一覧表として示す。

N 1 : 仏留学生時代 1940~1944

N 2 : 独滞在期及び 帰国中 1944~1949

N 3 : コレジ・ド・フランス時代 1949~1959

N 4 : オルセー IPN 時代 1959~1980

ただし、R-研究関係資料, P-文芸資料に属すべき内容の資料は、それら該当箇所に記載する。

### N 1 : 仏留学生時代 1940~1944

N 1.n	区分	内容	旧資料番号
N 1.1	セミナー・講	Séminaire de F.Joliot (Réaction Nucléaire '40/11.22~12.13)	N-00001
N 1.2	義聴講記録,	Séminaire par Mme.Joliot (Radioactivité et ses propriétés chimique. '40~'41)	N-00002
N 1.3	論文	Séminaire par F.Joliot (Propriétés du Neutron. '40/11.12~'41/5.6)	N-00003
N 1.4		Cours de L.de Bloglie (Mécanique Quantique. Particules à spin.'41/11~'42/1)	N-00004
N 1.5		Cours de F.Joliot ('41/12.2~'41/4.21 各週)	N-00005
N 1.6		Conférence de Laccassagne ('42/1.19), de F.Joliot ('42/10.22) et al.	N-00006
N 1.7		Cours de F.Joliot ('42~'44), Séminaire par I.Joliot, Bertholet, et al. '41,Cours de modern physique (英文書籍, par Mme Curie, et al.) '40~'44 (論文筆写)	N-00007
N 1.8		論文勉強ノート '42	N-00008

## N 2 : 独滞在期及び帰国中 1944~1949

N 2.n	区分	内 容	旧資料番号
N 2.1	コロキウム・講演等	科研 Colloquium at Lab.Nishina(par R.Maze, Comptage et selections des cosmiques II), 日本物理学会講演 (par Sakata, 他, '47) 他メモ	N-00049
N 2.2	聴講記録	科研 Conférence ('48), Gibbs Statistical Method ( I . introduction 訳)	N-00050
N 2.3		科研 Colloquium at Lab. Nishina (Biologie radioactive '47), 講演メモ (生物学及び医学研究のための指示剤としての放射性物質について)	N-00051
N 2.4		科研 Conférence à Inst. Chem. Phys. (par Kimura), 他核関係論文紹介等 '47	N-00052

## N 3 : コレジ・ド・フランス時代 1949~1959

N 3.n	区分	内 容	旧資料番号
N 3.1	講義・セミナー 関連	Course par F.Joliot (Etude de Comportements des Neutrons, Réaction de Photo nucléaire. '48~'51)	N-00009
N 3.2		Séminaire au Lab.('51/2~5 (18回), '52/12~'53,5 (21回), '52/12~'53/3 (11回)	N-00010
N 3.3		Séminaire ('53/11~12) 他	N-00058
N 3.4		Séminaire (Annihilation de positron '54) 他	N-00059

## N 4 : オルセー IPN 時代 1959~1980

N 4.n	区分	内 容	旧資料番号
N 4.1	セミナー関連	Diffusion p-D. par Kuroda, '66	N-00043
N 4.2		Séminaire	N-00031
N 4.3	Synchro 関係 ゼミ, 連絡, 会議 等	Synchrocyclotron Séminaire. '69	N-00038
N 4.4		Transformation du Synchro. 他実験メモ等 '72~'73	N-00040
N 4.5		研究会及び研究連絡 (à Orsay). '75~76	N-00041
N 4.6		Réunion du groupé Synchro. '75~76	N-00042
N 4.7		Séminaire du groupé Synchro. '76~78	N-00043
N 4.8		Séminaire du groupé S.C.-E.I. '76~'77	N-00044
N 4.9		Séminaire du groupé S.C.-E.I. '78~'79	N-00046

F 日仏共同研究資料, <sup>ヤナブ</sup> <sup>コオリ</sup> 柳父一桑折資料

『湯浅年子資料目録』中の「日仏共同研究資料」を, Fa 共同研究関連論文, Fb プロジェクト案と再区分し, Fa.n, Fb.n, (n=1,2,3, …) と番号付けして示す。他に多数の連絡文書がある。

柳父琢治教授, 桑折範彦教授の寄贈による柳父一桑折資料は別枠で示す。

## Fa : 共同研究関連論文

Fa.n	区分	内 容	旧資料番号
Fa.1	レポート (論文リストにあるものを除く)	[Etude des réaction 2 H (p,2 p) à 200 MeV un utilisant un grand Scintillateur (NE 110) à deux temps de vol avec un système d'hodoscopes]	F-00002
Fa.2		par Yuasa, Dechamps, Koori et Reide.	''
Fa.3		[Protpon-induced <sup>3</sup> H(p,2 p)n and (p,pn)p reaction at 200 MeV studied by using large scintillation detector (NE 110)], par Yuasa, Dechamps, Koori et Reide	''
		[Test du compteur à deux temps de vol à grands dimensions. ] par Dechamps, Koori,Reide et Yuasa.	



Fb: プロジェクト案

Fb.n	区分	内容	旧資料番号
Fb.1	プロジェクト案	Yanabu's reconfirmation of the contents of discussions held in the office-room of Prof. Riou. ('79.7.13)	F-00011
Fb.2		[Proposal for cooperative research under the Japan-France cooperative science program submitted to the Japan Society for the Promotion of Science.] (日仏共同研究計画案-仏側への提出書類コピー, 1979/8.29, 小野沢宛送付)	F-00005
Fb.3		[projet modifié de l'expérience dans le cadre de la collaboration CNRS-JSPS] (1979, présenté par coté français)	F-00006
Fb.4		柳父の手紙の仏訳コピー	F-00010

ヤナブ コオリ  
柳父-桑折資料

1991年4月, 京都大学名誉教授柳父琢治氏(日仏共同研究日本側代表), 及び徳島大学教授桑折範彦氏(湯浅と共同研究, また日仏共同研究に参加)より寄贈された資料で, 次のように構成されている。

FI	共同研究 I	1977.8~1978.4	湯浅来日時の資料, 共同研究申請関係書類, 交渉経過メモ手紙等
FII	共同研究 II	1978.4~1979.1	共同研究申請書類とその仏訳, 1979年実験計画, 手紙, メモ等
FIII	共同研究 III	1979.2~1980.1	研究計画案文書, 柳父書簡の仏訳, Langevin-柳父会談メモ, Q&C
FIV	共同研究 IV	1980.2~1980.11	関係者間の手紙, 電話メモ等
FV	共同研究 V	1980.11~1981.2	研究計画案(再), 日側研究打ち合わせ, 日仏の連絡等
FVI	共同研究 VI	1981.2~1981.3	実験の記録, 連絡文書
FVII	共同研究 VII	1981.3~1981.9	データ, メモ等
FVIII	共同研究 VIII	1981.9~	実験結果の整理
FP1	文献と publish paper I		関係論文, '78 グラーツ会議の要旨(湯浅論文の引用のあるもの)
FP2	文献と publish paper II		実験装置図面, 関係論文, ゴードン会議報告
FP3	文献と publish paper III		1980年9月以降の出張関係書類, 報告書, 文献, メモ等
FL1	手紙 湯浅-柳父 I		1968.5~1978.9 '77年までに36通, '77年以降47通, 長文のものが多い
FL2	手紙 湯浅-柳父 II		1978.9~1980.1 主として共同研究申請書類に関するもの 46通
FL3	手紙 桑折-柳父		研究所の状況, 実験報告, 湯浅の健康状態等 35通
FL4	手紙 小野沢, 関, 横田-柳父		JSPS, CNRS 間の連絡 45通, 共同研究者間 40通
FL5	手紙 Riou, Langevin, 坂井 柳父他		日仏の連絡関係 20通
FT1	電話 湯浅-柳父 I		1978.5~1979.4 計20回(5,6月4回, 9月頃6回, 以後16回)
FT2	電話 湯浅-柳父 II		1979.5~1979.7 計17回(5月5回, 6月10回, 7月2回)
FT3	電話 湯浅-柳父 III		1979.9~1979.11 計8回(9月2回, 10月5回, 11月1回)
FT4	電話録音テープ		湯浅⇄柳父電話記録 1975~1979

柳父-桑折資料: 公開のための抽出資料

F*.n	区分	抽出資料
FI.1	学振への湯浅報告書	JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE, TOKYO ('77年原子核国際会議に招待された湯浅の, 学振への報告書, 1977/12/1)
FI.2	国際共同計画案	昭和54年度国際共同計画募集要項(学術振興会)
FI.3	〃	昭和54年度国際共同計画申請書(1978年4月頃)
FI.4	〃	Demande pour la collaboration internationale de Recherche pour 1979 . Title: Studies on the structure and interactions of few-nucleon systems.
FI.5	連絡文書メモ	手紙(湯浅→柳父)の柳父による内容メモ: 1977(10/21-12/29, 全7通) 1978(1/3-4/14, 全17通)
FII.1	計画の提案先変更	国際共同計画不採用通知(1978/8/16)
FII.2		日仏科学協力事業協力研究提案書(1978/10)
FIII.1	計画案の検討	Riou, Marty, Langevin, 湯浅, 柳父の5者会談(1979/7,12)後, 柳父による「記録と考察」の資料1~6(1979/7/12,13)

F*.n	区分	抽出資料
FIV.1 FIV.2 FIV.3	連絡文書	Mirabel→Onozawa (電報 1980/7/9), 小野沢→柳父 (1980/7/13): H.Langevin=Joliot→柳父 (1980/7/10) H.Langevin=Joliot→柳父 (1980/7/24)
FV.1 FV.2	日仏共同研究計画	昭和 55 年度日本学術振興会共同研究実施計画調書 (1980/9/5) 研究題目: The Interactions among two, three and four nucleons in the breakup process of deuteron–deuteron reaction. (1980/11/14).
FL 1.1 FL 1.2 FL 2.1 FL 2.2 FL 3.1	湯浅, 柳父, 桑折 連絡文書	湯浅→柳父: 1977/12/18 湯浅→柳父: 1978/2/22 湯浅→柳父: 1978/9/12 柳父→湯浅: 1979/2/6 桑折→柳父: 1980/1/3
FL 4.1 FL 4.2 FL 4.3 FL 5.1 FL 5.2	Riou, Mirabel, 小野沢 柳父, 坂井, 連絡文書	Onozawa→Mirabel: 1979/4/16, 小野沢→柳父: 1978/10/7, 柳父→小野沢: 1978/11/29 小野沢→柳父: 電話記録及びメモ (1980/1/31) Yanabu→Riou: 1977/11/19, Riou→Yanabu: 1977/12/12 柳父→坂井光夫: 1980/1/10

## 附・日仏共同研究経過表

年	月/日	事項	抽出資料
1973	11	「日仏科学協力事業」発足	
1977	8	「原子核国際会議」(東京)に出席のため湯浅帰国。日仏共同研究のための協議発足。	F I.1
	10~12	湯浅→柳父 (7 通メモ), IPN に研究計画 (1978/3-9 実施に向けて) 案提出	F I.3~5
	11/19	柳父→Riou 挨拶と研究計画	FL 5.1
	12/12	Riou→柳父 同意の返信	FL 5.1
	12/18	湯浅→柳父	FL 1.1
1978	1~4	湯浅→柳父 (手紙 17 通メモ)	F I.5
	2/22	湯浅→柳父	FL 1.2
	5~6	「国際共同研究計画」案作製, 学術振興会に提出	F II.1
	8/16	「国際共同研究案」不採択	FL 4.2
	9/12	湯浅→柳父	FL 2.1
	10~12	小野沢↔柳父	F II.2
	10/28	「日仏科学協力事業共同研究」応募書類提出	
1979	1	IPN: 共同研究を歓迎, サポートを表明,	
	2	JSPS: 共同研究採択を決定	
	2/6	柳父→湯浅	FL 2.2
	4/16	小野沢 (JSPS) →Mirabel (CNRS): 協力要請の手紙	FL 4.1
	7/12	柳父が Riou, Langevin, Marty, 湯浅と協議, 11 月実験開始の案を作成	F III.1
1980	1/3	ビーム・タイム 3 月までに 2 週間とすることにする。	FL 3.1
	1/10	柳父→坂井	FL 5.2
	1/15	CNRS→JSPS telex 情報	FL 3
	1/30	湯浅入院	
	1/31	CNRS→JSPS 共同研究採択の電報, JSPS→柳父 電話	FL 4.3
	2/1	湯浅没	
	2/2	柳父: Langevin に研究続行の意志を伝える。	
	2/8	湯浅葬儀, Riou は共同研究の成立を望むと弔辞。	
	2/22	柳父, 坂井, 横田, 関: 小野沢と協議, JSPS の協力決定	
	5~6	Langevin 共同研究続行を決意, 仏側責任者となることを表明	
	7/9	CNRS→JSPS 電報: Langevin が仏側担当となる。日側研究者の派遣に同意。	FIV.1
	7/10,24	Langevin→柳父, Langevin→柳父	FIV.2,3
	7/13	JSPS→柳父	FIV.1

年	月/日	事項	抽出資料
1981	8	日本側研究員派遣方針決定 柳父, 関, 横田, 桑折	FV.1 FV.2
	9	実験計画最終打ち合わせ, 実施計画書 再提出	
	11	Langevin : S.C. (Scientific Comitee) へ書類提出	
	2	IPN において共同実験開始	
	2~	実験記録検討・整理 論文 : Two-spectator quasifree scattering process in the 2 H (d,pn) pn reaction at 108 MeV. (N.Koori, T.Ohsawa, S.Seki, H.Yokota, T.Yanabu, Y.Deschamps, E.Hourany, H. Langevin-Joliot, F.Reide, and M.Roy-Stephan ; Phys.Rev.C 3, 246,1985)	

## D 放射線被害関連資料

前資料目録の「放射能関係資料」のうち、「ビキニ水爆実験と第五福竜丸被爆」に関連する資料から、とくに湯浅が直接手がけた資料を取り上げる。他に多数の関連資料が保管されている。

### Da : ビキニ水爆実験と第 5 福竜丸被爆

Da.n	区分	内容	旧資料番号
D.1	湯浅による検証と報告	[Rapport sur les analyses faites au Japon, des cendres radio-actives projetees lors de l'explosion de Bikini du 1er Mars 1954] (par J.Laberrigue -Frolow et T.Yuasa, <La Semaine Hôpitaux '56>) とその原稿	R-10014 (Ad.21 に記載)
D.2		[Bulletin de santé de M.Kuboyama] par Yuasa, ('54/8.31) とその下書き	R-10015,10018
D.3		[Les Cendres radioactives de l'explosion nucléaire] par Yuasa	R-10015
D.4		湯浅による毎日新聞仏訳 [M.Kuboyama, une des victimes de Bikini,...] ('54/8.31) とその下書き ('54/5)	R-10016
D.5		読売新聞記事の仏訳下書き ('55/8.31, 9/1)	R-10017

## E 放射能計算尺関連資料

「放射能関係資料」のうち、湯浅の作成による放射能計算尺の仕様」に関する資料と、フランスと日本での特許に関連した資料を選んで示す。なお他に、特許の手続きに関連する多くの資料がある。

E.n	関連事項	資料内容	旧資料番号
E.1	仕様・使用法	[Règle à Calcul pour Mesures de Radioactivité.]	R-20003
		「ヘンミ 10 アイソトープ用計算尺説明書抄録」	R-20004
		[Mode d'emploi de la Règle à Calcul pour la Radioactivité de HEMMI.]	R-20001
E.2		《ヘンミ計算尺アイソトープ技術用説明書》	R-20010
E.3		計算尺の写真版とそのネガ	R-20021
E.4	特許関連	手紙 Yuasa →CNRS ('54/12.20), CNRS→Yuasa ('55/1.18) 特許証(仏)6 枚	R-20017
E.5		特許公報 (昭 33-8807) コピー, ヘンミよりの手紙 ('58/12.5)	R-20047

**K 国際学会関連資料**

1952年から30回以上にわたって出席した国際学会に関する資料は、学会毎に、論文要旨集、聴講メモ等の研究に関係がある資料、連絡等の雑資料等数多く遺されている。学会の《Proceedings》12部のうち5部がお茶の水女子大学附属図書館（T）に移管、7部が蔵書リスト（L）に含まれている。ここでは湯浅の関与が大きかった学会の抽出資料のみを挙げる。記号Ki（i=1,2, …）は、湯浅が出席した国際学会を、年代によって順序づけした番号である。

Ki	国際学会（名称・開催地・開催日）	内 容	旧資料番号
K 7	Congrès International de Physique Nucléaire, Paris, 1958, Juil.7~12	会議内容案内、報告者リスト, Joliot の開会の辞 等	K-00038
K 8	ブリュッセル万国国際展示会 Bruxelles, 1958	各国 Pavillon のパンフレット(仏 Pavillon 原子核部門展示の計画・準備関係資料、湯浅は展示責任者を務める)	K-00042 R-30006
K 24	Int. Conf. Nuclear Physics. Munich, 27/Aug.-1/Sep.1973	発表論文及び要旨下書き（湯浅）	K-00104 K-00105
K 27	Int.Conf. Few Body Prob. in Nuclear and- Particle Phys.Univ.Delhi.29/12,'75-3/1'76	発表論文要旨（Yuasa et al）. 他 招待講演原稿（湯浅）	K-00114 K-00116
K 31	Int.Conference on Nuclear Structure. Tokyo, 5-10/Sep. 1977 Sendai, 12,13/Sep. 1977	聴講メモ（一部抽出） 発表用論文 Proc.Int. Conf. on nuclear Structure-Contributed Papers. Proceedings of Sendai conference. 1977	K-00127 K-00128 (L) (L)
K 33	Int. Conf. Few Body Systems and Nucl. Forces. Gratz, Aug.1978	Proc. Int. Conf. Few Body Systems and Nuclear Forces.	(T)



## II-3. 文化活動関連資料

湯浅年子の広い文化活動に関連する資料を次の項目のもとに示す。

### P 文芸資料

### T 交流記録

#### P 文芸資料

ここでは湯浅自身の文芸活動に関連した資料を次のように区分けして示す。

- |                                 |                                       |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| <b>Pa</b> : 著作物関連の科学研究及び研究所関係資料 | <b>Pb</b> : 著作物関連の Joliot=Curie 家関係資料 |
| <b>Pc</b> : Pa, Pb 以外の著作物関連資料   | <b>Pd</b> : 刊行されていない試作・習作             |
| <b>Pe</b> : 講演原稿                | <b>Pf</b> : 湯浅年子の著作物に対する書評            |
| <b>Pg</b> : 詩歌資料                | <b>Pm</b> : スケッチ等                     |

刊行された湯浅の著作物はすべて I-3 著作リストに挙げてあるが、ここではそれらの刊行物に関連した原稿や参考資料を、Pa~Pf に挙げてある。ただし、資料のうちの手紙類は T-交流記録に、書籍や雑誌等、間接的な参考資料は、II-4 の L 蔵書リストや II-5 ジョリオ=キュリー家関係資料の中に含める。

著作リストにある印刷物やそのコピーはここには含めない。関連著作物は、著作リストの記号 \*Aa.n, \*Ab.n, …で示す。資料内容欄で、☆印は湯浅による草稿である。複数残る草稿のうち、のちに刊行された文章に極似した原稿は、ここには含めない。括弧はそれぞれ次の刊行物に対応している。

『…』は単行本，《…》は冊子・パンフレット，[…] は欧文書，「…」は和文書，〈…〉は雑誌，新聞等の定期刊行物を示している。

#### Pa : 著作物関連の科学研究及び研究所関係資料

Pa.n	関連著作	資料内容	年/月/日	旧資料番号
Pa.1	フランスの	☆原稿「研究所のことども」	1950	P-00032
Pa.2	研究と研究所	〈科学〉からの執筆依頼を受け、ジョリオに内容を諮る手紙。 その原稿：[Sur les recherches nucléaire et de l'énergie atomique], *Ad.18,19 [radio éléments artificieles, Zoe, 〈Atoms〉 (No.15, '47) の抜き書き.	1953/2.8	P-00041 P-00040
Pa.3		構想メモ「フランスの原子物理学研究について」		P-00038
Pa.4		☆「フランスの原子力並びに原子核研究について」		”

#### Pb : 著作物関連の Joliot=Curie 家関係資料

湯浅の生涯は、すべての面で Joliot-Curie 家と密接に関連していて、Joliot-Curie 家に関する資料は数多く残されている。それらは参考資料として II-5 ジョリオ=キュリー家関係資料に挙げてある。ここでは湯浅の著作物刊行に直接関連する資料のみを挙げる。

Pb.n	関連著作	資料内容 ☆(関連原稿)	年/月.日	旧資料番号
Pb.1		「F.Joliot 教授 50 歳誕辰の日にあたりて」構想メモ	1950/5.1	C-00080
Pb.2	*Ad.20	☆「日本の科学者へ」F.Joliot=Curie (仏文及び和訳原稿)	1953	C-00011
Pb.3	*Ad.22	☆「イレーヌ・ジョリオ＝キュリー夫人を悼みて」	1956	C-00034
Pb.4		☆「Joliot 教授について」, (原稿下書き) 日本物理学会からの依頼	1958/9.9	C-00028
Pb.5		☆「Joliot 教授を偲んで」, (原稿下書き) 日本学術会議から依頼	1958/8.30	C-00027
Pb.6	*Ad.24	☆「Joliot 教授を偲んで」(原稿 仏文及び和文)	1958/10	C-00030
Pb.7		☆「科学者としてのジョリオ＝キュリー先生の思い出」	1962	C-00031
Pb.9	*Ab.3『F. ジョ リオ＝キュリー』	「F・ジョリオ＝キュリー」日本版刊行のための連絡書簡 P. Biquard より 5 通		P-追 2
Pb.10	出版関連	☆[Préface pour l'édition Japonaise] par P.Biquard と湯浅の訳文	1969/10	P-10043
Pb.11		『ジョリオ＝キュリー』の本の扉デザイン案及び挿し絵デザイン原画		P-10054

## Pc : Pa, Pb 以外の著作物関連資料

Pc.n	関連著作物	内容	年/月.日	旧資料番号
Pc.1	*Aa.3	Edward Branly に関する〈Paris Soir〉の記事と講演記録	1940/3	P-00040
Pc.2		Maine de Biran の軌跡メモ (手紙の裏に)	1944/5	W-00040
Pc.3	*Ac.3	☆「私の学生の頃」(「“離脱”の詩」原稿, 途中まで)	1947	P-00028
Pc.4	*Aa.4	M.Robert 氏の『フランスに思ふ』への推薦文—仏文原稿—		P-00040
Pc.5	*Ad.49	☆「E.Fermi」訳の「序に代えて」Laberrigues, 湯浅(及び和訳原稿)	1973/1	P-00034
Pc.6	*Ad.56	「身辺随想—ノイズ教授の論文に関してなど」		P-00035
Pc.7	*Ad.59	「Lacassagne」関連写真		P-00010
Pc.8		「Lacassagne」構想メモ 2 枚		P-00047
Pc.9	*Aa.8	「(パリ 30 年) 1. パンテオンの横顔」手書き原稿		P-追 5
Pc.10		メモ「5 月 6 日事変のもたらしたものと—特に大学科学教育に」		P-00046
Pc.11		☆5 月革命に関する原稿, 及び新聞切り抜き「プロスペロの兄弟」		P-00028
Pc.12		パリ随想の構想, 「あとがき」構想		P-00045
Pc.13	*Aa.9	ゲーノー氏のことなど, 「光と蔭と」構想		P-00045
Pc.14		森有正講演「日本におけるキリスト教の歴史」		P-10032
Pc.15		メモ「森有正講演」のテープをききながら		”
Pc.16	手工芸考関連	ゴブラン織り関係写真 11 枚 絵はがき: 3 枚, レース 4 枚, ゴ ブラン織り 7 枚, 陶器 3 枚, 写真 Charles le Buran 像		P-00016
Pc.17		尾形乾山, 蛭川式胤及び他に関するメモ		P-00046
Pc.18	*Aa.10	J.ゲーノーの講演記録〈アカデミー・フランセーズ〉	1978	P-00024
Pc.19		☆「光と蔭と—ジャン・ゲーノー氏を悼む他」	1979	P-00036
Pc.20		☆原稿コピー「日本訪問記最終章」(他)		P-00036

## Pd : 刊行されていない (あるいは刊行物不明の) 試作・習作

Pd.n	関連事項	資料内容	年/月.日	旧資料番号
Pd.1	渡仏前の	習作 [La première prière de cette année]	1938	R-00007
Pd.2	仏文習作他	習作 [L'esprit Japonaise]	1938?	P-00094
Pd.3		習作 [Une conversation entre une jeune homme et sa ...] 他	1938?	”
Pd.4		習作 [Sur "le garden printanier"(占春園)] 他	1938?	”
Pd.5		習作 [”tuke sute-shi ..... par Onoe Saishû]	1938?	”
Pd.6		習作 [De la conférence de M.Clorde Farele]		P-10027
Pd.7	パリで	「石仏」	1942	P-10021
Pd.8	ベルリン滞在中	[Souvenirs de mon séjour en France comme étudiant auprès de M. et Mme Joliot-Curie.]	1945	P-00040
Pd.9		「戦時下の仏国及び独国の一般状況」	1945	P-00028
Pd.10		「時計をとられた話, 馬を貰った話」 9 枚	1945	”
Pd.11		「倫敦放送 5 月 8 日午後 8 時, 9 日午前 9 時」	1945	”
Pd.12		感想文 (日記) 5 月 9 日及び 11 日	1945	”
Pd.13	再渡仏後	[Mes impressions du Japon]	1952	P-10026
Pd.14		「再び接したフランス人のモラルについて」	1949	P-00033
Pd.15		コレット「葡萄の蔓」訳文と「ユニヴェルセルな愁」	1949,1954	P-00033

Pd.n	関連事項	資料内容	年/月.日	旧資料番号
Pd.16		「湯川教授をパリに迎えて」(手紙形式-共同通信秋吉勝広宛)		P-10037
Pd.17		仏文 湯川博士紹介		P-10038
Pd.18		「折にふれて」	1959?	P-00033
Pd.19		「オルセー便り」	1961	P-00033
Pd.20		「科学と人類平和」(刊行不明)	1970?	P-00037
Pd.21		「パリ 2000 年祭のことなど」(手紙下書きに)		P-00035
Pd.22	日本紹介文	仏文 [wakaonna (June Femme)]		P-10024
Pd.23		[Aspect général de la vie intellectuelle et spirituelle du Japon de notre temps]		P-10028
Pd.24		仏文 広重版画紹介文		P-10029
Pd.25		仏文 「Explication de l'Estampe」 広重木版画について		P-10030
Pd.26		霊鑑寺門跡由緒書とその仏訳文		P-10031
Pd.27		仏訳 [Takekurabe]		N-00057
Pd.28		仏文 [Fleurs] (生け花紹介)		N-00061
Pd.29	推薦文	★推薦文 朝永振一郎著「スピンはめぐる」の帯, 原稿及び帯コピー		P-00044
Pd.30	報告文 (1943~1944)	「フランスを中心として見たる欧羅巴並びに米国に於ける最近物理学研究情勢について」第2回報告(10枚)	1943/7.25	P-00052
Pd.31		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の現況について, 第2回報告第3章フランスに於ける研究状況」(10枚)	1943/8.30	P-00052
Pd.32		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の現況について」第3回報告 付録(1)(23枚)		P-00052
Pd.33		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の現況について」第4回報告(表紙), 第5回報告(表紙) 付録(1)注目すべき最近の報告 No.1~18(18枚)No.12~19(8枚) 付録(2)1940年4月までにフランスに到着せる研究報告(6枚)		P-00052
Pd.34		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の近況について」第8回報告, 12枚 (No.1~3, No.1~8)	1944/1.31	P-00052
Pd.35		付録1 最近注目すべき研究(16枚)		P-00052
Pd.36		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の近況について」第11回報告(18枚, 本文10頁, 付録(2)7頁)	1944/4.24	P-00052
Pd.37		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の現況について」(15枚)(文献32枚)		P-00052
Pd.38		「仏国を中心として見たる欧州並びに米国に於ける現代物理学研究の現況について」(14枚)	1946/2.9	P-00052

Pe: 講演原稿 (学会講演等、研究に関するものはII-2に記載)

Pe.n	時期	内容	年/月.日	旧資料番号
Pe.1	1946~1948	「第2次世界大戦下の欧州情勢について」(東京文理科大学にて)	1946/2.22	P-00049
Pe.2	帰国中	「フランスのラジウム研究所並びに原子核研究所における最近の研究について」(順天堂病院にて)	1946/10.12	P-00032
Pe.3		「生物学及び医学研究のための指示剤としての放射性物質について」(東京女子医学専門学校にて)	1947/2	P-00049
Pe.4		「Joliot=Curie 学派と原子核研究」(東京大学法学部教室にて)	1948/6.2	P-00049
Pe.5	一時帰国中	「実験物理と理論物理の関係」(大阪大学物理センターにて)	1977/8.25	P-00050
Pe.6		「実験物理の役割」(筑波大学会館ホールにて)	1977/9.26	〃
Pe.7		「フランスに32年滞在して」日本語レジュメ(日仏会館にて)	1977/9.19	P-00051
Pe.8		「Mon séjour de 32 ans en France」(日仏理工科会誌用仏語原稿)		〃
Pe.9	1979パリで	カトリックセンターにおける講演及び討論, その要旨	1979/5.20	P-00050

Pf: 湯浅年子の著作物に対する書評

Pf.n	書籍名	書評題名と掲載紙	年/月.日	旧資料番号
Pf.1	*Aa.5『パリ随想』	「パリ随想」(アテネ文庫)への書評	1950	
Pf.2	*Aa.8『パリ随想』	「にじむ異国人の哀愁 キュリー門下に学んだ日々」		P-10127
Pf.3		「科学者の目と詩情と」<朝日新聞>	1973/7.30	P-10128
Pf.4		「厳しい自己検証と自由な精神の独白」新倉俊一		P-追10

## Pf：湯浅の著作物に対する書評

Pf.n	書籍名	書評題名と掲載紙	年/月/日	旧資料番号
Pf.5	*Aa.9 『続パリ随想』	「深み増した人生の省察」及び〈みすず書房新刊案内〉		P-10129
Pf.6		「私の読んだ本」 吉利和 Medical VIEW/9	1982/8	P-10130
Pf.7	*Aa.10『パリ随想 3』	「あらわに突き出した知性」掲載誌執筆者年月不明		P-10131
Pf.8	*Aa.8-10	中村弓子〈幼児の教育〉		P-追 11

## Pg：詩歌資料

短歌，詩，俳句等は，ノート，手帳，日記など随所に書き記されている。それらの中で，紙片にメモとして旧資料目録に挙げられていたもの等や，パリ短歌会の刷り物等をここに示す。

また，湯浅自身により，ある程度まとめてあった詩歌ノート，自作短歌を墨書した色紙等のコピーが挙げてある。なお，作品の全容を示すものとして，見出されているすべての短歌・俳句・詩を年代順に収録した『湯浅年子 短歌・俳句・詩 集録』（山崎編）を公開資料としてある。

Pg.n	作成時期	内容（「……」，「……」は湯浅の作）	年/月/日	旧資料番号
Pg.1	メモ等に散	仏語詩 [Il faut considerer la fin, ……] (1枚の紙に)	1938	P-00094
Pg.2	見する短歌	仏語詩 [La Cerise Rouge]〈あてね 11号〉(日仏アテネ校友会会報)	1939/12	P-10086
Pg.3		(ノートの中に3首)「さんざしの…，ちちのみの…，父まさば…」	1941	N-00002
Pg.4		短歌一母みまかりぬ	1945/7	(番号なし)
Pg.5		短歌1首('51 8/7 付け手紙の片側に Antony として)「うすぐもる…」	1951	P-10022
Pg.6		投稿歌下書き '56 (川波の…，ひるがほの…，亡き母の…)	1956	P-00028
Pg.7		投稿歌下書き (はてもなく…，大き窓の…，山小屋は…，かくて我…，まなかひの…)	1957	(番号なし)
Pg.8		短歌8~9首—Seysssel に旅して— (ホテルの名刺に)	1957/8	P-10022
Pg.9		短歌1首(ガイドブック le Basilique de VEZELAY 裏表紙に)「Cusin 川の…」	1959	P-10048
Pg.10		詩 Howell 訪問 — 「何か悪魔の仕事が……」	1959	P-10049
Pg.11		短歌1首 (スケッチブックの表紙に) — 「地下鉄の…」	1960	P-10022
Pg.12		短歌1首 (友人よりの'62 12/18 付け手紙の表に)「手にとりて…」	1962	P-10057
Pg.13		短歌6首—恩師 Joliot 先生を想いて(ヴァンチラタールの…，……)		(番号なし)
Pg.14		仏語詩— [Exilée seul, loin du pays où je suis née. ……]	196?	P-10025
Pg.15		(ノート最終頁に)「おろかしき…，一筋に…，ここに…」		N-00006
Pg.16		短歌数首 (「André Mouroi の最後の作」の原稿に)—「葛の花…」	1967	P-10058
Pg.17	パリ短歌会	パリ短歌会の誕生 (日仏通信) — 「歩みつつ…」	1943/6.23	P-00082
Pg.18	資料	パリ短歌会 7月例会詠草	1943/7	P-00083
Pg.19		パリ短歌会 8月例会詠草「物思ひて…，はるかなる母の…」	1943/8	〃
Pg.20		パリ短歌会 9月例会詠草「左の足…，ふくらはぎの…」	1943/9	〃
Pg.21		パリ短歌会 10月例会詠草下書き	1943/10	P-00084
Pg.22		パリ短歌会 10月例会詠草「果樹園に…，もの皆の…，ふりつぎし…」	1943	〃
Pg.23		パリ短歌会 10月例会得点結果報告	1943	〃
Pg.24		パリ短歌会 11月例会詠草「大輪の菊…」	1943	P-00085
Pg.25		パリ短歌会 12月例会詠草「かにかくに食道楽…，恐ろしき虚無…」	1944	〃
Pg.26		パリ短歌会 1月例会詠草「幾度か…，Je n'ai pas vécu …」	1944	P-00086
Pg.27		パリ短歌会 2月例会詠草「交わりを…，一つ一つ…」	1944	P-00087
Pg.28		パリ短歌会 3月例会詠草「Boum va gagner! と…，群がりて…」	1944	〃
Pg.29		パリ短歌会 3月例会雑詠「菊人形…，思ひ切り…」	1944	〃
Pg.30		パリ短歌会 4月例会詠草「目路はるか…，風がきて…」	1944	P-00088
Pg.31		パリ短歌会 5月例会詠草「風ふけば…，やるかたの…」	1944	〃
Pg.32		パリ短歌会 5月例会詠草	1944	P-10045
Pg.33		パリ短歌会 6月例会詠草「晴れし空…，夜を徹し…」	1944	P-00088
Pg.34		パリ短歌会詠草 (千葉公使夫妻帰朝に際して)「たたなはる…」	1944	P-10046
Pg.35		『まろにえ』の草稿 (「心」，「季」，……)	1944	P-00093
		「出—いずる気持ち，はなるる心—」『まろにえ第1歌集』7枚		AC.1
Pg.36		「湯浅年子 詩歌集」ノート (姪の光子・Geronimi 氏より寄贈)		追 P-9



Pg.n	作成時期	内容 (「……」, [……] は湯浅の作)	年/月/日
Pg.37	短歌色紙コピー 6枚 日本で一再渡仏を前に教え子たちとの送別会で、湯浅自作短歌から好きな歌を選ばせ、色紙に墨書して贈った。		1948/12
Pg.38	[湯浅年子 短歌・俳句・詩 集録]		



一九四二年七月 日本の公園に似たたすまいに亡き父を偲ぶ  
かにかくに一人来遊ふ公園の  
芝草に咲ける雑草(あらくさ)の花



一九三〇年代 初めての北海道、月寒を歩みつ  
人去りてはるかに透る雲雀の声  
ききつつ臥せは草の香つよき



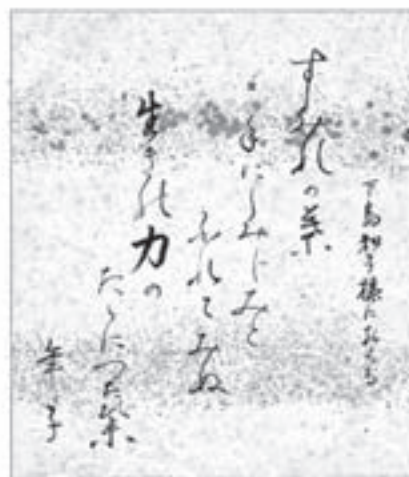
一九四三年八月早朝 人影なきルクサンブルー公園を通るに  
ものおもひて一夜をいねす来しわれに  
ふきあかりふきあかる水の幽(しず)けさ



一九四三年七月 きびしき増すバリー。しきりに故国を思う。  
地に伏して泣かまくほしとおもふ日も  
常のことにふるまひてをり



一九四四年三月 誕生日を迎えし母をはるかに想いつつ  
むらさきのすみれを小さき壺にさし  
母と二人で今日を過くさむ



一九四四年三月 辛さを抱えつつ研究所より帰り来て  
すみの葉手にししみじみとふれてみぬ  
生きの力のた、につたひ来



## Pm : スケッチ等

湯浅資料のなかに、小型の写生帖 11 冊と何枚かの画紙があり、湯浅自身が描いたスケッチやデッサン等が、130 点ほど含まれている。公開する 123 点のインデックス画像とその分類番号は下記の通りである。写生帖每（中にはバラの画紙も含まれているが）に、ほぼ描かれた順番に番号付けして一覧表としてある。なお、主なスケッチをとりあげ、それに関連した当時の湯浅自身の文章や短歌を添えて、解説をほどこした『湯浅年子スケッチ集』（山崎編）も、公開資料としてある。

記号 pm.n (pm 1, pm 2…等) は、資料の整理に際して写生帖每（中にはバラの画紙も含まれているが）に付けられた分類記号である。作品毎には、pmn-i (pm 1-1, pm 2-3 等) の記号を付け、ほぼ描かれた順番に番号付けをしてある。描きかけのもの、湯浅の筆によらないものは取り上げていない。

pm.	n	内容 ((pm.n-s) は作品記号)	製作年	旧資料番号
pm.1	1~18	写生帖 (風景水彩 11, 鉛筆 3; 自画像; 他にクロッキー, デッサン等). パリ到着後, ドイツ軍の占領下に入って不安定な状況におかれていた頃.	1940	P-10153
pm.2	1~11	画紙及び写生帖 (風景水彩 8, 他に人物等) 研究が再開され, キュリー夫人のお墓に詣で, 決意を新たにした頃.	1940	P-10152-1
pm.3	1~19	写生帖 <pm.3-1~19> (風景水彩 17, 鉛筆 2) 父の訃報に心痛を抱えていたが, バカンスにはパリを離れて, 心を静めることも.	1941~42	P-10154
pm.4	1~6	画紙 6 枚 <pm.4-1~6> (水彩画風景 6, 他) 日本帰国中, 及びフランスへ再渡航の船中で.	1947~49	P-10163 P-10152-2
pm.5	1~16	写生帖 <pm.5-16> (風景水彩 14, ペン 1, 鉛筆 1, 他クロッキー等) フランスの戦後生活にも慣れて.	1950~51	P-10156
pm.6	1~13	写生帖 (風景水彩 8, 鉛筆 1; ペン 4) 充実した研究生活.	1953	P-10155
pm.7	1~7	写生帖 (風景水彩 5, 鉛筆 1, デッサン 1) お茶大退職の頃.	1955	P-10158
pm.8	1~16	写生帖 (風景水彩 8, 鉛筆 1; デッサン 7 等). 研究は大いに進んでいたが, ジョリオ夫人を始め, 人々との別れに, また人生の意義に心を痛めることも.	1956~57	P-10159
pm.9	1~14	写生帖 <pm.9-1~14> (風景水彩 7; 自画像 1; デッサン 4; 花 2; 等) ジョリオ教授との別れ, 研究所の移転, ノート「死は近きにあり」等々.	1957~62	P-10160
pm.10	1~5	写生帖及び画紙 <pm.10-1~5> (花, 窓風景等) 病後.	1976	P-10161

**スケッチの画像** カラー版(123点)はお茶の水女子大学デジタルアーカイブズ～先駆的女性研究者データベース～「湯浅年子」の項を参照のこと。(http://archives.cf.ocha.ac.jp/)



Pm 1-1

1940年3月15日 研究所に入ることを断られた帰り、デッサン紙と絵具と鉛筆を買ってモンソーリの公園で写生をする。



Pm 1-3

1940年 教会スケッチ



Pm 1-5

1940年3月22日 I氏の車で、Kさんと4人でヴェルサイユへ行く。



Pm 1-13  
1940年5月26日



Pm 1-17  
1940年 自画像



Pm 2-1  
1940年11月1日 ソーの墓地へ行き、マダム・ピエール＝キュリーの墓に白いカーネーションとバラを捧げて祈った。



Pm 2-5  
1940年12月1日 パール・ラシェーズの墓地。ミュッセの墓。



Pm 3-2  
1941年



Pm 3-5  
1941年夏



Pm 3-15  
1942年8月28日 友人とノルマンディー半島のヴィモーティエにて過ごす。



Pm 3-16  
1942年8月24日 友人とノルマンディー半島のヴィモーティエにて過ごす。



Pm 5-3  
1951年 ルクサンプール庭園  
お茶の水女子大学  
ジェンダー研究センター編



Pm 6-11

1953年4月 オーヴェル・シュル・オワズで。ファン・ゴッホの墓。



Pm 7-1

1955年4月



Pm 8-2

1956年8月21日 ブルボン・ランシイの近郊で



Pm 9-1

1957年8月6日 フィール渓谷



Pm 9-6

1958年6月21日 自画像



Pm 9-11

1959年3月31日 ヴェズレーにて。



Pm 9-12

1957年



Pm 10-4

1976年4月20日



## T 交流記録

湯浅と多くの人々との間に交わされた交流記録は、すでにII-1のW-社会環境資料、II-2の研究関連資料、またII-3のP文芸資料に多く採り入れられている。ここではそれらの範疇に入り難い交流の記録を取り上げる。

湯浅宛の多くの手紙類は、資料整理の過程で、親族、先輩、友人、後輩等には、可能な限り返却されていて、現在保管されているのは、偏った僅かなものに過ぎない。一方で、湯浅が多くの人々に宛てて書いた手紙の中で、湯浅他界後に資料としてお茶の水女子大学・ジェンダー研究センターに寄贈された貴重な手紙がある。

それらを以下のように分類して示す。

Tc：ジョリオ=キュリー家、研究所関係    Tb：ベルリンで    Ty：保井コノとの交換書簡  
Tm：松井資料    Tn：女高師同級生との回覧文

### Tc：ジョリオ=キュリー家、研究所関係

Tc.n	状況	差出人→宛先	備考	年/月/日	旧資料番号
Tc.1	1940	Ministère des affaires étrangères→F.Joliot	湯浅紹介状	1940/3.9	C-00071
Tc.2	~1944	Office Natinal des Université→湯浅	P.Langevin 訪問の日時	1940/3.26	〃
Tc.3		P.Langevin→湯浅	F.Joliot 訪問の日時	1940/3.28	〃
Tc.4		P.Langevin→Berthelot	湯浅への伝言を含む。	1941/5.17	〃
Tc.5		湯浅→F.Joliot(コピー(Curie 資料館所蔵))	学位審査の感謝と心情を綴る	1943/12.7	※
Tc.6		F.Joliot→Consul(日本総領事)(コピー)	湯浅学位取得に際し、領事かの手紙に対する F.Joliot の返事	1943/12.21	C-00076
Tc.7		P.Honnora→湯浅	学位論文印刷費援助の件	1944/6.8	C-00076
Tc.8	帰国中	F.Joliot→湯浅(東京)	湯浅の再渡仏 CNRS に申請中	1947/11.5	C-00096
Tc.9		結婚通知(Hélène Joliot et Michel Langevin)		1948/11.4	C-00083
Tc.10	1950 ~1961	湯浅→F.Joliot...	1.いつまで滞在できるか。2.βソースに正電荷粒子を見出した件。		C-00095
Tc.11		(同一紙に返事) …→湯浅 湯浅→F.Joliot... …→湯浅	→滞在続行を願っている。 M.Weyman の招きに応じなかった。 →それでよかったと思う。	1951/? 1952/10.31	C-00097
Tc.12		湯浅→F.Joliot…→湯浅→P.Savel	小田氏紹介と研究所訪問仲介	1955/5.4	C-00074
Tc.13		湯浅→F.Joliot... …→湯浅	ビキニに関する小論を書いた。 →全面的に賛成	1955/5.6	〃
Tc.14		F.Joliot→湯浅	湯浅の計算尺についての考えに同意、会社に手紙を書こう。	1955/5.26	C-00074
Tc.15		F.Joliot(入院中)→湯浅	お見舞いに感謝。厳しい治療にえている。計算尺は? 椿のこと	1955/10.23	C-00073
Tc.16		F.Joliot→湯浅	計算尺契約についての助言。	1955/10.28	R-20002
Tc.17		F.Joliot(名刺に)→湯浅	新年の祝詞	1956/1.17	C-00075
Tc.18		F.Joliot→湯浅	イレーヌへの心遣いに感謝。23日自宅へお出で下さい。	1956/4.20	〃
Tc.19		F.Joliot(Courshevel 滞在中)→湯浅	休養中。主任研究員の件で、パリに戻ってから家に来てほしい。	1957/2.24	C-00075
Tc.20		F.Joliot→湯浅	霧箱に関する仕事の発表に賛成	1957/3.1	C-00075
Tc.21		湯浅→F.Joliot... …→湯浅(&Corbé)	Corbé と共著の論文について。 →全く同意。	1957	〃
Tc.22		F.Joliot(Bretagne 滞在中)→湯浅	主任研究員に任命されると思う。 よい仕事には休養も大切。	1957/7.8	C-00073

Tc.n	状況	差出人→宛先	備考	年/月.日	旧資料番号
Tc.23		F.Joliot→湯浅	Congrés に出した論文は興味深い。Heubrain 氏と討論を。	1958/7.7	C-00075
Tc.24		結婚通知 (Pierre Joliot et Ann Gricouroff)		1961/1.7	C-00083

## Tb：ベルリン時代関連

Tb.n	状況	差出人→宛先	年/月.日	旧資料番号
Tb.1	研究所へ通	Yuasa→ Prof. Gerthsen (下書き)	1945/4.19	W-00058
Tb.2	えなくなっ	手紙 Stude 夫人 (ドイツでの宿主) →Yuasa	1945/4.19	W-00059
Tb.3	て以降	手紙 Stude 夫人 →Yuasa	1960/5.3	”
Tb.4		手紙 ドイツ滞在中の友人横川氏 (Stude 夫人の手紙と) →湯浅	1960/4.20	W-00060
Tb.5		手紙 湯浅→Stude 夫人 (控 独語及び 仏語)	1960/5.20	W-00061

## Ty：保井コノとの交換書簡

保井コノは、湯浅の女高師学生以来の恩師で、日本女性初の理学博士となった生物学者である。湯浅は研究生活を左右する大きな悩みを一度ならず保井に相談している。再渡仏後、お茶の水女子大学からの出張期限が切れて、帰国するか、退職してフランスに留まるか、大きな決断を迫られたとき、保井との間に交わされた手紙が、保井の遺品と湯浅資料の中に遺されていた。それ以後もお互いに研究の周辺を伝えあう心暖かい交流が、1971年保井が他界するまで続けられた。

	保井コノ→湯浅年子 (湯浅資料より)	湯浅年子→保井コノ (保井の遺品より)
湯浅のお茶大退職に際して	1952/5～1955/9 7通	1951/8～1955/8 5通 (内 はがき1通) (ただし、不明なもの、失われたものが何通かあると思われる。)
湯浅退職後	1955/12～1967/6 23通 (内 はがき1通) 1968/3～1971/9 5通 (保井コノの妹、保井正子の筆による)	1957/1～1971/2 32通 (内 はがき23通) 1971/4～1971/8 5通 保井正子宛



## Tm：松井資料

次の手紙を松井資料として保存する。

### 松井巻之助に宛てた湯浅の手紙（1967～1979）84 通

（内訳…封書：34 通，航空書簡：37 通，絵葉書：13 通）

松井巻之助氏は、みすず書房の編集者として、湯浅の著書『パリ随想』3 部作の出版を始め、湯浅の文芸活動や、学術文化の活動に深い係わりを持っていた。松井氏は、東京文理科大学物理学科で湯浅の4 年後輩に当たり、原子核実験を専攻。みすず書房においては、『朝永振一郎著作集』を始めとする科学書を刊行、また朝永博士を会長とする「科学と技術の広場」の会を作り、科学者たちの交流に努めていて、湯浅の1967 年の帰国以降、湯浅の学術文化の交流活動にとって、欠かせない存在であった。松井氏の没後、松井氏に宛てた湯浅の手紙が、松井ふさ子夫人によってお茶の水女子大学ジェンダー研究センターに寄贈された。

## Tn：女高師同級生との回覧文

湯浅と東京女子高等師範の同級生との間には、心暖まる交流が続いていたが、1960 年から回覧文の形での交流が始まり、それは1979 年まで続いた。湯浅没後の1981 年、回覧文等をまとめて湯浅を偲ぶ『一すぢの葦』が刊行されたが、その際、「湯浅年子さんからの便り」としてそれらの手紙が寄贈された。

回覧文：第1 回便（1960 年10 月2 日） 第14 回便（1977 年5 月12 日）計14 通

第15 回便（1979 年6 月3 日） 3 枚の写真にそれぞれ裏書きして回文としたもの

関連文：回覧文をまとめる案を中林氏（他界した同級生の夫）に託した手紙（1975 年10 月20 日）

## Ⅱ-4. 写真・記録メディア類・蔵書リスト

遺されていた写真や録音・録画テープ等をここに資料として挙げる。また、蔵書リストを掲載する。

### V 写真

### J 記録メディア類

### L 蔵書リスト

## V 写真

### V1：湯浅本人の写真及び本人を含む写真

展観用アルバム：Ⅰ；1909~1958 の写真より

展観用アルバム：Ⅱ；1959~1973 の写真より

展観用アルバム：Ⅲ；1973~1980 の写真より

DVD ディスク 展観用アルバム Ⅰ Ⅱ Ⅲ に含まれる各写真の JPEG 画像データ

### V2：記念アルバム M 1974 年，退官記念に原子核研究所から贈られたアルバム

残された写真の中から，ご遺族の了解を得た 149 枚を公開する。(番号 002~150)

公開用の写真 (149 枚) は，「お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ～先駆的女性研究者データベース～「湯浅年子」の項」を参照のこと。(http://archives.cf.ocha.ac.jp/)



002



003



004



005



006



007



008



009



010



011



012



013



014



015



016



017



018



019



020



021



022



023



024



025



026



027



028



029



030



031



032



033



034



035



036



037



038



039



040



041



042



043



044



045



046



047



048



049



050



051



052



053



054



055



056



057



058



059



060



061



062



063



064



065



066



067



068



069



070



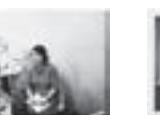
071



072



073



074



075



076



077



078



079



080



081



082



083



084



085



086



087



088



089



090



091



092



093



094



095



096



097



098



099



100



101



102



103



104



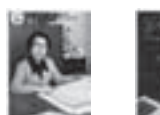
105



106



107



108



109



110



番号	資料名	撮影年月日
	湯浅氏自らがつけたタイトルが判明しているものは、それを「」で記入。	撮影日が特定できる写真についてのみ、年月日を記入。
002	愛日小学校卒業記念写真	
003	東京女高師附属高等女学校（お茶の水高女）	高校入学の頃
004	東京女子高等師範学校入学の頃	1927年頃
005	パスポートの写真	1939年頃
006	東京文理科大学物理学科卒業研究 アンチモン原子スペクトル測定中	1933年
007	ジョリオ教授邸で テニス着姿のイレーヌ・ジョリオ夫人と（ジョリオ教授撮影）	1941年
008	ジョリオ教授邸で（ジョリオ教授撮影）	1941年
009	フレデリック・ジョリオ＝キュリー 「マドモアゼル湯浅へ コレジ・ド・フランスでの素晴らしい研究の思い出に」	1941年

番号	資料名	撮影年月日
010	イレーヌ・ジョリオ＝キュリー 「マドモアゼル湯浅へ 良き思い出を込めて」	1941年
011	コレジ・ド・フランスの屋上で	1941年頃
012	ムドン ロダンの家の裏のバリを望む丘で	1943年8月
013	パストゥールの像の前で	1942年頃
014	海軍武官細谷氏が留学生一同をパリ郊外に招待 レストラン Coc Hardy にて	1942年8月
015	学位論文提出の直後 宿舍フォワイエの屋上で	1943年
016	宿舍フォワイエの屋上で	1943年6月頃
017	東京女高師で 裕元にキュリー夫人のプローチ	1946年
018	東京女高師物理 実験室で	1946年頃
019	東京女高師構内で	1945年9月
020	東京女高師屋上で	1947年頃
021	助手であった加藤清江氏と	1946年頃
022	学生との昼食会 徽音堂屋上で	1948年頃



番号	資料名	撮影年月日
023	講義風景 東京女高師物理階段教室で	1948年頃
024	東京女高師構内で	1945年9月
025	文理大下田臨海実験所へ物理科学生と遠足の折	1948年6月
026	お誕生会とクリスマス兼ねて物理科学生と机上にマダム・キュリーの写真 黒板にフランス語の詩	1947年12月
027	德音祭での講演	1948年11月
028	運動場で 阿武喜美子先生や理科学生達と	1946年頃
029	渡仏を前に物理教官室での送別会	1949年2月
030	担任であった昭和24年卒物理科学生との渡仏を前にした送別会 学生の一人ずつに自作短歌の自筆の色紙を贈った 大山寮で	1948年12月21日
031	ミレーのアトリエを訪れて	1950年4月
032	湯川秀樹教授夫妻(ノーベル賞受賞後パリに立ち寄った)等と	1949年
033	ルクサンブル公園で	1952年頃
034	コレジ・ド・フランス構内 CHAMPOLLIONの像の前で	1953年8月
035	$\beta$ ・ $\gamma$ 放射能に関する国際学会でアムステルダムを訪ねた折	1952年9月
036	タイトルなし	不明
037	原子力開発調査(藤岡ミッション)のために来仏した藤岡由夫教授(左端)等と	1955年
038	荒木源太郎氏とルクサンブルで	1955年
039	装置を前に	1960年頃
040	実験室 第50ビーム・チャンネルの前で	1955年11月
041	F・ジョリオ教授 伏見康治教授と	1955年
042	コレジ・ド・フランス原子核物理化学研究所の研究者たち	1956年
043	アムステルダム国際会議	1956年
044	タイトルなし	1956~1958年頃
045	タイトルなし	1956~1958年頃
046	タイトルなし	1956~1958年頃
047	アルプス山麓で	1958年
048	ジョリオ教授死亡記事の前で	1958年8月
049	ジョリオ=キュリー夫妻のモニュメント(クチュリエール作 1964年建立) 人類への愛と貢献を象徴 基部に夫妻の横顔	
050	オルセー原子核研究所 研究棟前庭	1965年
051	オルセー原子核研究所を含むパリ大学南校全景	1960年代
052	オルセー原子核研究所研究棟の側面	1965年
053	自ら考案した圧力可変・自動自記ウィルソン霧箱の傍らで	1960年頃
054	プロバン泡箱装置の傍らで	1960年12月
055	建設中の加速器の傍らで 工具との打ち合わせ	1961年
056	共同研究者と	1966年
057	共同研究者E・ウラニー氏、F・レイド氏と	1965年頃
058	パリ 原子核国際会議 レセプション会場で	1962年9月
059	パリ 原子核国際会議 レセプション会場で	1964年7月
060	リヨン 軽核国際会議場で	1966年1月
061	リヨン 国際会議	1966年
062	パリの街角で	1964年頃
063	コレジ・ド・フランス キュリー夫妻の記念室で	1965年頃
064	オルセーの研究室で	1965年9月
065	ブルターニュ地方 薔薇の花崗岩の海岸で	1964年夏
066	ブルターニュ地方 ポール・ブランのゲーノー氏宅の一室で	1965年8月
067	ブルターニュで	1966年夏
068	ブルターニュで	1966年夏
069	東京 国際会議のため来日中 東京の街角で	1967年
070	東京 原子核国際会議のため帰国の折	1967年8月
071	東京 原子核国際会議のため帰国の折	1967年8月
072	帰国の折 インタビューを受ける	1967年8月

番号	資料名	撮影年月日
073	帰国の折 香川ミチ氏、大塚季子氏よりインタビューを受ける	1967年9月
074	お茶の水女子大学で特別講義	1967年9月
075	お茶の水女子大学で特別講義	1967年9月
076	京都大学科学研究所で 清水栄夫妻等と	1967年9月
077	東京国際会議の折 私的なエクスカージョンで京都大徳寺へ	1967年
078	東京国際会議の折 私的なエクスカージョンで日光へ	1967年
079	東京国際会議の折 私的なエクスカージョンで日光へ	1967年
080	東京女高師昭和24年物理卒のかつての教え子達と 第一ホテルの前で	1967年8月
081	東京女高師昭和6年卒同級生とのクラス会	1967年8月
082	作楽会クラス旅行 水谷年恵先生と	1967年8月
083	作楽会クラス旅行 かつての同級生と	1967年8月
084	京都駅で	1967年8月
085	親族と	1967年8月
086	善養寺へ墓参りの折	1967年8月
087	オルセー原子核研究所講義室	1970年
088	少数核子系国際会議で渡米 スタンフォード大学の加速装置のトンネル内で	1972年9月
089	ブルターニュ地方 トレブルダンで	1968年夏
090	La Cressoniereで	1970年
091	少数核子系国際会議で渡米 ロス・アンジェルスで	1972年9月
092	サロン・ド・メイで	1970年
093	シェブルーズの谷 ポール・ロワイアル寺院への散歩の折	1972年
094	親族をパリに迎えて	1968年12月
095	GifYvetteにおける研究会	1974年
096	国際会議ケベック	1974年9月
097	ブルターニュ	1974年
098	ブルターニュ トレブルダンで	1974年8月
099	アパートの自室で	1974年6月
100	研究所停年退職記念アルバムをジャン所長より贈られる	1974年
101	退職記念の品を研究所所員から贈られる	1974年
102	パリのカフェで	1975年
103	パリのレストランで	1974年
104	パリ郊外	1975年8月
105	伏見康治教授、森永晴彦教授と草原邸にて	1976年9月
106	伏見康治氏と	1976年
107	オルセーの研究室で	1975年頃
108	オルセーの研究室で	1975年頃
109	オルセーの研究室で	1975年頃
110	少数核子系国際会議で 印度デリーを訪れた折 印度大統領の招待を受ける	1975年12月
111	国際会議デリーで印度大統領夫妻と	1975年
112	日本政府より紫綬褒章を贈られる 授章式が行われた日本大使館の部屋	1976年
113	研究所で紫綬褒章受章を祝う集い	1976年
114	研究所で紫綬褒章受章を祝う集い	1976年
115	研究所で紫綬褒章受章を祝う集い	1976年
116	タイトルなし	1976年頃
117	タイトルなし	1976年頃
118	タイトルなし	1976年頃
119	大阪大学核物理センターで	1977年8月
120	大阪大学核物理センターで	1977年8月
121	東京理科大学でのプレシンポジウム	1977年9月
122	日光へのエクスカージョン	1977年9月
123	東北大学でのシンポジウム	1977年9月
124	原子核国際会議(東京)分科会で司会	1977年9月



番号	資料名	撮影年月日
125	名古屋で (市川芳彦氏撮影)	1977年9月
126	名古屋駅頭で	1977年9月
127	松井巻之助氏主催の「科学と技術のひろば」 座談会で朝永振一郎教授と談話 (松井巻之助氏撮影)	1977年9月
128	松井巻之助氏主催の「科学と技術のひろば」 座談会風景	1977年9月
129	日仏会館で講演	1977年9月
130	お茶の水女子大学で講演	1977年9月
131	お茶の水女子大学物理教室および桜蔭会主催 のレセプション (茗溪会館) で	1977年9月
132	桜蔭会諸姉 (久保、竹内、神谷、山口) およ び岡部昭彦氏と	1977年9月
133	帰仏の前に	1977年10月
134	滞在先の第一ホテルで	1977年9月
135	帰仏の日 羽田空港で	1977年10月
136	帰仏の日 羽田空港で	1977年10月
137	オルセーの原子核研究所前庭	1978年頃

番号	資料名	撮影年月日
138	加速器の傍らで	1978年頃
139	パカンス プルターニュ地方のトレブルダンで	1978年8月
140	オーストリア グラッツで 国際会議の折 レセプションの会場で	1978年9月
141	オーストリア グラッツで 国際会議の折 グラッツの街路上で	1978年9月
142	エクスカーションでグラッツ郊外を訪れた折 古い館の墓の前で	
143	オルセーの研究室で	1978年9月
144	研究室でNHKの取材を受ける	1978年6月
145	加速器の傍らで 共同研究者と	1978年
146	Brasserie Lilas の前で	1978年
147	柳父琢治教授と	1979年
148	オルセーの研究室で	1979年
149	1978年頃	1978年頃
150	パリ郊外のアントワーヌ・バクレル病院の前で	1979年

## J 記録メディア類

保管されている録音テープとビデオ・テープやDVDを一覧表として示す。

### J1: 録音テープ

S	内容	年/月.日	備考
J1.1	NHK インタビュー(東京) (録音テープ及びオープンリール)	1967/9.21	1999/6 市井敏夫氏寄贈
J1.2	少数粒子系国際会議 (デリー) 湯浅&Slaus	1975-1976	尾立晋祥氏録音・寄贈
J1.3	実験物理の役割, 他 (筑波大学)	1977/9.26	
J1.4	フランスに32年滞在して (日仏会館) (仏語他)	1977/9.19	坂井光夫氏寄贈
J1.5	科学と人生: 湯浅-伏見テレビ対談	1977/10.27	NHK 教育テレビ
J1.6	NHK テレビ・インタビュー (於オルセー)	1978/7.22	
J1.7 ~.11	日仏共同研究柳父資料: 湯浅⇄柳父電話記録	1975~79	柳父琢治氏寄贈

### J2: ビデオ・テープ及びDVD

S	内容	年/月.日	備考
J2.1	NHK テレビ・インタビュー (於オルセー)	1978/7.22	(β用) 及び (VHS)
J2.2	NHK テレビ・インタビュー (於オルセー)	1978/7.22	DVD (桑折範彦氏寄贈('08))
J2.3	少数粒子系国際会議 (Quebec '74; Delhi'75; Gratz'78 他)	1974~80	尾立晋祥氏撮影・寄贈

## L 蔵書リスト

ここでは湯浅がフランスの研究室と住居に持っていた印刷物のうち、資料整理を開始した段階で、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターに運ばれていたものを、以下の形に分類して表として示す。

L1 和文書籍	L1 a. 物理専門書	L1 b. 科学一般
	L1 c. 科学者	L1 d. 社会科学
	L1 e. 文芸, 歴史, 思想, 宗教, 実用	
	L2 a. 物理専門書	
	L2 c. 文芸, 社会, 実用, 他	
L2 欧文書籍	L2 b. 一般科学および科学者	
L3 和文雑誌等	L3 a. 物理関係誌, 報告書	L3 b. 一般科学雑誌
	L3 c. 一般雑誌	L3 d. 会誌, 同人誌, 報告, その他
L4 欧文雑誌等	L4 a. 物理専門雑誌	L4 b. 国際会議 proceedings
	L4 c. 科学雑誌	L4 d. 年次報告書
L5 欧文会誌, 会報, 連絡, 案内等	L5 a. Inst.de Physique, ORSAY	L5 b. Univ.de Paris-Sud, ORSAY
	L5 c. CNRS 関連	L5 d. Société Française de Physique
	L5 e. フランスの他大学関連, その他	L5 f. Saclay 及びフランスの原子力関連
	L5 g. ヨーロッパの物理関連	L5 h. U.S.A. の研究関連
	L5 i. 日本の研究所, 大学関連	L5 j. 研究者連合, 組合関連
L6 思想, 宗教, 平和運動関連雑誌等	L6 a. 雑誌	L6 b. 小冊子, その他

第I部の**著作リストI-3**に挙げた湯浅自身の執筆に係わる書籍はここには含めない。また小型の仏語辞書や英語辞書, ガイドブック等も省略する。

以下の分類表で、書籍の収蔵先, 移管先等を、以下の略号で示す。

**Z**: ジェンダー研究センターに収蔵されている書籍。また資料整理の過程で資料番号が附され、資料目録の該当箇所に入れられている書籍や雑誌・冊子も**Z**に含める。とくに**ジョリオ=キュリー家関係資料**に記載されている主な書籍等に関しては、書名, 冊子名等に続けて、その資料整理番号を記入しておく。(例: 【Ca.2】, 【Cb.15】等)

**T**: お茶の水女子大学附属図書館に寄贈された図書 (和文書籍 143 冊, 欧文書籍 165 冊)

**B**: お茶の水女子大学理学部物理教室に移管された図書 (物理学専門雑誌 約 850 部)

**X**: 図書の中には、記録のないもの, 散逸したもの, 資料整理の過程で個人に寄贈されたもの等がかなりあると思われるが、その中で判明している主な書名を、記号**X**のもとに挙げておく。

## L1：和文書籍

### L1a 物理専門書

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
Z	—	量子物理学 第1巻(4分冊中の2冊のみ)	T	荒木 源太郎	物理学への数学的序説(物理学大系)
	—	量子物理学 第2巻(2分冊中の1冊)		〃	原子論(近代物理学全書3)
	—	量子物理学 第3巻(3分冊揃い)		〃	量子力学(改訂版)
	—	量子物理学 第4巻(4分冊中の3冊)		〃	中間子理論
	—	量子物理学 第5巻(4分冊中の3冊)		〃	原子物理学
	—	量子物理学 第6巻(2分冊揃い)		木村 一治	原子核物理学実験(1)
	—	量子物理学 第7巻(3分冊揃い)		木庭 二郎	素粒子の一般的性質(核物理学講座)
	—	素粒子の研究 1		小林 稔	電気力学
	—	朝永振一郎論文集 1		武谷、坂田、中村	素粒子の本質(現代科学選書)
	藤岡 由夫	現代の物理学(岩波書店 1938)		早川 幸男	宇宙線
T	荒木 源太郎	素粒子		朝永 振一郎	スピンはめぐる(成熟期の量子力学)
	〃	古典力学		宮嶋 龍興	理論電磁気学(現代物理学大系第16巻)
	〃	量子力学		渡辺 慧	原子核理論の概観
	〃	物理学概論(3訂版)		マダム・キュリー	放射能 上巻

### L1b 科学一般

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
Z	—	橘藤雄先生論文集	T	エミール・ボレル	確率と生活
	田島 英三	原子核の話(自文堂新書 1947)		藤岡 由夫	物理学ノート I・II
	武谷 三男 編	死の灰(岩波新書)		〃	科学者と人生
	(民主主義科学協会誌)	科学者憲章(世界科学者連盟)(草樹社'54)		武谷 三男	科学者の心配
T	菊池 真一	写真化学		G.パラシュール(関根訳)	新しい科学的精神
	G.K.シュピッツァー他	放射性追跡子 実験技術		伏見、柳瀬	時間とは何か
	J.モノー(渡辺、村上訳)	偶然と必然		高林 武彦	量子論の発展史
	アルベール・グーザー(村岡訳)	原子力		石原 純 他	物理学者の眼(科学随筆全集)
	フィールツ(喜多、田村訳)	力学の発展史		朝永、野上 他	逆説としての現代
	吉川、他	ラジオアイソトープの医学的応用		W.ハイゼンベルグ(湯川他訳)	部分と全体
	朝永 振一郎	科学と科学者		ロベルト・ユンク(松井訳)	巨大機械
	山下 愛子	科学		大槻 虎男	聖書の植物
	—	欧米におけるアイソトープの工業利用(報告)		横山、山中	機械製図手本
	—	原子力年鑑 1957年版		J.ワトソン(江上、中村訳)	2重らせん
	—	日本の科学技術活動(日本科学技術振興財団)		橘 藤雄	熱の歴史
	I.アイザックラム(松井訳)	文化の中心としての科学		伏見康治、満枝	卵の実験
	ジュニオル・ゴージ(村岡訳)	星の一生		M.キュリー、ジョリオ夫妻	放射線と原子核
	杉本、山崎	産業における原子力の応用		沼野井 春雄	生命現象
	P.ピカール(和田訳)	超音波の話			

### L1c 科学者

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
T	セグレ	エンリコ・フェルミ伝	T	—	菊池正士 業績と追想
	ルース・ムーア	ニールス・ボーア		—	古谷健太郎先生遺稿集
	M.シャスコリスカヤ(高倉訳)	ジョリオ・キュリー伝		小谷 鉄冶	白雲去来 小谷鉄冶自伝
	西尾 編	アインシュタイン研究		—	橘藤雄先生論文集
	オッター・ハーゲン	オッター・ハーゲン自伝		P.ピカール(湯浅訳)	F.ジョリオ・キュリー 科学と平和の擁護者

### L1d 社会科学

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
Z	末川 博 編	憲法問題の焦点(京都平和委員会 1965)	T	都築 正男	医学の立場から見た原子爆弾の災害
	—	万国のプロレタリアは団結してわれわれの共同の敵に反対しよう(上)(下)(中華書店'63)		ロビン・クラーク(松井訳)	現代戦争論 軍備と人類の未来
				渡辺、利谷 編	現代日本の法思想

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
T	オールドリッジ(服部訳) —	核先制攻撃症候群 世界の良心は発言する	T	民主主義科学者協会物理部会	日本の原子力問題

L1e 文芸、歴史、思想、宗教、実用

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
Z	佐々木 信綱 編 深尾 須磨子 斉藤、土屋 編 福島 正夫	万葉集 下(岩波文庫) 詩集 詩は魔術である(三一新書、献辞あり) 増補 左千夫歌集(岩波文庫) 近・現代土地制度史	T	小久保 泉 宮 芳平 — 松田 修 — 大和 資雄訳 大野 茂男 押田 良久 ガーベル画 宮柊二詩 — 飯田 償陰 バルザック(加藤訳) 与謝野 晶子訳 — 犬丸 秀雄 — ジャン・ゲーノー(渡辺訳) 宮 柊二 朝吹 登水子 — 角田 房子 — 中林 淑江 中林 貞男 編 宮本 百合子 赤城 志津子 円地 文子 — ヴァージニア・ウルフ 吉田 喜美子 高橋 英子 吉城 愈子 マリーとイレヌ・キュリー(西川訳) 服部 信子 ライナス・ポーリング ケッセル・ウオールトン	歌集 玻璃の帆 聖地巡礼 日本詩人全集 16、釈超空、会津八一 日本の花 新約聖書 アメリカ詩選(若月名著選) たけくらべ通釈 雅楽鑑賞 '73 東京幻想 きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記 普勧坐禅儀一茎草 禁治産 源氏物語 上(日本国民文学全集3) 源氏物語 下(日本国民文学全集4) 日本古典文学大系 56 上田秋成集 歌集 海表 歌集 海波 フランスの青春 歌集 多くの夜の歌 愛のむこう側 私のパリ・パリジェヌ 碧素 日本ペニシリン物語 アマゾンの歌 日本人の記録 蓑虫の唄 続 蓑虫の唄 女性の幸福 宮本百合子詩集 日本史小百科2 女性 人物日本の女性史2 栄光の女帝と后 人物日本の女性史6 日記につづる哀歓 ヴァージニア・ウルフ著作集4 燈台へ かがみ 歌集 つきせぬ 歌集 雫 母と娘の手紙 清月 ビタミンC、かぜとインフルエンザ アルコール中毒
T	渡辺 一夫 吉野 秀雄 夏目 漱石 C.H.マルタン(野上訳) ブスケ 紀平 正美 宇佐見 英治 花岡 松枝 コルベジェ(倉田訳) 片岡 美智 宮本 百合子 海老坂 武 島尾、小川 芳武 茂介 森 有正 — 吉村 昭 矢内原 伊作 藤岡 由夫 井上 ひさし 野村、田中 佐竹 編 吉成 愈子 有馬 朗人 亀井 勝一郎 中村 保雄 天野 重安 宇田 零雨 田中 仙樵 葛原 輝 昭二会 林 太郎 吉田 喜美子 中林 淑江	人間と機械など(思想との対話12) 心のふるさと こころ Hの晩鐘は人類のために鳴ったであろうか? 日本見聞記 1 無門關解釈 ピエールはどこにいる 失われゆく楽園 神は人々と共に 人間 この複雑なもの 若き知性に パリ ポナバルト街 夢と現実—六日間の対話 北欧デザイン紀行 言葉 事物 経験 講座 現代の哲学1 時間・空間 深海の使者 芸術家との対話 十九の一生 青葉繁れる これからの中国料理 日本の花 歌集 花時計 昭和俳人選書 有馬朗人句集 母国 亀井勝一郎宗教選集4 大和古寺風物誌 能と能面の世界 旅信—科学者の世界スケッチ 草茎俳句の鑑賞 茶道入門 京都 野の花道の花 花 還暦記念文集 湖南の春 かがみ 句集 蝸牛の唄			

## L 2 : 欧文書籍

## L 2 a 物理専門書 (欧文)

収蔵	著者	書名 (発行所, その他)	収蔵	著者	書名 (発行所, その他)
Z	Mme Curie	THÈSE 1903(表紙の損傷がひどかったため 1998 年改装) [Ca.1]	T	Ta-You-Wu	Kinetic Equations of Gasses and Plasmas.
	Mme Curie	THÈSE 1903 (写真版およびそのフィルム)		J.B.Tourriol	Optique Géométrique.
	Pierre Sue	Dix ans D'Application de la Radioactivité Artificielle.		—	Mécanismes de Reactions Nucléaires, Colloque.
	L.R.B. Elton	Nuclear Sizes. (Oxford press)		—	Handbook of Chemistry and Physics. 32 nd Edition 1950-1951.
	J.H. SPAA	Positronbanen in de Wilsonkamer. (J.H. de Bussy-Amsterdam 1949)		G.J.Nygh	Nuclear spectroscopic investigations of some isotopes of calcium, lead, and mercury.
T	Bacher et al.	Atomic Energy State.	X	Jean Perrin	Grains de Matière et de Lumière. Existence des Grains. (1935) (Actualités Scientifiques et industrielles (Hermann & Cie Editeurs), Atomistique III, No.190)
	M.A.Preston	Physics of the Nucleus.		Jean Perrin	Grains de Matière et de Lumière. Structure des Atomes. (1935) (Atom. IV, No.191)
	H.A.Tolhook	On the Theory of Beta-Radioactivity.		Jean Perrin	Grains de Matière et de Lumière. Noyaux des Atomes. (1935) (Atom.V, No.192)
	L.de Broglie	Une Nouvelle Théorie de la Lumière.		Jean Perrin	Grains de Matière et de Lumière. Transmutations provoquées. (1935) (Atom. VI, No.193)
	Curran et al.	Counting Tubes. Theory and Applications.		Henri Cartan	Sur les Groupes de Transformations Analytique. (1935) (Exposés Mathématique IX, No.198)
	D. Taylor	The Measurement of Radio Isotopes.		G. Darmais	Méthodes d'Estimation. (1936) (Statistique Mathématique I, No.356)
	W.E.Siri	Isotopic Tracers and Nuclear Radiations.		G. Gamow	Cinétique de Réactions Nucléaires. (1936) (Exposés de Phys. Théorique XVI, No.369)
	L.I.Schiff	Quantum Mechanics. new 2nd edition.		N. Bourbaki	Théorie des Ensembles. (1939) (Éléments de Mathématique I, No.846)
	H. Weyl	Temps, Espace, Matière.			
	P.M.Rolph	Three Body Problem.			
	I.Slaus et al.	Few Particle Problems.			
	A.Mitra et al.	Few Body Dynamics.			

## L 2 b 一般科学および科学者

収蔵	著者	書名 (発行所, その他)	収蔵	著者	書名 (発行所, その他)
Z	Eve Curie	Madame CURIE [Ca.4]	T	Irène Joliot	Mariï Sklodowskiej-Curie. [Ca.5]
	Joliot-Curie	F. Joliot-Curie Textes Choisis. 1959 [Cb.15]		P. Langevin	La pensée et l'action.
	Mme Curie	Pierre Curie. 1924 [Ca.3]		H.C. Uray	Le Système Solaire.
	E. Dennerly	Pierre et Marie Curie. 1967 [Ca.6]		P. Huard	La Médecine Japonaise. Des Origins à nos Jours.
	M. Rouzé	F. Joliot-Curie. [Cb.14]		N. Kusano	Atomic Bomb Injuries.
	P. Biquard	F. Joliot-Curie et L'énergie Atomique [Cb.16]		A. Strohl	Les Isotopes Radioactifs en Biologie.
	A.Langevin	Paul Langevin, mon Père.		—	The Yoshio Fujioka Commemorative Issue.
	Jacque Monod	La Hasard et la Nécessité.		Vallery-Radot	La Vie de Pasteur.
	—	L'oeuvre scientifique de Blaise Pascal. (小冊子)		L. Fermi	Atomes en Famille.
	—	La formation de la terre. (Entretien avec S.K.Runcorn) (Robert Laffont Grammo)		H.Poincare	Science et Méthode.
T	—	Frédéric Joliot=Curie.	—	RADIUM ; General Properties, Its Applications in therapeutics Apparatus.	

## L 2 c 文芸, 社会, 実用, 他

収蔵	著者	書名 (発行所, その他)	収蔵	著者	書名 (発行所, その他)	
Z	Jean Guéhenno	La France et le Mond. (Edition de la Liberté)	Z	Anne Philipe	Le Temps D'un Soupir.	
	Jean Guéhenno	Jeunesse de la France. (Note par SEKINE) (白水社)		J.M.Valmalette	Le Dessin Technique Normalisé. (Text)	
	Jean Guéhenno	Dernières Lumière, Derniers Plaisirs. (書き込み多数)		Telford Taylor	Les Procès de Nuremberg.	
	Jean Guéhenno	Carnets du vieil écrivain.		—	Palais de la Découverte.	
	Jean Guéhenno	Changer la vie – Mon enfance et ma jeunesse.		—	Un brevet d'invention. ANVAR.	
	—	L'indépendance de L'esprit – Correspondance entre Jean Guéhenno et Romain Rolland, 1919-1944.		—	Un brevet d'invention. Pourquoi? Comment.	
	Paul Claudel	百扇帖		—	International Council of Science Unions, 1976 year book.	
	H.Montherlant	La Petite Infante de Castille.		—	Le livre noir des Journées de Mai.	
	A. Marissel	Montherlant. (1966)		—	De rue l'Estrapade et rue d'Ulm ,1968/2.	
	Pascal Laine	La Dentellière.		T	Jean Guéhenno	Caliban et Prospero.
	J.Jacques 他	Le réveil de la France. (Denoel, 1968)			Jean Guéhenno	Journal d'un Homme de 40 Ans.
	A.C. Girard	Condamnés à L'Eternité 1966.			Jean Guéhenno	Entre le Passé et L'avenir.
	Aurore Sand	George Sand, Chez Elle. (小冊子)			Annie Guéhenno	L'Epreuve.
			Annie Guéhenno	La Maison Vide.		



収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
T	Edmond Jabés	Le retour au Livre.	T	B. Constant	Adolphe.
	Edmond Jabés	Le Livre de Yukel.		R. Russier	La Foi Selon Pascal, Dieu Sensible au Coeur.
	Edmond Jabés	Le Livre des Questions.		—	Tradition et Originarité dans la Théorie Pascalienne de la Foi.
	Paul Claudel	L'annonce Faite a Marie.		E. Hemingway	Cinquante Mille Dollars.
	Paul Claudel	Le Soulier de Satin. (プログラム)		Lou Siun	Nouvelles Choisis.
	Jean-P. Sartre	Les Mots.		G. Couteline	Théâtre de Courteline.
	〃	Situations I.		Schilderijen	Rembrandt Tentoonstelling.
	André Gide	L'école des Femmes.		Klee-Gerken	Gesprochenes Deutsch.
	André Gide	Journal. 1942-1949		J.-M.Pottieg	Les Vainqueurs de la Défaite.
	André Gide	Amyntas.		A. Daudet	Tartarin de Tarascon.
	E. Gouiran	André Gide.		J. Guillet	Jèsus Devant sa Vie et sa Mort.
	P. Mazars	Lucien Coutaud.		A.C. Girard	Condamnés à L'Eternité.
	P. Clarac	Textes Choisis de Colette.		L.Gallet et al	Thais.
	—	Recettes de Cuisine Pratique.		—	Derniers temples d'Egypté, Edfou et Philae.
	E. Lange	Au vin et à L'alcool...La cuisine D'aujourd'hui.		H. Stierlin	Le Monde des Pharaons.
	—	Nouveau Petit Larousse Illustré.		M. Robertson	La Peinture Grecque.
	—	Histoire des Françaises. II		W.S. Allen	Living English Structure.
	—	La Cuisine au Vin.		Roger Mayer	Vers le désarmement, étapes, projets, problèmes.
	J. Clement	La Santé par les Plantes.		Mme de Sévigné	Lettres Choisis. 14 édition
		La Cuisine au Fromage.		Mme de Sévigné	Lettres Choisis. 40 édition
	Geneviève Sée	Grandes Villes de L'Egypte Antique.		Mme de Sael	De la Littérature de L'Allemagne.
	J. Hillairet	Connaissance du Vieux Paris.		L'abbé Mareux	Pour Ecrire en Français.
	—	Le Grand Livre du Bois.		G. Halbwechs	Langue Allmande.
	R. Peyrefitte	Les Fils de la Lumière.		Ch. Lamb	Othello. (Contes Shakesperiens)
	B-Savarin	Physiologie de Goût.		Firmin Lamy	L'ancien Sept-Fons. 1132-1789
	J.C. Trewin	The pictorial story of Shakespeare.		E. Beaumont	Sept-Fons Moderne et Contemporain. 1789-1936
	—	201 Recettes de Cuisine au Gaz.		—	Lexique Breton-Français et Français-Breton.
	Alain Guichard	Les Franc-Maçons.		K. Jaspers	L'Univers des formes.[18 (1)], Le Temps des Pyramides.
	W. Frolow	Hommage Nikita Frolow, maquis tué à l'ennemi.		B. Constant	Cécile.
	J. Girard	Avignon.		P. Eluard	Poèmes Politiques.
	G.leDuc et al.	Marques et Signatures de la porcelaine Français.		Alain-Fournier	Le Grand Meaulnes.
	—	Fables de La Fontaine.		—	André Gide et Notre Temps.
	Corneille	Le Cid.(Classiques larouse tragédie.)		B. Beach	Shakespeare and Company.
	Simon Laborde	Le Cancer.		F. Sagan	Un Certain Sourire.
	Rev.J.I.Malloy	A Catechism for Inquirers.		Cyrano de Ber.	Voyage dans la Lune.
	Changer de Cap	Programme pour un Gouvernement Démocratique D'unon Populaire.		Y. Nakagawa	Les Longues Années.
	B. pasternak	Récit.		C. Chamié	Principes nouveaux de Psychologie.
	—	participants.(Int. Conf. on Radio-isotope)		N. Boulgkov	Le Maître et Marguerite.
	G. Marchais	Programme Commun de Gouvernement.		Alain Decaux	Histoire des Françaises. I
	V. Stevenson	Bien Vivre avec les Plantes		Nina Potapova	Le Russe.
	H. Romgnesé	Nouvel Atlas des Champignons Tome IV.		P.André et al	Le Mai de la Revolution.
	—	NAGEL Encyclopédie de Voyage.		P. Henty	The National Gallery London.
	Léon Dufour	Les Mauvais et les bon Champignons.		D. F.Goust	La Médecine pour tous.
	—	Documents Relatifs.		D. Daninos	Les Nouveaux Carnets du major Thompson.
	Julius Fucik	Ecrit sous la Potence.		P. Poirier	Jeu et Expérience.
	—	Guide de la Route.		A. Winkler	Giotto.
	A. Rimbaud	Poésies.		R. Thomasset	La Bretagne.
	'Abbé Acrampon	La Sainte Bible.		—	An Illustrated Guide to Goa.
	Paul Mousset	Les Cerisiers Doubles du Japon.		Baudelaire	Les Fleurs du Mal.
	E.M.Cioron 他	Mercure de France.		E. Balz	Über die Todesverachtung der Japaner.
	C. Chamié	Principes Nouveaux de Psychologie.		H. Menge	Das Neue Testament.
	—	La Nouvelle Revue Française.		Y.Gonda et al.	Yuhodos Japanisch-Deutsches Taschenworterbuch.
	G. Cogniot	Petit Guide Sincère de L'union Sovietique.		—	A Room of one's own.
	—	L'indicateur de L'Etudiant en Droit.		—	Saint Marguerite-Marie.

収蔵	著者	書名(発行所, その他)	収蔵	著者	書名(発行所, その他)
T	—	Le Palais de la Découverte.	T	—	La culpabilité allemande.

### L 3 : 和文雑誌・冊子等

発行年月(巻, 号)に\*印を付けた雑誌は湯浅の寄稿文が掲載されているものである。

#### L 3 a 物理関連一誌および報告書

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	物理学会誌	1947/vol.2(4)(5), 1961/vol.16(4) 1977/vol.32(11), 1979/vol.34(11)	Z	日本原子力研究所年報	1957, 1960
	日本の原子核(日本学会誌)	1963		原子力研究所(小冊子)	1961(2部), 1963(2部)
	日本の科学者(日本科学者会議)	1966/3, 1968/7, 1972/7.		フォトン・ファクトリー研究所設立趣意書(案)	
	京大原子炉実験所(ガイド)	1964	物理学会名簿	1956, 1959, 1963, 1965, 1977, 1979.	
B	物理学会誌	1957~1980	206冊		

#### L 3 b 一般科学雑誌

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	科学(岩波書店)	1957/12	Z	自然(中央公論社)	1973/7
	原子力(みすず書房)	1955/1, 2, 3-4		自然(中央公論社)	1976/10*
	基礎科学(弘文堂)	1948/10*	B	科学(岩波書店)	1955~1975(多数)
	自然(中央公論社)	1964*~1978*(寄稿文掲載の14部)	X	自然(中央公論社)	1951~1980(123部)
	自然(中央公論社)	1954/11		数学セミナー	1976/9
	自然(中央公論社)	1968/4		科学と技術の広場	1973/No.81, 1976/No.90, 91, 92, 1977/No.93, 1978/No.96, 97

#### L 3 c 一般雑誌

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	社会の動き(民主会本部)	1949/2*	X	みすず(みすず書房)	1942/10~1979/4(90部)
	日本評論	1950/7*		法学セミナー	1972(4部)
	平和(大月書店)	1954/7, 8, 10		世界(岩波書店)	1974/11
	アサヒグラフ(原爆被害写真)	1952/8		ひろば(至光社)	1974(No.61)~1980(No.88)(13部)
	みすず(みすず書房)	1977(202号)		婦人の友	1967/6, 10, 1968/1
	みすず(みすず書房)	1979(226号)		海(中央公論社)	1969/6
	みすず(みすず書房)	1979(227号)		婦人公論	1956/2, 1959/7, 1977/12
	みすず(みすず書房)	1970~1978(寄稿文掲載の13部)		ミセス	
	ひろば(至光社)	1975秋*, 1977冬*		文芸春秋	1968~1972(7部)
	女性改造(改造社)	1949/2*, 4*, 6*(2部), 8*		女性改造(改造社)	1949/7
X	日本評論	1950/12			

L3d 会誌、同人誌、報告、その他

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	'78 核兵器完全禁止被爆者援護世界大会, 東京, 広島, 長崎の記録 広島(岩波写真文庫, 72 巻) 科学技術会議海外調査団報告	1963/11	Z	作楽(復刊 22 号クラス便り昭 2 会)	1978
	第 10 回国連特別総会の最終文書 医療(国立病院医療所機関誌, ビキニ関係報告) 長崎の原爆(長崎市原爆資料保存委員会編写真冊子) 平和を求めて, 日本引揚問題の記録(厚生省引揚援護庁) 広島 原爆記録写真(絵はかぎ) 日仏理工科会誌	1978/6.30 1954 1950 1961/8	X	作楽 (16 部) 英語青年 同時代 (黒の会) 陽気 (養徳社、天理出版) パリトキオ (3 部) 三田詩人 アララギ 短歌研究	1955~1978 1953 vol.99 8-11 1957/12, No.6, 1958/ No.7, No.9. 1967/10, vol.19-10. 1954/9 1952~1968 (多数) 1952/7
	日仏文化-日仏会館創立 50 周年記念特集号及び同記念展図録 中学国語 アテネフランセの歴史(仏文パンフレット) 日仏アテネ交友会会報 河 (お茶大) 河 (お茶大) 波 IDE(民主教育協会誌, 女性大学特集)	1974 1939/11 号* 1956/6* 1957/2 1976/5		コスモス (宮柊二短歌集) 現代詩研究 草茎 (句集) 短歌年鑑 墨美 秀作芸術 (絵画誌) 草月 国宝便覧 (国宝リスト)	1975/1 1953/1, 4, 8, 9 1967/8, 10, 11, 12 1953 1969/7 1976~1979 (8 部)

L4 : 欧文雑誌・会誌・冊子等

L4a 物理専門雑誌

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	Journal de Physique et Radium. Journal de Physique : Colloque C. (Mme Curie 100 年記念講演集)[Ca.15] Comptes Rendus : Journal de Chimie Physique. Philosophical Magazine and Journal of Science(London). Physical Review. Physics Today. Comments on Nuclear and Particle Physics. Prog. Theor. Phys. . Supplement of Prog. Theor. Phys.. Journal of Phys. Soc. Japan.	1941/No.1, 1943/No.12, 1944/No.6,7 1968, sup. au No.1 1952, No.4 1942(Jean Perrin) 1943/No.231 1966/vol.148, No.4 1966/vol.19-5 1967/vol.1, no.1 1946/vol.1-1, 1947/vol.2-1, vol.2-2 vol.27(1963), vol.28(1963), extra.no.(1965), vol.42(1968) 1946/vol.1, 1947/vol.2-4, vol.2-6	Z	Science of Light.	1953/vol.2-2, 1954/vol.3-1, 1955/vol.3-2, vol.4-1,-2 1956/vol.5-1,-2,-3, 1957/vol.6-1,-2,-3.
			B	Journal de Physique et Radium. Journal de Physique : Colloque C. Physics Today. Scientific Research. Physical Abstracts. Physical Review. Physical Review Letters. Reviews of Modern Physics. Prog. Theor. Phys. . Science of Light. Journal of Phys. Soc. Japan.	1955~1962 (90 部) 1956~1971 (63 部) 1951~1973 (148 部) 1967~1969 (28 部) 1950~1960 (87 部) 1947~1973 (144 部) 1955~1967 (84 部) 1936~1960 (26 部) 1950~1965 (45 部) 1954~1957 (9 部) 1957~1965 (64 部)

L4b 国際会議 Proceedings

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	Proc. Int. Conf. on Beta and Gamma Radioactivity. Proc. of Int. conf. of Theoretical Physics. Congrès international de Physique Nucléaire. Few Body Problems in Nuclear and Particle Physics(Int. Conf. at Laval Univ.) Proc. of Sendai Conf.. Proc. of Int. conf. on Nuclear Structure.	1952, Amsterdam 1953, 京都 1964, Paris 1974, QueBec City 1977(東北大学理学部) 1977, 東京	Z	Proc. of the Int. Conf. on Nuclear Structure-Contributed Papers.	1978
			T	Proc. of the 1954 Glasgow Cnf. on Nuclear and Meson Physics. Proc. of the Int. Conf. on Nuclear Radiations. Proc. of the Int. Conf. on Nuclear Structure. Proc. Int. Conf. Few Body Systems and Nuclear Forces. Contributions, Int. Conf. on Nuclear Structure.	1956, Amsterdam 1977 1978, Graz

## L 4 c 科学雑誌

収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他
Z	La Nature.	1958/No.3382	Z	Regards	[Cc.2] 1948, No.175
	Le Monde Scientifique.(F.Joliot Curie 記事) [Cc.40]	1958/ 9		Atomes.	[Cc.1] 1947
	Le Monde Scientifique.	1957/No.2		Atomes.	[Cc.4] 1949, No.35
	L'EXPRESS (Einstein : La Minute de Génie).	1965/7-13		Atomes.	[Ca.9] [Cb.25] 1951
	L'âge nucléaire (BIMESTREL)	1958/5-6, No.10		Atomes.	[Cb.26] 1954/7, No.98
	Industries Atomique.	1957/7-8		Atomes.	[Cc.33] 1954, No.98
	Musée Pédagogue (Hommage à Pierre Curie) [Ca.11]	1956		IKO (Institut voor kernfysisch Onderzoek Amsterdam).	1972/1973
	Regards (F.Joliot-Curie 特集) [Cb.27]	1955, No.388		VALEURS actuelles.	1969/1.20-26
	Regards (F.Joliot-Curie 特集) [Cb.32]	1958, No.435			

## L 4 d 年次報告書

収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他
Z	Le Collège de France.	1530-1930	Z	Inst.de Phys. Nucléaire, ORSAY. Annuaire : Inst.de Phys. Nucl.	1966, 1972, 1976, 1977, 1978
	Le Collège de France (部分コピー).	1530-1930		Inst.de Phys. Nucléaire, ORSAY. Annuaire (Division de Phys. Nucl.)	1977
	Annuaire de Collège de France.	1975		Annuaire : Inst.de Phys. Nucl.	1975
	Plaisir de France (Collège de France 特集)	1956	T	Annuaire de Collège de France.	50 (1950-1951)
	Société Française de Physique, Annuaire	1957, 1960, 1969			52 (1952-1953)
	Société Française de Physique, Annuaire. 52 e Exposition				53 (1953-1954)
	Inst.de Phys. Nucléaire, ORSAY Annuaire : Institut du Radium.	1959-1960, 1964, 1965			56 (1956-1957)

## L 5 : 欧文一会誌、会報、連絡、案内等

## L 5 a Inst. de Physique Nucléaire, ORSAY

収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他
Z	Information	1965 No.special, 1975/12, 1976/1 No.11, 1976/4 No.12, 1976/5 No.13, 1976/10 No.14, 1977/1 No.15	Z	L'Accelérateur Van de Graaff Tandem d'Orsay.	1969
	Information (Irène Joliot-Curie 特集) [Cb.24]	1976/3 No.special		Project Report. (5 部)	
	Le nouveau centre de recherches fondamentales en physique nucléaire d'ORSAY.	1958		Liste des Documents reçus a la Bibliothèque. (1 部)	1978
	ARIEL : Bulletin périodique.	1976/6 No.1		Titres et Travaux Scientifiques. (4 部)	
	Synchro-Cyclotron : Transformation information.	1975, 1977		Annales de Physique Nucleaire Approfondie.	
				Les fonctions et activites du chercheur.	
				La carriere de chercheur. (質問書 2 部)	

## L 5 b Université de Paris-Sud, ORSAY

収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他
Z	Information (liste).		Z	L'œuvre scientifique de Blaise Pascal-et trois siècles après--.(Le palais de la Découverte.)	
	Guides.	1973, 1974			
	Aspects de la recherche.	1978			

## L 5 c CNRS 関連

収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年,巻,号,その他
Z	Rapport D'Activité.	1961-1962, 1962-1963, 1963-1964	Z	Le C.N.R.S. 25ans de Recherche Scientifique.	(小冊子)
	Rapport National de Conjoncture.I	1963-1964		Principales Dispositions Permettent le Travail des Chercheurs en Dehors de leur lieu d'affectation.	(小冊子)
	Rapport National de Conjoncture.II	1963-1964		Le progrès scientifique.	No.161 (1973)
	Le Courrier du CNRS.	1971/No.1,2, 1972/No.3,4,5,6, 1973/No.8,9, 1974/No.11,12,13,14.		"Prospective : Physique Atomique et Moléculaire."	
	Le Courrier du CNRS."1972 Images de la Physique"	Suppl. au No.7,		Bulletin Signaletique.	1973 vol.XXXIV, No.3, 1974
	Service de l'Enseignement Préparatoire aux Techniques de la Recherche.	1970-1971,1971-1972 (小冊子 2 部)		Tableau de Classment des Chercheurs.	1954/1
	Les œuvres sociales au C.N.R.S.- C.A.E.S.	1967,1970. (小冊子 2 部)		Bulletin Officiel. (2 部)	1975/8
				Services et Laboratoires.	



収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	Lettre d'information. c.a.e.s. information.	1971/11, 1973/8, 1974/1, 1974/8 1970/4, 1971, 1973/9	Z	Editions du CNRS, CATALOGUE GENERAL.	1959, 1964, 1966, 1965, 1967(2部) 1968, 1969, 1973, 1974(2部), 1975.
			B	Le Courier du CNRS :	1971~1974 (12部)

### L 5 d Société Française de Physique

Z	Bulletin	1961/1, 1961/12 No.2, 1962/7 No.4, 1964/1, 1964/7, 1965/1 No.1, 1965/4 No.2, 1965/7 No.3, 1965/10 No.4 1966/1 No.5, 1966/7 No.7, 1967/7 No.8, 1969/11-12 No.2, 1970/1-2, No.3, 1970/10-11, No.5, 1972/11, No.12, 1973/2 No.13, 1973/9-10 No.15, 1974/6 No.17,	Z	Bulletin	1975/5 No.20, 1975/10, suppl. au No.21, 1976/1, suppl. au No.22, 1976/6, suppl. au No.23, 1977/2 No.25, suppl. No.7 (1977), 1977 suppl. au No.27 1978/1 No.29, 1979/5 No.33 1979/10 No.34.
				Le docteur de 3 <sup>ème</sup> cycle en physique.	

### L 5 e フランスの他大学関連、その他雑誌

Z	Univ.de Bordeau, XLabo. de Phys. Nuc.Annuaire. Univ. of Surrey, Dept. of Phys. Institute Educational Technics, Exhibition. Revue Université des Mines. Colloque de Physique Nucléaire "Noyaux Legers", Lyon.	1964-1965, 1965-1966, 1966-1967, 1967-1968 1966	Z	Cahier de Manipulation, Physique (Classe de Second), MEDEE Groupe de Théâtre Antique de la Sorbonne.(パンフ) Revue des Télécommunications, IIT. Paris VII, formation.(パンフ)	1962/vol.37, No.4
---	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------	---	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------

### L 5 f SACLAY 及びフランスの原子力関連

Z	Saclay : CEN (Centre d'Etudes Nucléaire de Saclay) Saclay : Répertoire analytique à l'usage de physiciens nucléaires. II Saclay : Rapport du Groupe de Travail pour l'Accélérateur Nationale à Ions lourds. Saclay : Guide. (1部) Saclay : Laboratoire D'Analyse par Activation Pierre SUE. (2部)	1955~(3部) 1951-1952	Z	Saclay : Hommage à Pierre SUE. Commissariat a l'Energie Atomique. (小冊子) Commissariat a l'Energie Atomique. The French Atomic Development Program. (小冊子)	1945-1956 1945-1958 1957, 1961
---	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------	---	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------

### L 5 g ヨーロッパの物理関連

Z	Europhysics News . CERN : european organization for nuclear research.	1969/No.6, 1970/No.8,9, 1972/No.5, 1973/No.5, 1974/No.1, 2, 3, 12, 1975/No.2, 1976/No.3. 1959, 1969.
---	--------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### L 5 h U.S.A の研究関連

Z	Bulletin of the American Physical Society. Current Physics Advances Abstract, Nuclei and Particles.	1946 1972	Z	Articles published in Technical Journals and Report published during 1957 (OAK Ridge National laboratory)	1957
			B	Bulletin of the American Physical Society.	1950-1966(58部)

### L 5 i 日本の研究所、大学関連

Z	Bulletin of Institute Chemical Research(京都大学) Kyoto Univ. Tandem Van de Graaff. Univ.of Tsukuba, Tandem Accelerator Center. Annual Rep.	suppl. (1954), vol.41(1963), vol.42(1964), vol.43(1965), vol.44(1966), vol.45(1966), vol.46(1967), vol.47(1969), vol.48(1970), vol.49(1971), vol.50(1972), vol.51(1973). 1967, no.1 1975, 1976	Z	IPCR (理研) Cyclotron Progress Report. Development and Utilization of Radioisotope in Japan, The Science and Technology of the Government of Japan. Isotope News. (日本アイソトープ協会) JAERI TANDEM. (原子力研) JAERI TANDEM. (原子力研) Simizu Lab., Radioisotope research lab. 報告(京都大学)	1968 vol.2, 1970 vol.4. 1972 vol.6(2冊) 1963 1962 1976/6 1977, No.1(英文3部, 和文1部) 1978, No.4(1部)
---	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### L 5 j 研究者連合、組合関連 (以下のリスト中 ▲印を付した号は湯浅没後に届いたもの)

Z	SNCS : f.e.n.(syndicat national des chercheurs scientifiques) VRS - La Vie de la Recherche Scientifique.	1968 No.7, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18. 1969/11 1970, No.77, 83, 84, 85, 86, 92, 93, 94, 96, No.3(1970), 1972 No.127, 1977/11(コピー) 1959 No.22~1979 No.204 1980, No.7▲	Z	m.g.e.n. (Mutuelle Générale de l'Education Nationale)	1970, 1971 (No.1), 1972 (No.6) 1965, 1966(20周年号), 1976, 1978/3, 1978/11-12, 1979 1974/9-10(バリ医学センター) 1975/1-3(クリニックのリスト等)
---	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---	-------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

Z	m.g.e.n.(Mutuelle Générale de l'Education Nationale) Dialogues—Universitaires,	19805 <sup>▲</sup> ,7 <sup>▲</sup> ,11-12 <sup>▲</sup> 1980-1981 <sup>▲</sup> (クリニックのリスト等) 1965	Z	La guerre froide de M.Yvon Delbos contre Université Française, L'affair georges TEISSIER. Bulletin des œuvres hospitaliers Françaises de L'ordre de Malte.	1980 No.13~16 <sup>▲</sup>
---	-----------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------	---	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------

## L 6 : 思想, 宗教, 社会, 医療, 平和運動関連雑誌等

(以下のリスト中▲印を付した号は湯浅没後に届いたもの)

### L 6 a 思想, 宗教, 社会, 医療, 平和運動関係 雑誌

収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他	収蔵	誌名(発行元)	発行年, 巻, 号, その他
Z	Défence de la PAIX.	1951/No.5, 1952/No.9, 11, 12, 13, 14 1952/8 1953/No.20, 21, 23, 29 1954/No.36, 38 Horizons. 1955/No.47, 50, 51 1956/No.57, 58, 1957/No.61 PALLY (A Monthly Catholic Review) 1949/vol.3 No.4, 6, 9, 10, 11, 12 1950/vol.4 No.1, 2, 3, 4, 6, 8, 9. 1951/vol.5 No.2 Combat pour la Paix [Cc.7] 1959/No.121-122 Combat pour la Paix 1965/No.187-188 Combat pour la Paix : 1974/No.277 Combat pour la Paix:(Irène Joliot-Curie 特集)(2冊)[Cb.36] 1966/No.193 Paris Match, (Irène Joliot-Curie 特集)[Cb.28] 1956/3 Paris Match. 1960/1 Heures Claires.(Irène Joliot-Curie 特集)[Cb.26] 1956/5, No.130	Z	La Pensée. La Pensée. [Ca.10] La Pensée. [Cb.31] La Pensée.(F.Joliot-Curie 特集)[Cb.35] La NEF.(F.Joliot-Curie 特集)[Cb.30] Bulletin du Conseil Mondial de la Paix. (F.Joliot-Curie 特集) Le Courrier : (Marie Curie 特集)[Ca.14] Mutual Generale (パリ医学センター) La vie ouvrière FRANCE*URSS MAIF informations.	1953/No.48-49 1956 1957/No.74 1959/No.87 1957/1 1958/9 1967/10 1974 1965/No.1066, 1067 1946, 1949 1978, 1980/2 <sup>▲</sup> , /6 <sup>▲</sup> , /11 <sup>▲</sup>
			T	Défence de la PAIX.	1952/1 ? 1954 No.37 ?

### L 6 b 宗教, 社会, 平和運動関係 小冊子 その他

Z	The effects of the Atomic Bombs at Hiroshima and Nagasaki. L'appel de Stockholm. [Cc.13] Comment Sortir de l'abime ? [Cc.15] Rapport sur le Problème du Commissariat à l'énergie atomique. [Cc.16] La Paix le Désarmement et Coopération Internationale. [Cc.38] REVUE MONDIALE DE LA PAIX [Cc.23] The Message of FATIM. Cahiers EVANGILE, Carpentier, Pour une Première lecture de la Bible. PHP Manecanterie des Petits Chanteurs à la Croix de Bois de Paris. Manifestes et Allocation du Maréchal Pétain, Français.	1955-1958 1950 N° 21 1940 (小冊子)	Z	Une autre vie c'est possible ensemble (Femmes aujourd'hui demain) TRYGEE, Organe Mensuel du Mouvement de la Paix L'université, Les Problèmes Économiques du Socialisme en U.R.S.S. par J.Staline Le Marxisme et la Question Nationale et Coloniale, par J.Staline The War Ends.(注:広島, 長崎の記録写真) Paris brûle-t-il? (注:1944 パリ解放の記録写真) Désarmement (Roge Mayer; Rêve Généreux au Projet Politique?) Nouvelles des petits frères.(パンフレット類) Ircantec. Club des Retraités de Région Parisienne <sup>▲</sup> Nouveau siècle 1980 No.6 <sup>▲</sup>	1976/2 ~1979, 1980 <sup>▲</sup> 1979/1980
---	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------	---	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------

## 第Ⅲ部 追悼・追想・評伝関係資料

第Ⅲ部は、1980年2月1日の湯浅他界後、湯浅に関連して催された行事の記録や、足跡、思い出などを語った印刷物を、下記のように分類し、一覧として示すものである。ここに挙げたもの以外にも多くの記録や文書があることが察せられ、また今後も湯浅が登場する多くの場がもたれることも期待されるので、新たな資料がⅢ-2, Ⅲ-3, Ⅲ-4に加えられて行くに違いない。

第Ⅰ部に挙げた湯浅の足跡に加えて、ここに挙げた資料も、様々な角度から湯浅を捉えていて、湯浅を知る上でそれぞれ興味深い。

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| Ⅲ-1. 追悼行事関連資料     | Ma: 追悼の言葉等          |
|                   | Mb: 追悼行事関連          |
| Ⅲ-2. 追想文・伝記・評伝等資料 | Mc: 書籍・雑誌・会誌等への寄稿、他 |
|                   | Md: 書籍              |
|                   | Mv: ビデオ             |
| Ⅲ-3. 記念行事関連資料     | Me: 記念行事とその資料       |
| Ⅲ-4. 資料整理と科学史関連資料 | Mf: 資料整理の記録と科学史関連   |

### Ⅲ-1. 追悼行事関連資料

#### Ma: 追悼の言葉等

Ma.n	題 目	筆 者	掲載誌(発行元) 年/月. 日 備考
Ma.1	l'annonce de décès de Mlle Toshiko YUASA		〈Le MONDE〉 6 février 1980
Ma.2	新聞死亡記事		毎日, 東京, 朝日, 読売 新聞各紙
Ma.3	「湯浅年子博士逝く」	桑折範彦	『日本人会新聞』42号 1980/2.18
Ma.4	Nouvelles du Laboratoire ; Toshiko YUASA	M .RIOU	[Information](Inst.de phys.nucléaire) Mars 1980 n° 28
Ma.5	[湯浅年子さん追悼]		〈桜蔭会会報〉107号 1980/5.10
Ma.6	[湯浅年子さんへの弔辞]	伏見康治	〈桜蔭会会報〉107号 1980/5.10
Ma.7	「故湯浅年子先生告別と追悼の式」 報告		〈日仏理工科会誌〉32号 1980/11
Ma.8	Ma.7 追悼式における [湯浅年子さんへの弔辞]	伏見康治	〈日仏理工科会誌〉32号 1980/11
Ma.9	Ma.7 追悼式に関して [談話]	坂井光夫	〈日仏理工科会誌〉32号 1980/11
Ma.10	「湯浅年子さんを悼む」	伏見康治	『科学朝日』 1980/4
Ma.11	「キュリー夫妻の高弟湯浅年子さんパリに死す」		『週間新潮』 1980/2
Ma.12	「鎮魂湯浅年子先生ー巴里に死す」	坂井光夫	『自然』1980/4 『空と海のあわい』1996/3
Ma.13	「湯浅年子氏を悼む」	坂井光夫	『日本物理学会誌』 1980/7
Ma.14	「湯浅年子氏への誄辞」	A.ゲーノー	『みすず』254号 1981/9
Ma.15	「湯浅年子氏への誄辞」	G.ヴェルニユ	『みすず』254号 1981/9
Ma.16	「巴里に死すー湯浅年子さんを偲んで」	木村正子	1980/2
Ma.17	「湯浅先生ご臨終の前後の状況」	伊藤栄彦	1993/8
Ma.18	[TOSHIKO YUASA 1909 - 1980]	G.Vergnes	(碑のための仏文)

## Mb：追悼行事関

Mb.n	追悼の催し	場 所	記 録・備 考
Mb.1	葬儀 1980/2.8	パリ, Père-Lachaise 霊園	写真 (アルバムMに収納)
Mb.2	追悼ミサ 1980/2.19	パリ, Notre-Dame-des-Champs	追悼の言葉→Ma.14, Ma.15
Mb.3	追悼ミサ 1980/2.19	上智大学クルトゥル・ハイム	(柳瀬睦男氏主催)
Mb.4	「故湯浅年子先生告別と追悼の式」 1980/3.11	東京、日仏会館	式次第および式後の挨拶状 報告文→Ma.5, Ma.8 追悼の言葉→Ma.5, Ma.6 録音テープ、写真 (アルバムMbに収納)

## Ⅲ-2. 追想文・伝記・評伝等資料

## Mc：書籍・雑誌・会誌等への寄稿、他

Mc.n	題 目	筆 者	掲載誌 年/月 備考
Mc.1	「日仏共同研究覚書」	柳父 琢治	『日仏理工科会誌』No.34. 1981/11 『思い出の柳父琢治さん』 1993/7 に再録
Mc.2	「日仏共同研究に出かける」	柳父 琢治	竹内和子氏への手紙
Mc.3	「科学者点描—パリに逝った物理学者・湯浅年子—」	岡部 昭彦	『学燈』 1984/10
Mc.4	「議員先生のプレヒストリー—伏見先生との話—」	岡部 昭彦	1986
Mc.5	「世界の女性科学者VII「湯浅年子」	小岩ケイ子	『婦人通信』(日本婦人団体連合) 354号 1989/4
Mc.6	「女性科学者の領域III 湯浅年子」	田村奈穂栄	『月刊百科』 1992/10
Mc.7	「柳父先生と不肖の弟子」	伊藤 栄彦	『思い出の柳父琢治さん』 1993/7
Mc.8	「柳父先生と湯浅先生」	坂本 吉之	『思い出の柳父琢治さん』 1993/7
Mc.9	「柳父先生の思い出」	関 整爾	『思い出の柳父琢治さん』 1993/7
Mc.10	「日仏共同研究のころ」	桑折 範彦	『思い出の柳父琢治さん』 1993/7
Mc.11	「湯浅年子先生の思い出」	伊藤 栄彦	1993/8
Mc.12	「湯浅年子さんのこと」	高田 博厚	『婦人公論』 1993/8
Mc.13	「湯浅年子博士を知っていますか？」	松田 久子	『日本人会新聞』 1993/11
Mc.14	「日本女性最初の物理学者 湯浅年子」	松田 久子	『学燈』, 1994
Mc.15	「原子核物理学者 湯浅年子」		『先駆者たちの肖像』 東京女性財団 1994/3
Mc.16	「湯浅年子   パリに生きて」 発刊に寄せて	坂井 光夫	『日仏理工科会誌』 1996
Mc.17	ビデオ台本 [日本科学の先駆者達—湯浅年子]		青森テレビ
Mc.18	「思い出の湯浅年子先生」	H. Langevin- Joliot	[湯浅年子メモリアル・コンファ レンス](1995)における講演記 録、『みすず』452号 (1998/11)
Mc.19	「湯浅年子氏三首」他「湯浅年子先生」(山崎)	井上たか子	『すいえん』第55号 1997
Mc.20	「湯浅年子—海外で活躍した わが国初の女性物理学者」	山崎美和恵	『女性科学者の源流』(ラジウム発 見100周年記念パンフレット) 1998/10
Mc.21	明治生まれの国際女性物理学者湯浅年子 —日本のキュリー夫人—	川西 勝	『20世紀—どんな時代だったのか 思想・科学編』読売新聞社 1999/11
Mc.22	「湯浅年子 (1909–1980)」	川野 綾子	『遠つびと』63巻 2000/5
Mc.23	「恩師湯浅年子先生」	神谷 美子	『科学の饗宴』 1980
Mc.24	思い出 (1)「湯浅先生の思い出」	大野 鑑子	2001
Mc.25	思い出 (2)「先生ありがとうございました」	勝岡千恵子	1980
Mc.26	思い出 (3)「湯浅先生の思い出」	高梨 節子	2001
Mc.27	思い出 (4)	池野のぶ、他	1991, 2000
Mc.28	「戦時下フランスに学んだ核物理学者湯浅年子」	田村奈穂栄	「女性の100年[時代をひらく]」 (朝日クロニクル週間20世紀) 2000



Mc.29	「湯浅年子ー海外で活躍した 日本初の女性物理学者」	山崎美和恵	『科学する心ー日本の女性科学者たち』〈少年少女のための科学への道〉(ジャパンエコー社) 2001/7
Mc.30	「A Passion for Science beyond Place and Time, Toshiko YUASA」	山崎美和恵	(Mc.29 の英訳) 『BLAZING A PATH』(ジャパンエコー社) 2001/7
Mc.31	「湯浅年子博士の科学と人生」	山崎美和恵	『ジェンダー研究』4号 2001/3
Mc.32	「湯浅年子博士記念碑建立と [湯浅年子特別研究員] 制度の発足について	坂井 光夫	『日仏理工科会誌』n.59 2002/3
Mc.33	「湯浅年子先生の碑」 建立までの歩み	勝岡・山崎	全 上
Mc.34	「湯浅年子ーパリに生きた日本女性初の 国際的物理学者」	西條 敏美	『化学』(化学同人)〈シリーズ先人達の足跡〉2002 vol.57 no.11
Mc.35	「湯浅年子の科学する心」	山崎美和恵	『桜蔭会会報』復刊200号 2003/7
Mc.36	「国際的に活躍した物理学者湯浅年子」		教科書『社会6』(光村図書) 2004
Mc.37	「パリに生きた物理学者 湯浅年子」	山崎美和恵	『Tea Times』お茶の水女子大学広報誌 2004/11
Mc.38	[Gender and Physics in Early 20 th Century Japan : Yuasa Toshiko's Case]	伊藤 憲二	『HISTORIA SCIENTIARUM』 Vol.14-2, 2004
Mc.39	(中日新聞コラム 中日春秋 記事)		2005/3.18 〈中日新聞〉朝刊第1面コラム
Mc.40	「湯浅年子」	山本 志乃	『まほら』No.43 (旅の文化研究所) 2005/4
Mc.41	「科学史散歩3〜湯浅年子」		《ellipse》 (お茶の水学術事業会会報7号) 2005/5
Mc.42	「キュリー夫人のお墓」	山崎美和恵	『まほら』No.44 (旅の文化研究所) 2005/7
Mc.43	「湯浅年子記念特別研究員奨学金」の成果報告	山崎美和恵	『桜蔭会会報』復刊207号 2005/5
Mc.44	「湯浅年子記念基金特別研究員帰国報告」		『日仏理工科会誌』n.62, 2005/6
Mc.45	「フランスで得たもの」	佐々木成江	『日仏理工科会誌』n.63, 2006/10
Mc.46	「ルイ・パスツール大学に留学して」	渥美 裕子	〃
Mc.47	湯浅年子記念奨学基金特別研究員状況報告	後藤 真理	〃
Mc.48	「コレージュ・ド・フランスおよび ESPCI に 留学して」	石野千恵子	『日仏理工科会誌』n.64, 2007/9
Mc.49	[Toshiko Yuasa (1909-1980) : The First Japanese Woman Physicist and Her Followers in Japan]	八木 江里& 松田 久子	《AAPPS Bulletin》(Association of Asia Pacific Societies) Vol.17, No.4 2007/8
Mc.50	「心にのこる1冊ー湯浅年子著『パリ随想』」	山崎美和恵	『科学』9 (岩波書店) 2007/9
Mc.51	「海外で活躍した日本初の女性物理学者 湯浅年子」	山崎美和恵	『科学する心ー日本の女性科学者たち』 (岩尾、原、日刊工業新聞社) 2007/11
Mc.52	「国際的な女性物理学者 湯浅年子」		[なでしこたちの挑戦] 展 パンフレット 2008/3
Mc.53	「湯浅年子」	清水 和子	『時代に咲いた花』 (ノートルモンド社) 2008/3
Mc.54	「湯浅年子」ー国際的な女性物理学者		『WEC』「科学特集 ーなでしこ科学者の挑戦」 2008/6
Mc.55	「ーパリで研究ひとすじにー 日本女性初の国際的物理学者 湯浅年子」		『La beauty』(ORBIS 2008/7)
Mc.56	「湯浅年子ーパリに生きてー」	都河 明子	[日本女性研究者のあゆみ⑩] (文部科学教育通信 No 21 2008/8.11)
Mc.57	「大戦下ベルリンの湯浅年子」	石原あえか	『パリティ』2008/08
Mc.58	「国外頭脳流出の先駆け」	石原あえか	『パリティ』2008/09
Mc.59	「歌人としての湯浅年子」(1), (2)	川野 綾子	歌誌『青遠』第118号、 第120号、2008/4, 10
Mc.60	「湯浅年子シンポジウム =日仏交流150周年にあたり=」	洪 江美	『高エネルギーニュース』 Vol.127, No.2, 2008/9
Mc.61	「湯浅年子メモリアル 〜日仏科学共同研究のパイオニア〜」		『KEK ニュース』 2008/12.18

## Md : 書籍

Md.n	書名	編著者 (出版社)	出版年
Md.1	『一すぢの葦』〈湯浅年子姉のパリ便り〉	女高師理科昭六卒業生 (編・出版)	1981
Md.2	『湯浅年子一パリに生きて』	山崎美和恵編 (みすず書房)	1995
Md.3	『湯浅年子詩歌撰集・雑草の花』	山崎美和恵編 (私家版)	2001
Md.4	『パリに生きた科学者 湯浅年子』	山崎美和恵 (岩波ジュニア新書)	2002
Md.5	『物理学者 湯浅年子の肖像』	山崎美和恵編著 (梧桐書院)	2009

## Mv : ビデオ

Mv.n	題名	備考	
Mv.1	[湯浅年子メモリアルコンファレンス]	コンファレンスの記録 (尾立晋祥氏撮影・寄贈)	1995/12/2
Mv.2	[思い出の湯浅年子] H.ランジュヴァン=ジョリオ	コンファレンスにおける講演記録	1995/12/2
Mv.3	[一日本科学の先駆者達一湯浅年子]	青森テレビ作製	1996/11
Mv.4	[女性科学者の群像-保井コノ、黒田チカ、湯浅年子]	「ラジウム 100 周年記念ビデオ」	1998/10
Mv.5	[マドマゼルクゆあさ一原子の飛跡を追って]		2001/1
Mv.6	[偉人達の夢 #87 湯浅年子]	サイエンスチャンネル 2004/2.5 放映	2004

## Ⅲ-3. 記念行事関連資料

Me : 記念行事とその資料(Ⅲ-1 に挙げた追悼の催しは除く。また湯浅に直接には関係しない資料の多くは省略してある)

Me.n	行事	資料備考
Me.1	『お茶の水女子大学の歴史と女性研究者の歩み』における展示 (お茶大女性文化資料館、付属図書館、人間文化研究科共催)1981	冊子『お茶の水女子大学の歴史と女性研究者の歩み』ファイル Me.1
Me.2	『湯浅年子メモリアルコンファレンス』 1995/12/2 [全 夕食会] (於 お茶の水女子大学) (お茶大・女性文化研究センター、日仏理工科会共催)	プログラム、講演記録→(Mc.18) ビデオ Mv.1 写真 (ファイル Me.2 に収納)、出席者名
Me.3	『マリー・キュリーとこれからの女性自然科学者』 -「ラジウム発見 100 周年」を機に- 1998/10.21 シンポジウム・講演(エレヌ・ランジュヴァン)保 井、黒田、湯浅のパネルと資料展示・ビデオ (主催お茶大理学部・ジェンダー研究センター)	プログラム、講演記録、写真等：ファイル Me.3 に収納。ビデオ Mv.4 上映
Me.4	『ラジウム発見 100 周年記念事業』1998/10.23-25 記念講演会資料展示、ビデオ Mv.4 作製・上映 (主催日仏理工科会) (於 科学技術館)	趣意書・プログラム・講演記録：『日仏理工科会 誌』n.57;99/3、写真 (ファイル Me.4)、記念パン フレット〈女性科学者の源流〉→(Mc.20)
Me.5	『ふり返る 20 世紀：3 人の女性科学者』 1999/4.17 ビデオと講演(保井、黒田、湯浅)(於 理化学研究所) 平成 11 年度科学技術週間行事-理化学研究所一般公開)	ビデオ Mv.4 上映、「ビデオ解説パンフレット」 (お茶大ジェンダー研究センター) 講演者 (三木寿子、前田侯子、松田、山崎)
Me.6	『湯浅年子の碑建立』 「湯浅年子先生の碑を建てる会」 2001/7	建立までの記録、募金記録等：ファイル Me.6 に 収納、日仏理工科会誌』n.59;02/3→(Mc.32,33)
Me.7	『湯浅年子特別研究員』制度発足 2001	関連文書→(Mc.32,43-48)
Me.8	『湯浅年子記念奨学基金シンポジウム』2006/5.12	プログラム等：『日仏理工科会誌』n.63;06/9
Me.9	『なでこたちの挑戦』(日本の女性科学者技術者 シリーズ、於 科学博物館)展示(荻野、吉岡、香川、 保井、黒田、湯浅) 2008/3.22-5.6	チラシ、パンフレット→(Mc.52)
Me.10	『湯浅年子博士の科学と人生』 一パリに生き、真実を求め続けた物理学者の軌 跡一講演 (山崎美和恵) 2008/5.31	お茶の水女子大学・ホームカミングデー・物理学 科講演
Me.11	『湯浅年子シンポジウム』於パリ、 講演 [Toshiko Yuasa] 洪江美 2008/5	
Me.12	『湯浅年子シンポジウム』於パリ、 日仏修好 150 記念事業 2008/11.24 (『湯浅年子生誕 100 周年記念事業』予定 2009)	ポスター、プログラム、他 「湯浅年子メモリアル」→(Mc.61)

### Ⅲ-4. 資料整理と科学史関連資料

#### Mf：資料整理の記録と科学史関連

Mf	題 目	筆 者	掲載誌 年/月 発行者など
Mf.1	湯浅年子（原子核物理学者）		『近代日本女性史 科学』 山下愛子編 1983/8
Mf.2	湯浅年子（1909～1980） 資料整理の現状について—資料の時代区分—	松田 久子	物理学会 1987 年秋分科会予稿集 4
Mf.3	湯浅年子資料整理の歩み	八木 江里 阿部 裕子 松田 久子	《女性文化研究センター年報》 第2号(通巻9号)1988. (お茶の水 女子大学女性文化研究センター)
Mf.4	湯浅年子資料の文献情報学的研究	松田 久子	「女性のためのエッソ研究 奨励制度 平成元年度 研究報告 物理学会 1990 年秋分科会予稿集 4
Mf.5	湯浅年子資料研究Ⅱ —文献整理の文献情報学的研究の試み、仁科研 における輪講ノートについて—	松田 久子	物理学会 1990 年秋分科会予稿集 4
Mf.6	湯浅年子資料—遺品管理の方針と整理状況—	阿部 裕子	『物理学史ノート』 創刊号 1991/3
Mf.7	湯浅年子資料研究Ⅲ —湯浅年子と日仏共同研究（1978～81）—	八木 江里 松田 久子	物理学会 47 回年会予稿集 1992/3
Mf.8	フランスにおける湯浅年子	松田 久子	物理学会 1992 年秋分科会予稿集 4、『日本の物理学者』辻哲夫編著 (東海大学出版会) 1995 に再録
Mf.9	The first Japanese Woman Physicist T.Yuasa (1909～80) and Archives in Tokyo.	H. Matsuda E. Yagi	The 19 th Int. Cong. Hist. Sci. Spain, Aug. 1993
Mf.10	資料からみた湯浅年子	松田 久子	日本科学史学会科学史学校 1993/6
Mf.11	『湯浅年子資料目録』		お茶の水女子大学 女性文化研究センター 1993
Mf.12	Toshiko YUASA (1909–1980), and the Nature of her Archives at Ochanomizu Univ. in Tokyou	E.Yagi, H.Matsuda and K.Narita	《Hiasoria Scientiarum,Vol.7-2 (1997) (The History of Science Society of Japan)
Mf.13	『湯浅年子資料目録 続』		お茶の水女子大学ジェンダー研究 センター 1998
Mf.14	『『自然科学分野の女性の活動』に関する研究— お茶の水女子大学における調査及び資料研究か ら—』	館かおる	『第2次世界大戦後における日本の女 子高等教育に関する社会史的研究』 科学研究費 研究成果報告書 2006/3

## あとがき

湯浅年子が1980年パリで他界してから早くも四半世紀が過ぎたが、この間、湯浅の名は出版物や行事などに頻繁に登場して、より多くの人に関心をもたれるようになり、その生き方は人々に様々な感動を呼び起こしている。その湯浅の登場に際して、つねに欠くことができない役割を果たしているのが、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターに保管されている湯浅年子資料である。

1981年パリから戻った湯浅の遺品が、当センターの前身である女性文化資料館に寄託され、以後分類整理が行われてきている。物理学研究進展の道程とその業績、社会・文芸に亘る足跡、そして学術・文化の交流など、湯浅の幅広い活動を反映して、資料は、その内容が多岐にわたる膨大な量であり、その整理には相当な労力と知識とが求められるものであった。整理作業の過程で、1993年に『湯浅年子資料目録』が、次いで1998年に『湯浅年子資料目録 続』が刊行された。その刊行までの経緯はそれらに記載されているが、たいへん根気の要る困難な作業を重ねて、目録刊行まで達し得たのであった。

しかしそこまでの整理過程はいわば第一段階のものであって、それら前目録の改訂・増補・修正版というべき『湯浅年子資料総覧』を作成する作業がすすめられた。次いでその中から、湯浅の理解に資するための資料を選び出して、見やすく分かりやすい形にまとめたのが、この『湯浅年子公開資料目録』である。

これは以下の三部から成っている。

第Ⅰ部は、先ず湯浅の生涯を簡単に説明し、年譜や研究業績や著作によってその足跡を紹介するものである。第Ⅱ部は、湯浅資料の中から肝要なものを選び出し、それを一覧表によって示すものである。資料の大きな分類項目は、前目録のそれにおおよそ従っているが、内容によって資料を再区分し、あらためて区分毎に番号を附してその順番に資料を記載してある。前目録に附されていた資料番号も各資料に「旧資料番号」として表示してある。第Ⅲ部は湯浅他界後の追悼文や追悼行事の記録をはじめ、追想文や評伝等の印刷物、また湯浅が取り上げられた記念行事の記録など、当センターに保管されているものの一覧表である。追想や評伝などの資料は、すべてを尽くしているとはいえないが、現在なお増え続けている状況である。なお、この『湯浅年子公開資料目録』に記載されている資料は、一覧表の分類番号に従って、当ジェンダー研究センターに整理・保管されている。

湯浅の足跡は現在なお人々に感銘を与え続けており、これらの資料の多くがなお注目され続けて行くに違いない。湯浅をよりよく理解するための参考として、この目録が活用されることを願っている。

この目録の原点である『湯浅年子資料目録』および『湯浅年子資料目録 続』は、1981年以来、松田久子氏が中心となって資料整理・目録作成に、当たって来られた成果であって、本目録も多くの部分でそれを引き継いでいる。とくに第Ⅰ部のⅠ-1-(2) YUASA Toshikoでは『目録 続』の島津美和子氏の英文をそのまま使わせていただいている。今回の『湯浅年子公開資料目録』の作成には、その構成から作成まで、すべてにわたって小山直子氏が力を注がれ、資料の抽出、再整理、目録作成の作業には高木綾氏が共に当たって下さった。また整理が進められていた長期間にわたって、市井敏夫氏をはじめとするご遺族の方々や、ジェンダー研究センターに関係を持たれていた多くの方々に、さまざまな面でお力添えを頂いている。以上作業を支えて下さいました皆様に、篤く御礼申し上げます。

2009年3月

山崎 美和恵



---

**執筆および構成**

山崎美和恵 Miwae YAMAZAKI 埼玉大学名誉教授 理学博士

1945年東京女子高等師範学校理科卒業 1949年東京文理科大学物理学科卒業、  
東京都立大学助手を経て、埼玉大学教養部に助教授、次いで教授として勤務し、  
1990年定年退職。

専門分野は理論物理学、とくに素粒子論（散乱理論、少数粒子系、量子色力学 等）。  
1945年以来、湯浅と交流をもち、1965年、湯浅の紹介により、オルセー原子核研究所、  
素粒子部門のナタフ教授のもとに半年間滞在。

1994年～2009年お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究協力員

**編**

**集**

館かおる お茶の水女子大学ジェンダー研究センター 教授

小山直子 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター 客員研究員

高木 綾 お茶の水女子大学図書・情報チーム アカデミック・アシスタント

---

2009年3月30日発行

編 集 **お茶の水女子大学ジェンダー研究センター**

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
Tel 03-5978-5846 FAX 03-5978-5845  
E-mail igsoffice@cc.ocha.ac.jp  
U R L <http://www.igs.ocha.ac.jp/>

発 行 お茶の水女子大学附属図書館

印刷・製本 能登印刷株式会社

〒101-0024 千代田区神田和泉町1丁目6番地2

